
けんそう！ ～ほっ太君と恒龍と地球～

朝昼夜

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

けんそう！ ～ほつ太君と恒龍と地球～

【Nコード】

N5800N

【作者名】

朝昼夜

【あらすじ】

ほつ太君はある日、突然日常から逸脱する。そこで見たのは銀色の平原と蜘蛛人間。そこでショッキングな体験をした彼は、天から追放された恒龍と同化した。

その頃、地球は、ポロンにもがき苦しんで滅びるといふ罰を受けることとなり、真っ黒になった。それによって、地上は朝日が昇らない夜となった。

そんな世の中で次に現れたのはスペシャリストと呼ばれる鳥の羽を持った異常な集団。それによって人間は頭をおかしくされる。

社会が混乱していく。そんな中でほつ太君は成長し、やがてほつ太氏と筆者が呼びたくなるような、青年の年齢となった。その頃には彼も見事にひん曲がった性格と成り果てていたが、人間が人間を食う時代の中では、彼の性格の荒れ具合はむしろ普通であった。それ程に社会は支離滅裂だったのだ。

そんな社会で希望を掴むことは出来るのか。

プロローグ（前書き）

卑怯かもしれないけれども、いまさらながらプロローグを投稿。

プロローグ

現と幻の境界線を曖昧にするキツカケとしてその事件は起ったのかもしれない。

「もうだめだね」

少年は俯いたままその言葉を残して、現と幻の境界線を分けてくれるようなそこへと、身を投じた。吸い込まれていく彼は様々な思いを駆け巡らせながら、幻へと入り込めることに感謝を示し、再び現実へと戻る日が訪れることはあるだろうかと思像してみた。

そんな日が訪れても、きっとそれは良いことなのだろうな、と少年は思う。

頭の中で、龍に彼は話す。

「大丈夫かな？」

龍は答える。

「そんなもん、わかるか」

こうして彼は人間から少し飛び抜けてみせた。

店主は撲殺

「和田アキ子カットにしてください」

平凡な街と言ってしまうえばそれまでで、平凡な美容室と言ってしまうえばそれまでである。

街中に日々ほそぼそと生息している人々の需要に答えるために存在している美容室は、名前を「ゴリ押し」と言った。いや、何故「ゴリ押し」なのかと言えば平凡な美容室を平凡なものにしたいと願う店主が奇を衒って考え付いた名前なわけであるが、「ゴリ押し」なんて名前ウケが良いわけも無い。だが美容室は経営を続けることが出来ていて、その理由はと言えばやはり街に美容室の数が少ないことや、それと店主の腕が、悪い評判が立つことは無い程度に巧みだったからであろう。そういうわけで「ゴリ押し」は無くなることなく長々と経営を続けることが出来ていた。

だがその奇を衒った名前のせいであろうか、時折、そのへんちくりんな店の名前に似合うへんちくりんなお客が現れることがあった。そのへんちくりんが何処からお店の噂を聞きつけてきたのか店主にも誰にもわからない。もしかすると看板に掲げられている「ゴリ押し」の四文字にへんちくりんは興味を惹かれるのかもしれない。だとすれば店主の名付けは功を制していると言えるかもしれないが……。

「和田アキ子カットにしてください」

店の扉を開けて突然、仏頂面にそんなことを告げてくる人間がお客として訪れることが歓迎すべきことなのかどうかは、いまいち、店主にはわからない。彼は苦笑になりつつある愛想笑いを浮かべながら、しかしお客を追い返すわけにもいかないのです、彼女のカットを開始するのである。

「なかなか良い髪質ですね。黒の煌きが美しく現世で発光しております」

店主がその言葉を言つとお客は、

「お世辞はよしてください。むずがゆい」

と恥ずかしそうに顔を赤らめて、俯いた。その仕草は幾分か可愛らしいものだったが、店主は髪の毛に夢中だったからそれを見逃した。

ふと、店主はこの人の髪の毛を短くしてしまうことを勿体なく思った。それはもちろんお客の要望に背くことになるが、しかしその奇妙なお客の髪の毛は、ハサミで切り刻んで床に落としてしまおうのが躊躇われる程に、美しく力強い代物だったのである。

…うう、おいしい、だが、私は切ることが役割の男。私情を出しては、いかん。

というわけで、葛藤の結果、真面目に和田アキ子カットを作り上げてあげること決心した店主。ずば、ずば、とカッティングカッティング、どんどんお客の髪の毛は切り刻まれていき、繊細かつ大胆な黒髪が床に散らばっていく。店主は途中涙を零しそうになったが、職人としての意地が涙を零すことを躊躇い、そしてハサミでカッティングカッティング、ずば、ずば、和田アキ子カットを進めていく。

そして最終的にどうなったかといえば。

「こ、これは和田アキ子というより…」

お客は石を頭にぶつけられたような衝撃を与えられたあまりに、悶絶。

「モヒカンやん！」

女性は鏡を見ながら、息ぎりぎりと言った様子でそう叫び上げると、そのまま両手を耳にあてて「あー、あー」と苦しそうに呻き上げるのだった。さも現実を拒否したがる子供のようであった。

「わ、私は今日から、モヒカンガール。みんなから指をさされるんだ、あ、モヒカンじゃん、つって馬鹿にされるエブリデイ…その先に待っているのはきつと漆黒。夢などひとかけらもなしに沈没してしまうんだわー！ さもタイタニックのごとく。店主さん、どうしてくれんのこれ、本当に」

お客はモヒカンアタックを店主にかましながら抗議した。

モヒカンの先端が篋みたいにちくちくちくして、しかも元々が良い髪質だから力強い。もはやそれは髪ではなく針だった。店主は針に刺されるあまりに、細かな出血を幾箇所から噴出してしまい、貧血気味になってよたよたした。

「や、やめてください、お客さん：失敗、失敗したのです」

「失敗したらもう元通りにはならないのよー！」

女性客は目一杯の怒号と共に、拳を作っばかばかと店主にそれをたたきつけた。

女性客は格闘技でもやっていたのだろうか、拳の一撃一撃は恐ろしい破壊力。たまったものじゃない店主は、急いで奥に逃げ、そしてラーメン券十万円分を持ってきて、「これで許して」と土下座した。

許されるはずはなかった。むしろ女性客は怒り狂った。ラーメン券とか、馬鹿にすんのも程ほどにしるよ、と思った。

だが、人間としての性だろうか、しっかりとラーメン券十万円分を奪い取ってから、

「許せるわけないでしょー！」

というのだった。

拳で殴打。

拳で殴打。

ただでさえ針でちくちく身体に穴を開けられてしまっているのに暴力。じょうろのように流れていた血液がドバーッと湧き水のように飛び出ってしまった。それ程に鍛えられていた殴打だったのである。それが一度ではなく、彼女の気が済むまで、暴走の限りに続いたというのだから店主も破滅を免れない。やがて、動かなくなってしまった。

「ああ、あらあら。まあ、なんていうことー！」

店主の伏している身体は、ゴムのように骨格を関係せずに散らばってしまった。腕があらぬ方向に曲がり、両足は『く』の字に、

間接の曲がる方向とは逆の向きに折れ曲がってしまった。痙攣も既にしておらず、店主は沈黙。息もしていない。

女性客は顔面蒼白。自らが警察に手錠をかけられて連行される光景が、脳裏に浮かんだ。それはまるでドラマのようで、現実の中の非現実だった。つまり現実。

携帯電話を慌ててカバンから取り出し、119。救急車へと連絡の後、彼女は慌ててその場を離れた。手にラーメン券十万円分を持ったまま、彼女は暴走する頭のままに、考えなしに街を駆け抜ける。警察に捕まって牢屋にぶちこまれるのは、いやだった。

バスに乗り

だが牢屋にぶちこまれるのが嫌だとしても、腹が減るのは人間として当然のこと。

もちろん、ラーメン券を使わなきゃ損損である。裏面を見れば、美容室からは結構遠い位置にお店があることがわかる。そこになら警察の魔の手もすぐには伸びてこないだろう。

そう考えた彼女はバス停へと歩き、そこでバスを待った。

ちなみにこのときの彼女、白いワンピースの清楚な雰囲気の間髪が、髪の毛はモヒカンである。

はつきりいって注目の的である。職質を受けてもおかしくない勢いである。

だが幸い、彼女は職質を受けることもなく、夏空の中、バスに乗り込んだ。

運転手はハゲ親父。つぶらな瞳をさらにまん丸にしまったとさ。

「よろしくお願ひします」

モヒカン清楚ガールがやけに丁寧な挨拶をするものだから、余計に怖い。だがまあ、ハゲ親父運転手も「どうぞー」と気にしていない風を醸し出すしか他に方法は無い。下手に乗車拒否などしたらモヒカンで何をされるかわからない等ということは、バスに乗車している他の方々全員も察したところであろう。乗客は、老人一人、小学生（女）一人、女性が一人、ホスト風の若者一人、であった。その乗客の中で、モヒカン清楚ガールは圧倒的な存在感であったが、皆知らないふりのような態を崩さなかったのは、下手に目を合わせれば何をされるかわからなかったからだ。そりゃそうである。はつきり言つて、モヒカンは針のようにとんがっているのだから、頭部に凶器をくつつけて歩いて狂人といつて差支えが無い。凶器と狂気。その二つを持ち合わせた清楚ガール。

よくよく考えてみれば全然清楚じゃないということが一目瞭然である。

さて、バスが出発する。街の中をのんびり走る。途中、パトカーが何台か通過していく。モヒカンガールはその度に車内で身体をビクつかせていたが、それに伴って彼女に恐怖を感じている乗客たちも身体をひくつかせていた。みんな、彼女の一挙一動に注目である。特に、彼女のすぐ後ろで着席しているホスト風男性などは、迂闊にしていると彼女のモヒカンに突き刺されてしまう可能性もあったので、注意が常に必要である。とか言っているうちに、彼の額にチクリと一撃。

「いてっ」

小さくホスト風男性は、癖で声を出してしまった。するとモヒカンガールは、ホスト風男性に、振り向いたではないか！「いてっ」が聞こえてしまったのである。

「ああ、ああ！どうしたんですか額！ 血が垂れているではありませんか」

心配気な彼女。

「いえ、大丈夫なんで」

ひいているホスト風男性。しかし、

「全然大乗仏教ではありません。どうしようどうしよう。私、血が怖いですよねー。そうだ、絆創膏あるんでどうぞ」

そういつて彼女は、揺れる車内でカバンをこぞこぞやり始めた。

「…い、いいですって…だ、大丈夫、ですから…」

ホストは席を変えようかとも思ったが、それでは不自然過ぎるから事態が悪い方向に進むかもしれない、という想像をしまいそれは出来ない。だがこのまま席に座っていたら顔中穴だらけにされてしまう、という焦りもあった。ホストに顔は大切である。

そんな彼に、針地獄が襲い掛かる。こぞこぞやっている彼女は頭に気を配らないので、モヒカンは四方八方に飛び散るのだった。

「い、いて、いて、いてて」

彼は停車ボタンを押して、丁度バス停に到着したバスから、転げるように下車した。

「お、お客さん、金払え！」

ハゲ親父運転手が引きとめようとするが、ホスト男性はそんな場合ではない。血を垂らしながら、街の歩道を駆け抜けていった。だが、彼の災難はまだ続く。

「ば、絆創膏！」

そう、モヒカン清楚ガールも下車したのである。

ホスト男性への親切のために。

木立のアーチ

陽光が木立に遮られて、まだら模様になって地面に散らばっている。そういう地面を先端が尖っているブーツが踏みしめる。ホストの履いているブーツが、そしてそれを履いているホスト自身が、木々のアーチを走っていた。顔からちよつと出血していて、その部分を手で抑えているが漏れてしまっている。通り過ぎる通行人たちは、ホストの顔を見てはどんな出来事があったのか想像する。だが、背後から白いワンピースを着たモヒカン女が、ホストを追いかけているのを見て、大方の通行人は納得したような表情になる。もてる男はツライねえ、と誰かが微笑んでいたりする。

「な、なんで追いかけてくるんだあー！ー！ 来るな、来るなー！ー！」

ホストは完全にモヒカンガールにびびっていた。それもそのはずで、満面の微笑みで絆創膏を携えたまま全速力で追いかけてくるモヒカン女にびびらない人はなかなかいないだろう。筆者も不思議に思う、何故、彼女が満面の微笑みなのか。はつきりいつて理解の範疇を超えている。モヒカンにされてしまい、さらに美容室『ゴリ押し』の店主を殺傷してしまったことで気が狂ったのかもしれない。だとしたら、ある意味彼女も被害者である。現代社会の闇である。だが、ホストはそんなこと知ったことではないだろう。はつきり言うて迷惑以外の何者でもないに違いない。

「絆創膏が必要よー！ー！」
叫びながら笑顔。満点の笑顔。木立のアーチで男女が追いかけてく。

必死に汗だくで走る男。笑顔で爽やかな汗の女。

ドラマとかに使われそうな状況でもあるが、モヒカンだけがギャグ。ほかは別におかしくないけど、モヒカンだけは浮き上がるほどおかしい。だけどそのモヒカンの本人は満点笑顔。ある意味ホラ

「だよね。」

そんな筆者の感想を述べている間に、事態は進行していた。いや、違う、停止していた。

停止した。時が。

時が停止したということは、ひらひらと宙を舞っている途中だった葉も動きを止め、逃げ回っていたホストも間抜けな顔のまま止まり、追いかけているモヒカンガールも狂氣的な微笑みそのまま停止した、ということである。通行人だって動かなくなった。

時はピタリと停止し、人々は身体を一ミリたりとも…沈黙の世界。静寂の世界。狂った世界。風も止まり生命の息吹はどこにも響かなくなった。

そんな中、木立のアーチの、一本の幹からひよっこりと、顔を出した奴がいた。そいつだけが時を動いていて、まるでそいつが時を止めたようでもあった。お面を被っていた。

「第一段階がこれにて、スタートオ……」

彼は般若のお面をつけている。それ以外は全身黒タイツ。一見すると変態だが、よくよく見ればさらに変態に見えるかもしれない。そういう奴が、ひよっこりと、木の幹から般若の顔を出したのである。音も動きも無い世界で、彼だけは音を出して、彼だけは動作している。

般若面の、変態黒タイツ男。

「よしよしよし。よしよしよし」

何をそんなに肯定しているのだろうか。繰り返し「よしよし」言っている彼は、まずモヒカンガールの鋭利なモヒカンに触れてみてから、身体を反射的に飛び跳ねさせた。「うふい」と奇妙な呻きを発してから、続いてホスト男に近づき、そして彼の身体を持ち上げた。「うっほ」とか言いながら。腹辺りから、荷物を運ぶかのように、「おいっしょい」という言葉と共に、般若面黒タイツは、一拳一動しないホスト男を、どこかへと運んでいくのだった。「うっふふふふふ」とか言いながら。

涎

ホストが目を覚ました時、彼の視界は漆黒で夜よりも暗い。何も見えない。

ホスト男は身体を動かさそうと思ったが、動かない。自分が椅子に座っていることはわかるが、縄に身体をぐるぐる巻きにされていて、彼は椅子に縛り付けられているのだった。ただ口は自由だったので、「お、おい！」だとか、「誰かいなのか！」だとか叫ぶ。声の響き具合から、自分の座っているこの漆黒が、狭い屋内であることが彼にわかった。狭い屋内で身動きが取れないということはホスト男にとつて不快だった。ホスト男は、じたばたして、なんとか動こうと思った。

縛りは強く抜け出せる気はまるでしない。

ホスト男は、青ざめる。身の危険を感じる。

『ようこそようこそお……。せまーい真っ暗な部屋に……。歓迎しているよお……。』

スピーカー越しのような声がホスト男の耳に鳴り響く。男性の割に甲高い、一言でいってしまえば気持ちの悪い声だ。犯罪者はこういう声じゃないだろうか、とホスト男性は感じそのことが何を意味するのかと悟って冷や汗。椅子でガタガタと暴れる。だが、ちつとも、どうしようもない。

『むだむだむだむだそんなことをしても体に乳酸が溜まり込むだけだから遠慮しなきゃあだめだめだめだめ。今日は君が心を転じさせて何かへと羽ばたく日。その水先案内人が僕でございます。』

何に転じるかはあなたの精神次第……。』
スピーカー越しの声はそこまで言うと、神経に直接鳴り響くようになうざつたらしい、いわゆる超音波的な奇声を断続的に発生させ、漆黒の屋内に反響させた。ホスト男は耳を塞ぎたいと思ったが縛られているからその願いは叶わない。超音波みたいな奇声はホスト男

の神経を捻じり切るように痺れさせた。

「うぎゃああああ」

やがて奇声が止むと、その闇夜より漆黒な部屋に、光が：その光は、ディスプレイの輝きだった。ホスト男の目の前に、長方形の光「うつ」と思わず眩しさに目を眩ませた後、ホスト男はディスプレイに浮かんでいる映像を……見せられる。ディスプレイでは映像が絶え間なく流された。

映像では、卵が、あった。

卵は群青の色。青空のように爽やか。

パカッと横にひびが入り割れた。割れた中から生き物が出てきた。それは蜘蛛の足を持った人間だった。それがよちよちと、卵から歩きはじめた。

カメラの方向へと歩行する蜘蛛足の、髪が長い人間。よたよた、しながら、確実にカメラの方角に近づいてくる。つまり、ホスト男の方向に。そして、カメラ一杯に髪の毛。つまり真っ黒の映像。顔が、現れた。真っ暗を切り裂き、顔がホストを死んだ魚の目で射抜く。

そこにあつた顔は血の気の薄い、にんまりと微笑んだ知らない人物の顔だった。女の人。

そして二十分後に、映像は途切れる。ぷつりとフィルムが千切れたみたい。女の人の顔は消えた。しかし、それからしばらく後に、映像は再び始まる。

銀色の平原。なぜ銀色なのかはわからないけれども、薄く雪が積もっているような、そういう銀色が映像として広がる。数本の枯れている侘しい木でさえも、銀色は修飾している。

そこにも蜘蛛の足をした人間たちがいた。一人ではなく、群れ。銀色平原を横切っている。よたよた、よたよた、長い黒髪を揺らしながら、平原を進んでいる。

群れは通り過ぎると、また次の群れが現れる。それが繰り返され、これもやはり唐突に、映像は千切れて、部屋は真っ暗になる。

次の映像では、再び卵が映りこむ。

今度は黄土色の卵だった。それが時間が経った後に、今度は、縦に割れる。縦に割れたそこから真っ赤な絵の具が流れはじめるとろとろと流れるその絵の具はやがてディスプレイ一杯に広がり、真っ暗な屋内ですらも赤く染める。

そしてそれも、やがて唐突に映像が千切れる。赤色に染まった部屋は、再び漆黒に塗られた。

そこから映像は長々と続いた。終わりがなかった。

途中から、既にホスト男はホスト男ではなくなった。

姿形は変わらないけれども、ホスト男ではなくなった。

彼は涎を唇の端から零す。たらんと垂れた一筋は、極小の川となつて、床を流れた。

木立のアーチの通路で、モヒカンガールは驚愕のあまりに「うわあ」と、目を丸くした。

先程まで彼女の視界から小さく映っていたホスト男の姿が、何か瞬間移動をしたかのように瞬きをする間で目の前に移動してきたからだ。モヒカンガールは思わず彼の胸元に飛び込んでしまつて、照れて俯いてしまう。尖っているブーツが視界の先にあった。

モヒカンガールは、ふと、告白しちやおうと思つた。

だから俯いていた顔を勢いよく持ち上げ、

「こんな私ですが、つきあつてくれませんか、突然ですが！」
と唐突に述べた。

「……………」

返答は無かつた。ホスト男は、何か遠くを見ているような虚ろな目をしていて、どこも見ていないような感じに陥っていて、彼女の言葉は耳に入り込んでいないようであつた。

モヒカンガールは、おかしいな、どうしちゃったのかな、と思っ
た後に、先程まで彼の額から流れていたはずの血が何時の間にか止
まっていることにも気がついた。その代わりに、ホスト男の額には
小さなかさぶたが一つ。…絆創膏はもはや必要ないようだった。

彼の唇の端から涎が一筋、垂れている。

「どうかしたんですか？」

様子がおかしいと思い、モヒカンガールは尋ねる。ホスト男だっ
たものは答えない。

「……………」

「……………」

二人の間に無音の風が鳴る。二人はしばしそこで立ち尽くした。
彼女は見つめていて、彼は見つめていない。その状況が長らく続
く。

通行人たちはそんな二人を見て、コメディー系の撮影をしている
のかと辺りを見回すものが多かった。木立のアーチに佇むその二人
は、明らかなる異端だった。

時が流れる。木立のアーチに風が吹く。彼女のワンピースの裾が
ふわりと揺らぐ。彼の涎がたらりと地に落ちる。

ホストだった男が、一度だけ、こくりと頷いた。客観的に見れば、
それはひどく無気力に首を俯かせた様子でしかなかった。だけれど、
モヒカンガールの笑顔は花咲く。

「カップル成立！」

ぼーっと立ち尽くしている彼に彼女は、喜びのあまり飛び込んだ。
モヒカンは奇跡的に彼に突き刺さらなかった。モヒカンガールは
一瞬臭いを嗅いだ。生臭い不快なおい。だけど彼女は、不快を途
端に受け入れて、ホストだった男の手をぎゅっと、離れないように
強く握り締めた。ホストだった男は拳を握られても涎を垂れ流して
いるものだったが、一瞬だけ、実は瞳が多少、開いていたのだった。
二人はそのまま木立のアーチを歩いていく。

そんな二人を通行人が、暖かな目で見守っていた。

密かに般若の面の黒タイツも。

ほつ太君登場

さて、そんな出来事が街で起こっているその頃、この物語の主人公である『ほつ太』君は、自分と他との存在との違いは何なのだろうか、とか、人とは何だろうとか世界とはなんだろう、だとかいう、実に答えが出づらい考えに落ち込んでいました。

彼がいるのは自宅の中。母親や父親や姉弟はみな出掛けていて、ほつ太くんは一人、家の居間で寝転んで扇風機と遊んでいました。扇風機と遊びながら、思索にふけっているのです。

「ヴぁ、ヴぁヴぁヴぁぁー」

ファンが回転している扇風機に声をあてて遊んでいて、実に呑気に見える風景であるが、しかし彼は扇風機の電力でファンが回転する様を見つめていると、『螺旋』という二文字を頭に浮かべたのでした。

「ヴぁ、ヴぁヴぁヴぁんん？」

本人は『螺旋？』と呟いたつもりである。扇風機から螺旋という言葉を思い浮かべるなんて、ほつ太くん賢いじゃん！なんて褒めてあげたいところですね。あるいは馬鹿丸出し、とけなしたいですね。遊ぶことに飽きたらしく、彼は扇風機を止めました。切のボタンを押して。

さて、喉が渴いた彼は冷蔵庫を開けて、中に冷蔵されているレモンジュースを取り出しました。コップに注いでがぶがぶと、粹に一気に飲みすると、テーブルにガツンと思いつきりコップを叩きつけました。子供らしい、実に勢いのある様相です。そして扇風機に飽きたのでしょうか、テレビを点けました。テレビではニュースをやっていました。思案に耽っていた彼は気難しい皺を額によせたまま、ニュースの小難しく聞こえるお話たちに耳を傾けました。そこでは人々が対立していて憎しみの花瓶を投げ合っていました。どこかで

争いが勃発している様子なのです。どこか遠い国の話で現実味が無いとほっ太君は感じましたが、火瓶で燃やされている人の不幸な姿は、ほっ太君の瞼で焼き付きました。

それを長いこと見た後、画面が切り替わりました。

アナウンサーやコメンテーターが様々な小難しい言葉を放っています。国境問題。昔から根付いている土地の問題。人々の習慣の違い。何だか言葉の断片しか理解できません。よく意を得ないほっ太君は、自分が世界から遅れてしまっている焦りを感じて、気分が落ち込みます。頭が良くなりたいと、ふと願いました。

「ら、ら、らせん」

口ずさみながら彼はテレビを消し、そして居間を見回しました。

普段となんら変わらない、人間数人が住むには丁度良い広さ。窓から日差しが一つ。だらだらと、光線が差し込まれています。ガラス細工がたくさん置かれているのは、家族の誰かの趣味です。そのガラス細工に光がぶつかることで生じる乱反射のような煌きを綺麗だなあと思います。

しばらくそのガラス細工にみとれてしまいました。孔雀のガラス細工です。羽が七色。

ほっ太君がそれにもとれていたのは随分と長い時間でしたが、ふと何処かから聞こえてきた声で意識を現世に取り戻しました。

『憎しみには憎しみを返さなければあなたは報われない』

え、とほっ太くんは思わず絶叫してしまいました。慌てて部屋内を見回しましたが、しかし何も見当たりませんし、景色に変化もありません。静寂の昼間です。しかし、もう一度聞こえたのです。無音の部屋に、響いたのです。

『憎しみには憎しみを返さなければあなたは報われない』

なんだなんだ、という慌てた思いの後に、ほっ太君はその響いた言葉の意味を掬い取ります。そして、その意味に気が付いた時に、ほっ太君は非常に不快な気持ちになりました。それは『やられたらやり返せ』ということじゃないか、と感じたからです。それでは世

界は憎しみだらけになってしまふのだから、憎しみには憎しみを返すことは社会にあつてはならないことだ、と、ほつ太君は思つたのでした。

子供の割には、非常に良い考えの持ち主です。もちろん子供の思うことだから説得力はまるでありませんが、大人になつてもそういう考えを持ち続けられれば、ほつ太君は素晴らしいですね！ですが彼はまだ子供ですから説得力はありません。たわごとです。

さて、足にチクツと何か刺激がきました。ほつ太君の右足です。

ほつ太君は「いてえ」と言いながら右足をキヤツキヤと遊ばせまですると針を刺されたような刺激はさらに強まり、ほつた君のその幼い赤みを帯びている顔をパグのようなしかめっ面にさせます。

「なんだ、なんだこれ痛いぞおおこれはあああ」

彼は絶叫しながら痛みを取り除きたいと思い、居間でとにかくひたすら蛙のごとく跳ね回ります。すると、もう一度声が鳴り響くのです。その声は、人間の声ではないようにも思えます。どちらかという動物に近い、低めの、胃に届いてくるようなボイスです。

ほつ太君は声の出所を探そうと思いましたが。正直、声を恐ろしく思う気持ちが強いのですが、しかし行動を起こさずジツとしていても怖いので、だったら逃げ出すか探すかです。ほつ太くんの場合は探すことを選択しました。好奇心旺盛な子供なのでね、ほつ太君は。

まずはガラス細工からです。孔雀、鯨、イルカ、狼、翼、虹、などなど、様々な種類のガラス細工が居間には置かれています。彼はテーブルに置いてあつたボールペンを右手で持つと、一つ一つのガラス細工をおっかなびっくり突つつくわけです。

つんつん。つんつん。

その途中、イルカを突つところとほつ太君が息を呑んでいたその時、彼の背中に涼しい風が吹き当たりました。あれ、と思つたほつ太君は背後へ振り返ります。すると、切ボタンを押したはずの扇風機が何時の間にか回転しているではありませんか。声を響かせてい

る謎の存在が扇風機を起動させたに違いありません。あまりの出来事に、ほっ太君の汗腺は爆発して嫌な汗が全身から吹き出まして、汗まみれです。

居間は静寂です。ボールペンを持ったまま奇妙な体勢で停止してしまつたほっ太君は、そのまま動けなくなつてしまいました。扇風機だけがガガガと古ぼけた音を鳴らしながら、回転しています。非常に何とも言えない状況です。ほっ太君は透明人間の存在を想像します。そういう奴が今、この居間で密かに音を鳴らさず、こつちを見ているのではないか…あるいは、こちらを殺そうとしているのではないか…。

ほっ太君は怖くなって、無言のまま、しかし先程のニュースで花瓶を投擲し合つていた人々と同レベルの慌てている表情で、何をしたかと言えばボールペンを突き出したりひっこめたりしました。

何かが今、居間の空間でひっそりと息づいているのだとしたらボールペンで闇雲に空気をつつかなければ何時殺されるかわかつたものではないと感じたのでしょうか。ですが、馬鹿げています。客観的に見たらどう見てもただのお馬鹿さんです。フエンスングの練習にも見えません。

静寂の居間で行われる、そのシュールな光景。回転する扇風機。ボールペンを出したり引いたりする少年。陽光を反射させて煌々ガラス細工たち。

『憎しみには憎しみを返さなければあなたは報われない』

声がもう一度響きました。そして、テレビが点きました。真っ暗だったディスプレイに、映像が出現します。そこには、花瓶を投げ合っている人々が映されてはいませんでした。奇妙なものが映つてはいました。

「ひえっ」

思わずほっ太君は嘆きます。

そこに映っていたのは見たことも無いような、異様な姿。

般若の面を被つた、黒タイトの男が、画面の中央でパイプ椅子に座

ったまま、少年に手を振っているのです。右に左に、勢いよく、手を振っているのです。

バラエティーとかホラーとか、そういう系の番組かなとも少年は思いました。ですが、その般若面黒タイツ男が手を振っている映像は、何分間も途切れることなく続くのです。

ほっ太君は気がつかざるを得ませんでした。扇風機の回転も何時の間にか激しくなっています。彼の感情を掻き立てるがためであるように、風が強くなっています。ガ、ガ、ガと故障したような音を鳴らしながら。

『ようこそお…ようこそお…真つ暗い部屋へと、正体するよお……』
黒タイツは、怒りを剥き出しにした面のままに、ほっ太君に向けて語りかけます。

男性の割に甲高い気持ちの悪い声は、先程まで何度も鳴り響いていた声とはまた違う種類のものでしたが、ほっ太君がそれに関して思案する時間はありません。

なぜならば。ほっ太君の身体、全身が、ガラス細工のように乱反射してしまっています。キラキラと居間で輝きます。

「う、うわああああああ」

次の瞬間には、ほっ太君の姿は居間から消えてしまいました。

ガラス細工だけが取り残され。

扇風機は回転を、止めました。

ほっ太君

ほっ太君は目をぐるぐると回しながら水に吸い込まれるように、排水管を駆け巡るように、どこかへと流されていつてしまえます。体が自由に動かないのはおそらく水圧のせい、汚れているせいだろうかほっ太君の全身の肌はムズムズしました。むず痒いのです。水に流されながらほっ太君は自らの体を爪で掻き毟って、かゆみを多少は薄めたいと願いますが駄目です。かゆみは増すばかりで、二本の腕ではフォロワーが足りないということ、かゆみはほっ太君の理性を取っ払います。ほっ太君はかゆみをごまかすために、一時的にでも忘れるために、彼は絶叫します。

「だめだ痒い！俺はこんなかゆみを体験するのではなくもつと違うすごいことを体験するために生きているんだああそれなのにかゆいかゆいかゆいかゆいむず痒い、助けて助けて助けて痒いよおまじで、どうしようもないのかな誰か救ってくれないのかななんでこんな痒いんだああ」

しかしかゆみは増長します。自重しません。ほっ太君の辛辣な咆哮など『聞いてません』とでも言うかのように、かゆみ野郎はさらにほっ太君をいじめめるのです。そもそも何故水流がほっ太君にかゆみを提供するのでしょうか。ていうか、なぜほっ太くんは、水流に吸い込まれているのでしょうか。ていうか普通、息が出来ないですよ。叫ぶなんて出来るはずはないんですね。つまり、ほっ太君はこれから今までは違う別世界へと跳躍するということなのかもしれません。水の国みたいな、不思議の国みたいな、そういう空間へと跳躍する前フリなのかもしれません。しかし現実には違います。ほっ太君は全身かゆみに支配されながら、漆黒の部屋へと招待されてしまったのです。ぼすんと水流と共に、ホスト男が座らされた部屋と同じような漆黒の、極小の映画館みたいな所に弾き出されました。ぼっしゃあー、と水流とほっ太君が天井に取り付いていた

パイプみたいなところから流れ出てきます。

ほっ太君はしばらく、死んだ人のように、うつ伏せになって動きませんでした。やがてピクリ、と魚が跳ねるかのようにして動く、そこから後は、かゆみのせいか、踊り狂います。びたんびたん、とどうみても魚が水の外の世界に出たときにもがき苦しむ姿と同じです。きつとかゆいのでしょうか。全身が。

「うひ、うひひ、ひひ、うひひひひ」

と言いながら跳ね回るほっ太君が、やがて息切れを起こした頃に、真つ暗だった部屋に光が灯りました。ディスプレイに、映像が出て来たのです。

『本日の解説は私、TAKESHI。実況はGLOBALさんです。GLOBALさん、本日はよろしくお願ひします』

『はい、よろしくお願ひします。実況は不慣れなので噛むのが今から怖い。嫁に怒鳴られる(笑)』

『GLOBALさんの妻であるローカさんは鬼嫁として有名ですね。本日はテレビ越しで?』

『いいえ、後ろの方に(笑)』

『え、あ、本当ですね。ローカさんが背後で見守る中でのGLOBALさんの実況というものも、本日の目玉と言えるかもしれません。試合開始まで、後三十分です』

『いやあ、怖い怖い(笑)』

『(苦笑)』

ほっ太君は全身を掻き掻きしながら、ディスプレイへと顔を向けます。野球の試合が行われる直前の様子だった。TAKESHIとGLOBALの顔を見ながら、ほっ太君は思う。というか、呟く。

「ここ、どこ」

当然の疑問である。彼は全身を掻き掻きすることを怠らないようにしながら、そのディスプレイとパイプ椅子しか置かれていない部屋を見回した。天井にパイプが付いているところ以外、壁しかない。そう、扉だとか窓だとか言うものは設置されていないように見えた。

ひたすらに壁。そしてディスプレイとパイプ。あとパイプ椅子。それだけしか、その狭い屋内には置かれていなかったのである。

GLOBALなTAKESHI

『さあ試合が始まりました。最初のバッターは神速として知られるモルツ選手です。外国からの助っ人選手として活躍している、今もつとも期待されている選手の一人ですね、GLOBALさん』

『そうですね。モルツとはよく飲むんです』

『それはちよっとお洒落な感じのところですか？』

『そうですね。モルツつてのが結構気が良い人なんですよ。だからいつもね、ジョークで笑わせるんですよね、みんなのこと。気軽なジョークで。モルツのいる所には笑い生まれるんです』

『チームに対して試合だけでなく、まあ、そういった別のところでのコミュニケーションも欠かさないっていうのは、まさにチームの中心的存在と言えますよねえ、GLOBALさん』

『そうですね。モルツは人気がありますよ。彼のことを悪く言う奴はね、僕、探してみただけど、いませんね』

『探すとは少し意地が悪いようにも（笑）。ですが、そうですね、いいいですか』

『ええ、そうですね。あ、三振』

『おおっと、モルツ選手…にしては珍しいですねえ！ 豪快な三振だ』

『三振はたしかに珍しいですよねえ』

ほつ太君は不愉快です。モルツのことなんざ正直どうだっていい。彼は野球に詳しくないのでした。はあ、とため息を付いて何か事態を突破する方法を考えようとしますが、何にも無い部屋ですから、解決策が見つかるはずありません。暗闇の中を手探りで色々探索してみたりもしましたが、残念なことにはほつ太君がこの事態を突破できる足がかりになるようなモノさえも見つかりませんでした。そここうしている内に、ディスプレイの中が騒がしくなっています。

『あ、モルツ選手怒ってますねえ。…これ…は…あ、乱闘です、

乱闘ですね！ モルツ選手、相手の投手に怒り奮闘の様子です』

『おかしいなあ。彼にしては珍しいなあ』

『…おっと、何を言ってるのか実況席の方まで聞こえてきますねえ
……何々、あ、どうやら、「ローカは俺の嫁」と言っているようです』

『ええっ!?!』

『投手の方も負けじと「ローカは俺の嫁」と唾を撒き散らしながら
叫んでいますね。どういうことでしょう、夫のGROBALLさんとして
は心中穏やかではありませんねえ』

『他人事のように言わないでくださいよ。嫁は後ろにいるんですか
らね、って、あれ、いない』

『あ、ほんとだ、ローカさんが行方不明です！ どういうことでしょう、
これは野球の実況中継どころではないかもしれないかもしれませんね。事
件の匂いです、もしくはスキャンダルの匂いですね！』

『興奮しないでくださいよ、ほんとに。でもそっぴやね、先日ロー
カの様子がちょっとおかしかったっていうか、あんま最近口利かな
いんですよ。いつも機嫌が悪そうな顔してて愚痴ばかり零すし、
あれ嫌われようとしていつてたとかそういうことじゃないですよ
ね、ね？ああ、なに、これ、ドッキリとかじゃないの!?!』

『ドッキリではありませんね。あ、殴り合いに発展しています！

どうするんですかGROBALLさん！頑張らないと嫁取られますよ。

…あ、ほら、ローカさんがあそこに!』

『…え。…あ、ほんとだ！ローカの奴、何してんだあれ』

『旗を振っているようにしか見えませんね』

『なに、どういうことだ、あれ』

『応援してるんじゃないですかねー、どちらかを』

『冗談言わないでくださいよほんとに。ローカは俺の嫁だよ!』

『GROBALLさん、これはあなたも参戦するしかありませんよ。
いくしかありません』

『無理無理無理。二人ともあれ、現役だよ、現役!』

『GLOBALさん体鍛えてるじゃないですか、大丈夫ですよ。死
なないから』

『なにこのバラエティーみたいなノリ。ああ、こなきやよかった。
絶対ドツキリでしょこれ』

ほっ太君は不愉快です。全身を掻き毟りながら、しかしディスプレイに気がいってしまう己に対して腹を立てたい気分でもありません。GLOBALさんがグラウンドを駆け抜けていって、喧嘩を仲裁しようとして試みています。妻のローカは向こう側で元氣一杯に旗を振っています。ドクロが描かれている物々しい黒色の旗ですから、不吉です。そうこうしている内に、喧嘩の仲裁をする間もなく、モルツの拳でぶん殴られてGLOBALさんは気絶。担架で運ばれていきました。他の選手などもようやく止めに入りましたが、モルツと投手のやり取りは全身全霊といった感じで、下手に止めに入ろうとすればGLOBALさんの二の舞になることが誰にでも理解出来ました。相変わらず、妻のローカは映像の端で黒旗を振っております。何だか恐ろしい女です。

『ただいま、球場内は非常に緊迫した様子です。ゲームも中断している状況で……』

と、TAKESHIさんの凜としたよく通る声が、ここで、プツリと途切れました。映像が消えたのです。部屋が漆黒になります。

「あっ」

思わず叫んでしまったほっ太君の声が、空しく漆黒の部屋で響きます。誰も返事をしてくれません。誰も声を聞いてくれません。ほっ太君は途端に世界との繋がりを絶たれ、一人にされてしまいました。実況中継などという騒がしい喧騒であっただけに、それが前フリ無しで途切れるということは精神的な寂しさを助長させます。ほっ太君は茫然としたやりきれない気持ちになりながら、パイプ椅子に腰を下ろしました。

ぬちやり。

尻に泥の塊のような冷たいぬめり。気が付かなかったほっ太君は、しばらく事実を受け入れることが出来ず完璧に動けなくなりました。停止です停止。完全に停止です。

その場で彼は、何十分も動きませんでした。しかし微振動はしています。体がぶるぶると、何かを訴えたがっているように、ぶるぶると微振動です。そして、いつか涙がこぼれました。一粒。

その流れで、涙がいくつもいくつも流れます。一粒二粒どころではありません。

ほっ太君、大号泣です。

「う、うわああ、うわ、うわわ、ああ、うわわ、なんで、なんで、っひく、なで、こんなん、こんなっひく、なんで、うわ、うわあ、うわわわあ、なんで、こんなななな、っひく、こんな、っひく」

ほっ太君は夜の月に向かって吠える犬のように、延々と吠え続けました。悲しそうに顔を真っ赤にしてわんわん泣きたいだけ泣きましました。突然の出来事の連続でたまってしまったストレスを爆発させています。ほっ太君はわんわん泣きました。暗闇の中で一人、先行きが不透明な苦しみに包まれながら、一人、わんわんと泣きましました。

螺旋ソング

やがて彼も疲れて泣き止みます。その頃には、今が、朝昼夜のどれなのかもわかりません。時間感覚の失われた世界の中で、ほっ太君という少年は、尻が不愉快なまま身動きをせずに俯いています。泣き腫らしたことによって体力が無くなってしまい、動く気力も失われてしまったということでしょう。

漆黒の部屋で、ディスプレイも沈黙を守っています。暗闇のそこでディスプレイの部分は漆黒がより濃厚です。長方形のその濃厚な漆黒は、夜の暗闇の幾倍も黒を主張していますね。ほっ太君の意識はその主張にやがて吸い込まれるように溶け込んで行ってしまいそうになります。そこから逃れるために視線は俯いたままにしなければなりません。ただ気力が無くなって何もしたくないほっ太君は、不思議と、その吸引力のある漆黒を、見ていたいという願望に捕らえられます。何か疲れた神経を、癒してくれるような、そんな奇妙な感覚が、その長方形の黒には確かにありました。まるで疲れた時に食べるデザートやフルーツのように、その誘惑はほっ太君にとって甘美でした。

長いこと、彼はその甘美に浸りました。

「……………ら、ら、らせん……………ら、ら、らせん……………ら、ら、……………」

ほっ太君、歌いだしました。甘美に浸るあまりに歌です。やけくそにも見えるリズムを足で踏みながら、螺旋ソングを彼は歌います。歌に夢中のはずなのに眼はしっかりと黒のディスプレイに向けられているのが不気味だったりします。ほっ太君はリズムに乗っています。足でリズムです。

やがて、そのリズムに合わせて別の旋律が流れ始めます。ほっ太君の子供声以外には無音だった室内に、何かゴオオというくぐもったような音が響き始めたのです。それが螺旋ソングに重低音として加わり、歌に厚みを持たせます。ほっ太君はノリノリです。何で重

低音が響き始めたのかということに頭を使ったりはしない馬鹿です。歌について解説しましょう。

基本的にはらせんという詞しか出てきません。ら、ら、らせん、というスタッカートを意識している単調かつ平坦なリズムで、行進曲って感じですよ。ただ盛り上がることも無く、ひたすらにリピートされるら、ら、らせんという言葉の繰り返し返しが、聴く者と唄う者の思考能力を剥奪します。洗脳ソングと断言してしまっても良いのかも。それに加えて重低音。それが歌に迫力を持たせることによって洗脳レベルが上昇します。重低音が聴く者と唄う者の心臓を圧迫し、視界を狭めます。どどど、と津波のようにら、ら、らせんという詞が漆黒の部屋で重圧的に繰り返されることによって、唄っているほつ太君自身の神経をアングラ的な、どことなく重苦しい方向へと導いて行きます。それが螺旋ソングです。無限大に唄う者の神経を圧迫させる平坦なリズムが連なる、何だかあんまり体に良くなさそうな歌です。螺旋ソングなんていうネーミングが悪いのかもしれない。まあ名づけたのは筆者であって、ほつ太君自身は自分の歌っているこれが自分を追い詰めているということにすら気が付いていません。彼の目は据わっています。手は拳で、力強く握り締めているその隙間からは汗が滲み出ています。足でリズムを踏むことは忘れず、据わっている目は完全にディスプレイに吸い込まれています。よくよく考えてみなくても、ほつ太君が重症患者のように見えます。そんな彼ですから、重低音がどんどん音量を増していることにも気が付きません。ほつ太君自身のら、ら、らせん、という声が掻き消される程に、大きくなっても気が付かないのです。

今や漆黒の部屋には、ゴオオという重低音ばかりが鳴り響いているのです。一体どこから。

そう、もちろん、パイプからです。天井にくっ付いているパイプからゴオオという重低音は漏れているのです。つまりほつ太君はいまだ気が付いていませんが、さっき彼がこの部屋に訪れたその直前にも、このゴオオという重低音は鳴り響いていたのです。つまり流

プ椅子ごとほっ太君のことも巻き込みます。ぐわっしゃああああ、は音楽を全てぶち壊し、目が据わっていて廃人のようだったほっ太君のことも現実に取り戻してみせました。「うわああ、なにこれなにこれ！」言いながらディスプレイに頭をぶつけてしまうほっ太君。たんこぶが出来る勢いですから痛そうです。アドレナリンが一気に放出され、たんこぶなど気にもならないほどのパニック状態に陥ってしまいます。「うぎゃああああ」数分間、汚水の濁流は部屋で暴君でした。掻き乱されながら、ほっ太君はへとへとになりながら、しかし途中から、何だか全身がふわふわ気持ちよくなってきたので、完全に幸福を感じたほっ太君。

そのまま眠ってしまいました。正確には、気絶してしまいました。

蜘蛛人間と少女

船に鉛弾が炸裂して弾ける。そこに乗っている乗客たちはみんなお面をつけていて、黒タイツ。船は鉛弾のせいで沈没を始め、海の深みに吸い込まれていく。だけれど、黒タイツたちは、その黒タイツから、漆黒の羽を産み落としてそれで飛んだ。空は機嫌が良い真っ青で、そこを漆黒のカラスのような羽がいくつも舞い上がり、くるくるとそいつらが踊りまわって円を描く。黒タイツたちは鉛弾をぶちかましてきた奴らのおんぼろ密輸船を完膚無きにまで食らい尽くし、余すところ無く胃袋に仕舞いこんだ。ぐちゃぐちゃと歯で、噛み千切って、飲み干して、またご機嫌な空へと舞い上がり、踊り続けるのだった。その内彼らはどこかへと飛んでいった。

そんな夢を見ていた。ほっ太君が見た夢は、そこで終わり、漆黒の部屋へと意識は回復した。先ほどまでご機嫌な青い空で、広大な気持ちにさせられて良かったのに漆黒の部屋へとリターン。不快指数が跳ね上がりつつ、ほっ太君は現状の把握を試みる。彼の頭はしばらくぼんやりとしていたが、数分頭を抱え込んでいると、ぼやけていた視界や思考能力が、除々に鮮明を帯びていった。

洪水のことを思い出し、頭をさすると、たんこぶが二つあることに気が付く。

「いててっ」

優しくたんこぶを労わりつつ、洪水の形跡が一つも残されていないことを彼は不思議に感じる。部屋は湿りさえも無く、むしろ乾燥している風でさえあった。変化は、無い。体の痒みも全く無い。

いや、だが、ほっ太君は見つけた。

暗闇の中で横たわる、先ほどまでは無かった存在。

それが彼の視界の先で、地面に横たわっている。ピクリとも動かず、うつ伏せで、倒れている。

ほっ太君はしばらく目を細めた後、慌ててそれから目を離した。

そのうつ伏せになっているのが一糸も纏っていない上に、しかも、まだそれは正確にはわからなかったが、確かなことではなかったが、そのうつ伏せになっている裸が女である可能性が高いと気が付いたためである。若いほつ太君からすれば、その露出はあまりに衝撃的で赤面するに充分過ぎた。彼は途端にしどろもどろになり、もじもじして何だか恥ずかしそうな感じになってしまい、そしてそのままほつ太君、動かなくなってしまった。目の前で同年代とおぼしき異性が裸でうつ伏せになっていてしかもこの部屋には他に誰もいないというこの状況をどうしろと言うのだろうか、なんて、ほつ太君は何かしなくてはいけない使命感に囚われ始める。っていうのは、服を着せてあげなくてはならないという使命感である。裸で倒れてたら風邪をひいてしまうかもしれない、だが、近づいていいものか、近づいた瞬間に彼女が目を覚ましたら自分は完全に変態もしくは痴漢として認識されて悲鳴を上げられてしまうに違いない、という風なほつ太君の葛藤。葛藤しているほつ太君の顔は夕陽よりも赤い。

彼の体温は上昇している。だが倒れているその裸体は、暗闇で遠目から見るにしても、冷えているのが理解できた。それ程に、青白いのだ。早く服を何か着させてあげなければ凍死する可能性もある、なんてことが脳裏によぎり、彼は自らが着ていたＴシャツを脱ぎ、横たわっている彼女に被せてあげた。そこから先は、見ないように触れないように考えないように、という三つの心構えを構えて、パイプ椅子に座って目をつぶった。見ないように触れないように考えないように。ほつ太君はその心構えについて『三ない』と命名する。ほつ太君は『三ない、三ない、三ない』と繰り返すように呟きながら、コチコチ緊張した姿勢でパイプ椅子で固まり続けたのであった。

だがその三ない法則を破ってしまった。ほつ太君は脳内で、脳味噌の迷宮の中で、倒れている青白い体のその肌色を思い出してしまったのである。うつ伏せになっていて服を着ていないので尻が剥き出しだったというその衝撃映像を頭で再びイメージしてしまい、そ

して、完全にこびりついた。彼の脳内でその光景が完全に定着してしまつて動かなくなつたのである。そうなると大変で、次々と三などの心構えは破られる寸前。三角形の結界の一部分が壊れてしまつたらどうなるか、と言つたら、あとはずるずるずる全部の結界が崩壊するのを待つだけの話である。見ない触れない考えない。彼はその己で形作つた法則を、結界を、一瞬にして自ら崩壊させてしまい、パイプ椅子から勢いをつけて立ち上がった。下の方も立ち上がつていたのは言うまでも無いが、正直、筆者としてはこれ以上の痴態をほつ太君には犯して欲しくないのです、こつから先は自主規制にしたいなあ、とか言っている内に、ほつ太君はぎこちない動作で倒れている同年代くらいの女の子の方に顔を向け、体を向け、そして彼はゴクリと生唾を飲んだ。だめだ、だめだほつ太君！やめてくれ。十八禁小説にするつもりは筆者はサラサラないぞ！なんて忠告したいけれども、ほつ太君の瞳は血走つております。やべえ。こりや一線を越えてしまいそうだ。

というわけで、ディスプレイが点いた。ほつ太君の痴態を妨げるためであるかのように、漆黒の室内で再び、ディスプレイが点灯した。ほつ太君はハツとした表情に変わり、うつ伏せになっている女の子に向けていた顔と体をディスプレイの側に再び向けた。

映つていたのは。

「……………あ……………？……………な、何だよ、これ……………？」

そこには、雪化粧のおかげで銀世界となつている平原が映つていた。

人間の顔を持った蜘蛛の行列が、平原を闊歩していた。

『憎しみに憎しみを返した時、あなたは報われる』

蜘蛛の一匹が、ほつ太君に顔を向けて、冷やかに、冷酷に、悲しそうに、呻く。

血の涙を流しながらであるからして、ホラーだった。

ほっ太君が現と幻の境界線を曖昧にしまつまでには、時間はあまりかからなかった。ちよつと前から流行っている3Dの映像よりも遙かにハッキリくつきりと、その蜘蛛人間は飛び出していた。まずディスプレイから足で抜き出、次に長い黒髪を垂らしている顔面を、にゅつと部屋の方へと出してくる。顔面と足が出て来てからしばらくは、何かじれったそうな様子で停止していたが、何をきっかけにしたのだろうか、吐息をしながら、突然残りの半身もディスプレイから飛び出させた。蜘蛛と人間の混ざっている怪物は、ほっ太君の現実の中へと入り込んできた。

ディスプレイから部屋へ。

映像にうつりながらも遠い存在だったそれが、視界の目前に実物として姿を表した時に、ほっ太君は既に失禁していた。というか、全身が軽く痙攣していたし、後退りのせいでパイプ椅子が倒れたのに、その倒れた時の甲高い音にも気が付けていなかった。彼の全神経は、脳味噌は、先ほどまで裸裸裸という煩惱に支配されていたにも関わらず凄まじい勢いで塗り替えられて蜘蛛人間の一色となった。その目の前の怪物をどうすればいいのか。というよりは、どうすれば、相手からどうにかされることから逃れられるのか。ほっ太君にはわからない。

彼は少年だから。

「や、やめて。何、何だよ、何かが悪かった、俺が何か悪かったの！？ 何、何をしたの、何が悪いんだよ！ 来るな、来るなー！」
蜘蛛人間はただこうやって言うのだった。くぐもっている低い声で。

『憎しみに憎しみを返した時、あなたは報われる？』

何故か尋ねてくる蜘蛛人間。わけがわからないということ、ほっ太君は頭がぐるぐる混乱する。だがほっ太君にはその質問に対する答えがある。憎しみに憎しみを返したら世界は憎しみだらけになってしまうのだから、憎しみに憎しみを返すことは間違いだ、という答えである。ほっ太君は、その意見を怪物に主張するべく口を開

いた。

「そ、そりゃあ駄目ですう」

へによへによだった。説得力の無い弱気な言い返しをしながら、彼は後退する。だが、狭い屋内ではすぐ端に着いてしまうだろう。とか筆者が言っている内にもう彼は端っこに追い詰められた。右隣には尻、もというつ伏せに倒れている同年代の女の子。ほつ太君が着ていた洒落てるＴシャツを毛布替わりにして寝そべっている。その体はやはり冷えてしまっているのか、青白く見えた。

ほつ太君は彼女のことを見ながら思う。男は、女を助けるものじゃないか！とか、思う。

黒髪をだらんと垂らしたまま迫り来る怪物は、パイプ椅子をものすごい勢いで壁に叩き付けながら（パイプ椅子は壁にめり込んだ）、ドスン、ドスンと音を付けてほつ太君へと迫っている。パイプ椅子のあり様を見れば、まともに立ち向かえる相手じゃないことは一目瞭然だった。

『憎しみには憎しみを返した時、あなたは報われる？』 『憎しみには憎しみを返した時、あなたは報われる？』 『憎しみには憎しみを返した時、あなたは報われる？』 『憎しみには憎しみを返した時、あなたは報われる？』 『憎しみには憎しみを返した時、あなたは報われる？』 『憎しみには憎しみを返した時、あなたは報われる？』 『憎しみには憎しみを返した時、あなたは報われる？』 『憎しみには憎しみを返した時、あなたは報われる？』 『憎しみには憎しみを返した時、あなたは報われる？』 『憎しみには憎しみを返した時、あなたは報われる？』

狭い部屋で、いらつく言葉が反射を繰り返す。螺旋ソングと同じくらいにこれでもかと単調なリズムとなつて言葉がほつ太君を取り囲む。そして前方から、ゆっくりと、しかし確実に、蜘蛛人間は足を進めてくる。ほつ太君に迫ってくる。逃げ場はどこにも無い。相手はパイプ椅子を壁にめり込ませる程の怪力。どうしようもない。死ぬ。どうあがいたって、死ぬしかない。殺される。

「やめろおおおおおおおおおおおおおおおおおおおお、やめろやめろおおおおおおおおおおおおおおおおおお、やめろおおおおおおおおおおおおおお」

うづくまつて頭を抱え込むほつ太君。腰はくだけていて、涙が幾重にも頬を伝う。現と認めたくない現実が死を担いで、もうすぐ彼に到着する。絶叫で拒否しようとしても、頭ではわかってしまう。もうすぐ怪物に殺される、死ぬ、という現実がやって来ることを。

もう、目の前までやって来ていた。怪物はほつ太君の目前。長い黒髪の奥にある口紅を塗っているように赤い唇が、ニヤツと半月円を描く。そして、「もう、遅い」、と低い声で、囁くように小さく。ほつ太君は生唾を飲む。先程とは全く真剣味の違う、その生唾を飲む音が、かすかに部屋に響く。蜘蛛人間は黒髪を揺らしながら、その細長い足の一本をほつ太君に見せ付けるようにして持ち上げる。ほつ太君を苦しめるためにわざと間を持たせて持ち上げているようだった。

「い、嫌だ。ごめんなさい。駄目じゃないです。ごめんなさい。何も駄目じゃないです。何も駄目なんかじゃありませんでした。嫌だ！　ごめんなさい！」

ほつ太君は頭を左右に振りながら、頭に思いついた言葉をとにかく口に出し続けた。とにかく何でもいいから言葉を出すようにと脳が彼に命令しているのかもしれない。それでもしないと恐怖に耐え切れないということだ。ほつ太君は誰が見ても分かるほどに、恐怖に支配されていた。誰が見ても哀れなほどに慌てふためいていた。

「ごめんなさい」と再び言った。
そして、蜘蛛人間は無情な答えを返した。

「もう、遅い」
足が勢い良く振り下ろされる。何の躊躇も無く、ほつ太君の頭めがけて。

そして、肉を突き破るような生々しい音が、部屋内で響き渡り、残響した。

ほつ太君は、目を開いた。
すぐに驚愕の表情へと変わる。

その驚愕の表情に、まだ暖かい鮮血がバシヤリとこびりついた。

ほつ太君は血が顔全てにこびりついて、驚愕の表情をやめることはおろか、瞬きさえも一度もせず、瞳を固まらせた。そして血を自らに降り掛けたその存在が、何故そのような状態になってしまったのか、何故そのような状態にさせてしまったのか、ほつ太君にはわからなかった。

吐血を淀みなく繰り返すその少女は、さっきまで彼の右隣でうつ伏せだったのに、今は彼に向けて瞳孔が開いてしまっているような絶望的な瞳を、向けている。服も着ず、ほつ太君を庇うようにして仁王立ちの姿勢で、蜘蛛人間の足を彼女が身をもってして受け止めている。勿論、受け止めきれはならず、だからこそ彼女は血まみれで、吐血していて、どうしようもなく絶望的だ。腹から貫かれて、いるその少女の身を、誰が救えるだろうか。

ほつ太君は先ほどとは全く真剣味が違う、その真つ赤な顔で、血まみれの顔で、少女に命をもってして命を救われたというその事実だけを見る。ほつ太君にはもはや何もわからなかった。

少女は絶望的な青白さのまま、吐血だけを繰り返していた。

ほつ太君はもう、何も考えられない。

「痛い」

少女は蜘蛛の足を抜き取られる時に、その一言をうわ言のように、悲しみも喜びもない無感情で喉から搾り出して、最後はいわゆる糸が切れた人形となってクルクルと踊るようにして、手足もぐにやぐにやに行きたい放題に動かして遂に、ほつ太君によりかかるようにして倒れた。

ほつ太君は条件反射的にその体を受け止めた。ぼーっとした頭のほつ太君は何も考えられない状態だがふと頭に思い浮かべる。

(この血まみれの体、冷蔵庫で冷やしていたレモンジュースと同じくらいに冷たいじゃないか)

光

命を救うという経験は無い。だから彼女を救える自信も、ほっ太君には無い。

鮮血に塗れて死んでしまっている様子にしか見えないその肉体。レモンジュースと比較できる程に冷えてしまっているのだから、外に流出している血液を元通りに戻してあげなければ、ていうかそれ以前に目の前で半月円の微笑みを絶やさない怪物を何とかしなければ、全ては解決しない。

怪物を倒し、少女と己、両方の命を救う。そんな結果を出すには、どうしたらよいのだろうかという状況。

少なくともほっ太君には解決策を見出すことは出来ない。彼には、彼女の流す鮮血で自らも真っ赤に塗れることと、ぐったりしている彼女を床に落とさないように支えることの、ほとんど気休めと言っている二つの動作を行うことしか出来ない（行うというよりは受けているというくらいに、それらを彼は受身的に行っているけれど）。

部屋を見回すほっ太君。

首を振り回しながら焦点の合わない両眼で周囲を眺めても、暗いだけで絶望を深めるだけのことだった。

片腕で少女を支えて、もう片腕で手探りで暗闇をまさぐったりもするけれども、隠しスイッチのように都合の良い代物が見つかるわけでもない。隠し扉も見つからない。

四方を壁に囲まれているその漆黒で、少女の流れる血が暖かい中で、怪物はもう一度足を持ち上げ、その尖っている先端からポタリと垂れる血の雫が、床に垂れて、て、て、て。

ほっ太君には選択するべきことが一つだけあります。

彼女を床に置いて爪足の鋭角から逃れるか。それとも、彼女を床に置かず抱きしめ、その代わりに逃げることを諦めるか。

ほっ太君は、それを選択することが出来ます。もちろん、逃げる

と言ったって、数十秒延命する程度の意味しか為さない。

部屋は狭いことから、蜘蛛から逃れることは、隠し扉や隠しスイッチのような都合の良い存在が無ければ、難しいことだろう。だが彼は選択することが出来る。

もはや抜け殻と言っている程に血が流れちゃっている少女を、床に置くか、置かないか。

致死状態なのは、間違いない。もう死んでいるかもしれない。そんな少女を床に置くということはそこまで罪深いことか、それとも罪深くないことか。

それは少年のほっ太君の頭からすれば考えるまでも無く答えは出る。抜け殻だと言っても、それはさっきまで生きていて命を救ってくれた人の抜け殻だ。そんな彼女を見捨てて、こんなに冷えている体を床に置いて怪物から逃れようとする根性なんて、惨めなだけじゃないか、という答え。

「…もう一度…」

蜘蛛人間は唇を動かして言葉をつむいでいる。爪の先を、ほっ太君と少女へと向ける。

凶器を。ほっ太君の幼い命など一撃で潰すことの出来る凶器を掲げている。

半月円の唇がよけいに曲がり、白い歯がいくつも見えるようになる。蜘蛛人間の、人間に対する嘲笑がほっ太君に向けられている。

そして、次。

事態が回転し巡り狂い。声が人間から漏れる。「ひっ」。

人が跳躍する。それに伴い、抜け殻がぐちゃりと血の水溜りに墜落する。撥ねる血しぶき。

どうなったのか、つまり。

結果としてほっ太君の選択は抜け殻を床に置いて自らの命を長らえさせることだった。

彼は鋭い爪足が襲い掛かる直前にほぼ反射的に身を横っ飛びさせることで貫かれることを免れた。

蜘蛛人間は少年の予想以上の素早い動きに驚き、抜け殻の少女はただ瞳孔を開いたままに血溜まりで沈黙した。それは驚いている様子に見えなくも無い。

だが、一番その事態に驚いたのは、少女を床に落として下手な延命行為をしかしたことに一番驚愕していたのは、誰であろう、間違はなくほつ太君という少年自身だった。

横っ飛びをした瞬間の彼は頬を引きつらせていることに加え、目が宙を飛び回っていて、体の動きだけが素早かった。

命を一時的に長らえさせたほつ太少年の、驚愕に染まっている瞳は、自分の行った行為を認めるためだろうか床に落ちた少女を見つめるためだけにあった。

呼吸は荒い。彼の双眸から涙が溢れすぐに頬を伝い落ちる。

彼は自分が何か大切なことを裏切ったような気がしてひどく呆然とした。なぜだかレモンジュースの刺激が強い酸っぱさが、舌の上を駆けずり回っていた。

方向を転換して再びほつ太君へと迫ってくる蜘蛛人間は、もはや唇を半月円に曲げてはいなかった。真剣な、真一文字に縛っている口元で、怒りを湛えているようでもあった。

ほつ太君は、蜘蛛人間がだいぶ近づいてきたあたりになつてようやく、抜け殻から目を離し、迫り来る蜘蛛人間へと視界を移した。

蜘蛛人間の唇が真一文字になっているのを見たほつ太君は、何故だか、蜘蛛人間に責め立てられている気分させられた。

ほつ太君は幻聴を聞き取る。

蜘蛛人間の『なんで捨てたの?』という言葉、本人は幻聴とは認識せず、実際に発された言葉として受け取る。『あなたは最低の人間』という言葉も、受理、した。

ほつ太君は慌てる。腰をほとんど抜かしながらも、手探りで、暗闇をまさぐる。自由な二本の腕で暗闇をまさぐり続け、怪物から逃れる一心でほとんどあるはずの無い希望を探す。

「ほつ」

だが、あつた。手探りで、それを見つけた。

風呂場の栓抜きのような感覚のものを、手で確認した。

『やめなさい』

という蜘蛛人間の言葉が聞こえたほつ太君。嫌だ、と彼は思い、勢い良く。

「やめるもんかよ」

手元にあるそれを引っ張ると同時にガツチャン、という音。そして少し光に塗れる部屋内。ほつ太君は慌てて回りを見渡し、その光が現れた根源をすぐに見つけ出し、よたつきながら転びそうになりながらしかし一度も後ろに振り向かずその根源へと走る。隠し通路らしきそこには、外へと繋がっている証拠なのであるう、かすかな暖かな光が存在している。ほつ太君はその光を浴びながら、通路へと足を踏み入れると、一度だけ漆黒だった部屋を見返した。

そして見なきやよかつたという後悔の気持ちに、包まれ。

『やめなさい』

という声を背中で聞きながら、通路を走った。

一心不乱に、なさけない程の必死な表情で、ほつ太君は走る。

不思議なことに、レモンジュースの酸っぱさはほつ太君の舌の上からは消えていた。

その代わりに『最低の人間』という言葉と、最後に見た漆黒の部屋の光景が。脳裏にべったりと濃厚に貼り付いてしまい剥がれそうにも、無かつた。

こつこつ風にして、ほつ太君の突然なる出来事の連続は、とりあえず終了する。

しばらく走り続けた彼は、公園の滑り台を出口にして、平凡なる日常へとどうにかこつこつにか帰還した。

夜で、星の溢れる大空。

そして光った。

だ、だめぐおおおおおおおおお」

星のキラめきが、流星群よりも天の川よりも激しく夜空を駆け巡り、大群なる流れ星。

その日、太陽は世界を朝にするために昇り上がるうとしたが、恒龍の大量なる星々嘔吐に直撃してしまふことによつて、沈没してしまい一日お休みすることになった。太陽がお休みしたのは実に、千年ぶりの出来事であつた。そして、時刻は朝を示しているのに朝日が昇らず夜のままだということ、世界は大混乱した。

よつて、責任を取るといふことで、恒龍は解雇された。千年前から、太陽の邪魔をしてしまつた場合は解雇となるという契約はされているから恒龍も反論できるもんでもない。

仲間の龍たちみんなが彼を涙を流しながら見送つたが、手を差し伸べる龍がいるわけではなかつたのは、みんな明日は我が身だからみんな、それぞれ大変な役割を担っているのだつた。

龍は大変である。

解雇された恒龍の行く先はまるで不透明だつたが、助けることが出来ないのは、どうしようもない話でしか、なかつた。

こつして恒龍は、地へと落ちる。天に住むことはもはや出来ないのだ。

長い銀色の鱗を持つた彼は稲妻のように胴体が長い。

だから彼が地に落ちるその姿は凄まじい稲妻のよう。

電力を持たない、稲妻。

奇跡的な確率が運命的に生じる。

滑り台から滑り落ちてきた直後のほつ太君に、稲妻が直撃したのだ。

公園中が一瞬光り輝き、すぐ後に闇。

UFO

『うーん。って、どこだっつうのここ。狭いし』

『…ど、ドラゴン!?!』

『ん。なんだおまえは…小さっ』

『そ、そりゃ人間だもの小さくて悪いかよ』

『悪くは無いけど酒も一緒に飲んでくれないんだろ? ああ、飲んだくれたいつてのに、ここ何なのここ。ピンクのひだひだみたいなのがいっぱい』

『いや、俺だつてこんな場所知らないけど』

『はっ、知らないはずがないだろうが!?!』

『なんでそうなるの』

『だつて、俺が知らないんだからお前が知ってないと困るし』

『よくわからない理屈』

『こまかいことはいいんだよ!! それよか、お前つて人間なの? 初めて生で見たよ』

『人を芸能人みたいな風に言ってくれるのは嬉しいけど、人間見たことないなんて…。ただ地球に人間がいると思ってるんだ』

『知らん。わつついはいつも夜空を駆け巡るのに精一杯だったからな』

『へえ、龍つて空を飛んでるもんなんだ。流れ星とかが龍?(わつついつてなんだよ)』

『星を食うのがわつついの役割だ。人間風情にはまねできない大層な仕事だぜ』

『なんか龍つて小物臭がするね。変に偉ぶる辺りが(まあ気にしなくてもいいか。聞くのもめんどくさい)』

『あつ!?! 人間風情がわつついを小馬鹿にすんのか。言っとくけどな、千年も仕事を休まずにやってきた龍なんだぞ、わつついは。龍はみんな大変なんだ』

『俺はまだ十何年間しか生きてないから気持ちわかんないなー（わつついわつつい五月蠅い）』
『生意気言ってんじゃないよ』
『そういう年齢だもの』
『開き直るんじゃないよ』
『あートイレに行きたくなってきた』
『立ちションでもしてる』
『龍って小便どうすんの？』
『うるさい黙って立ちションしてる』
『機嫌が悪くなった』
『にしても、人間というのは本当に小さいものだなあ。なんつうか、わつついの手にかかれば一瞬で全滅させられそう』
『人間なめるなよ。俺たちが結束すれば地球なんてアツという間に粉碎できるレベルです』
『いや、龍も地球の破壊くらいはわけなく出来るよ、一匹で。ただどほら、龍って賢いから』
『意味がわかんない』
『わつついもわかんない』
『そうですか』
『そうなんです』
『ていうかさ、この空間はなんなの？　なんかピンクのひだひだばっかりで気持ち悪いよね』
『肉体って感じだな。君の体の内部とかじゃないか？　わつついは君に墜落したことまでは覚えている』
『つ、墜落って…。ああ、確かに思い出そうとすればなんか光った感じはあったけど…。だけど、墜落って、意味わかんないです』
『わかるように努力しろ。墜落したということは君と一体化した可能性が高いということだ。えっへん』
『偉そうにしないでくださいよ。あなた、それじゃあ加害者じゃないですか。で、俺が被害者じゃないか。龍と同化って、どういう風

な展開なのよ、これは』

『そんなこともわからない馬鹿なのか？ いいか、同化することとはだ。人間風情が龍と同化するということとはだ。それはだ。な。とつてもありがたいことなんだよ』

『よくわからないです』

『だからわかれと言っているだろうこの大馬鹿野郎。同化するといふことは強くなった、ということだよ。星一つ破壊できる龍と同化したということは、それだけ君が最強になったということだ』

『……………』

『どうした。嬉しくて涙がこぼれそうなのか？』

『いえ』

『なんだ、はつきり言えよ』

『なんか、現実味がないなあっていうか』

『おい、テンションが低くないか？ もっと喜ぶもんだろうが』

『いや、龍と同化なんて今時漫画やアニメにも使われなさそうな感じじゃないですか。テンションあげろって言われても、無理矢理ひやっほうってな感じでいかないとテンション上がんないですよ、どう頑張ったって』

『それは君が馬鹿だからすごさを理解できていないだけだよ。ほら、さあ、いくぞ。まずは変身して空でも飛んでみるがいい』

『え、飛べるの！？ 空を？』

『そうだ。ようやくテンションが上がってきたな。単純な餓鬼だ。わつついの能力にかかれば、空を飛ぶことなど容易い。地球の反対側に行く事だつて容易だぞや』

『へっへー！ そりやすげえや！』

『のってきたな少年。では変身だ。君は今から龍少年に変身します』
『ネーミングセンスが皆無じゃないですか』

『馬鹿は黙っている』

『ていうか、あなたの名前は？ 自己紹介がまだじゃん』

『丁寧な餓鬼だな。まあいいや。わつついの名前は恒龍だ。子供は

何ていう名前なのか教えてみる』
『俺の名前はほつ太です』

満天の星空、夜。

夏の気配ははまだ終わりを告げず、蒸し暑さは健在のまま。

寝苦しい思いを感じている人が何千万といるであろう日本の熱帯夜。遠くで秋の風情を感じさせる鈴虫たちが苦しそうにもがき鳴いている。熱が止まない星空の下で、彼らは秋を恋しく思いながら鳴いているのだろうか。

一度、光に包まれたその公園でも、喧しく鈴虫たちは声を鳴らしていたものだが、しかし銀の煌きを輝かせる鱗が、公園の数少ない蛍光灯の光を反射させながら、昇り上がるその時。鈴虫たちでさえもその龍の猛々しさに見とれていたかもしれない。公園は一瞬、静寂に包まれた。

銀の龍は地から昇り上がる稲妻となつて、公園の滑り台の麓より、満天の星空へと少し身を持ち上げていく。勿論、ある程度の高度までしか昇り上がることはしない。一度地に落ちた龍は、再び遙か上空へと身を置くことが許されない。せいぜい都会のビルに立ち並ぶ程度の高度までしか、昇り上がれない。それ以上に昇りあがることは許されない。

だが、龍と同化しているほつ太君からすれば、その程度の上空旅行だとしても感激を持って余す程であつて、感激の雨嵐であつて、嬉しい限りであつて。

「す、すげー」

鱗の一部分がパカッと開き、そこからほつ太君は顔を出す。そして先ほどまで自分が足を着けていた地面を、双眸で見下ろす。道路を走る車のライト。街で輝くイルミネーション。野球場の輝き。そこに群がっている人々は蟻のよう。街が一望できてしまうという驚

き。

ほつ太君に見下ろされている街の人々は、夜空に走る稲妻を発見しては、皆、同じような反応で、指を空へと突き出す。「あれは、なんだ」とでも言いたそうな驚愕の瞳。あるいは茫然の瞳。

その時、恒龍は世界を横に走る稲妻であつた。あり得ない現象として夜を駆け巡っている龍が、人々の視線を釘付けにする。現実突然現れた圧倒的なるフィクションが、人々の足を立ち止まらせる。みんなが同じ物を見て同じ感想を抱くのだ。『あれは、なんだ？』、という。ある種、感動的な光景である。普段心をすれ違わせてばかりの人間たちが、この時は完全に心を近づかせているというわけである。花火大会のときに花火を皆で一緒に見て感動するのと同じように。

「すごいね恒龍。みんな俺たちに注目しちゃつてて目がキョトンとしちゃつてさあ！　こういうのって気持ちが良いもんだね、サプライズをみんなに提供してるっていう爽快さっていうかさあ！」

「なかなか面白い言い方をする子供だな。人間の子供ってのはみんなそういうものなのか。だとしたら馬鹿だな」

「馬鹿しか言わないんだな恒龍は。ひねくれ者なんだ」
「面倒くさいだけだ。子供に付き合つて話を展開させることに対して」

「ていうかさ、龍がこうやって普通に姿を現しちゃつていいもんなの？　普通、こういうのって駄目なんじゃないの？」

「駄目だよ」

「え、だめなの」

「うん。だめなんだけど、ほら今わつついは解雇されたばかりとていうことで酔っ払いたい気分なわけ。けどお酒を飲むことも難しいから、酔っ払わないままに酔っ払いに近い行動をすることで多少のストレス解消をしたいと願っているというわけだよ」

「え、これストレス解消でやつてんの？」

「そうそう。本当はやつちゃ駄目なんだよ。けどわつついは今や

けくそだから、こつこつ風に世の中の秩序を乱すような行為をちよつとやってるってわけ」

「駄目じゃん」

「駄目だね。だけどほつ太はわつついと同化してる人間だから、責任もわつついと同化してるんだよ」

「はっ!？」

「つまりどういふことが説明してあげようか、馬鹿なほつ太君に。」

つまり、君も世界の秩序を乱した責任を取らなくちゃいけない立場ってわけ」

「え、何それ、ふざけんな、え、嘘つくな」

「嘘じゃない。後もう少しで天罰が下るかもねー。なんつうか、ぶつ殺される感じ? 処刑って感じ?」

「何言ってるんの恒龍さんマジで。なんでそんなやけくそっていうか、つうか世の中でこつこつやっつて姿を現しただけで処刑されるって、罪重くないっすか? 理不尽じゃないっすかね、これ、恒龍さん」

「いや、こんなもんだよ。秒刻みな感じで今わつついをどうするかっていう審議が進んでるんじゃないかなあとかわつついには思ってるんだけどなあ、ていうかレモンジュースが飲みたい」

「おい、ちよつと恒龍さん、なんか頭おかしくなってるっすか、ちよつと、逃げましようよどつかに見つからないように逃げましようよ!」

「無理無理無理。天つてのはすごいんだから」

「天なんだから天から見たら見えない所に隠れればいいんだよ、この大馬鹿野郎!」

「わつついを馬鹿つて言ったか、この野郎。ふざけんじゃねえぞ」

「怒るなよ。とりあえず何とかしてくれよ本当、俺死にたくない」

「あ、知るか。わつついと同化した時点で貴様は死んでるようなものなんだよ。稲妻にぶつかったら普通、人は死にますよね? それと同じことです。ほつ太君はおとなしく死になさい。どうせろくな人生を送ってないんですから今死んだってそんな変わらないからマ

ジどんまい。わっついのもういいや、千年生きたし。星散々食って腹満杯だし」

「こ、この、言わせておけば勝手なことばかり…!」

「ははは。貴様も似たように勝手なことばかりしてるじゃないか、ほっ太君。わっついには貴様と同化しているから、いろいろわかっちゃうんだぞ? 貴様、女の子を見殺しにしたろう」

「あ、あれは仕方が無かったというか、もう致死状態で……」

「うふふふ。仕方が無いというならば何故、君はもやもやしているのかなあほっ太君。君の脳内では少女に伴った事件のもやもやがとつても、もやもやしているけれどなあ。うふふふふふ」

「おいしい加減にしろよ、落ちこぼれの龍が」

「何だと貴様」

「やーい、馬鹿落ちこぼれ!」

「てめえ、餓鬼みたいな言い方をしやがって。って、貴様は餓鬼だったな。まあいい、餓鬼にムキになっている場合でもないからな。どうせ、もうすぐ天罰が下って死ぬのだ。どうでもいいよ、貴様に何言われたって。傷つかないよ。鉄のハートだもの。わっつい、とつても鉄のハートだから何言われても傷つきませーん。鉄のハートだもの。大事なことから三回言いましたが何か問題でも?」

「殺したくなりました。今すぐにもお前のことを内部から爆発させたい!」

「お、おい、やめろ、どうせ天罰が下って死ぬんだから」

「うるさい、こうなったら自棄だ。はは、この細長い体のそこら中を、内側から拳で痛めつけてやる、ひひひ」

「うわあ、発狂するなこの餓鬼! や、やめてくれ、くすぐりたい、うひひひひ」

「ふふふ」

「ひひひひひ」

「ふふふふふ」

「うははははっは!」

「うはははははは！」

「あ、あれを見るほつ太君。向こう側に…見えるだろう？」

「ん。……な、なんだ、あれ」

「あれが天罰者だ。龍がもつとも恐れる存在と言っても過言ではない。形は可愛らしいUFOだが中身はデストロイな代物ばかりだ。わつついのように罪を犯した龍は、あのUFOに跡形も残らない塵にされてしまうのが常。今まで、何人もの自棄になった同志があのUFOに殺されました」

「た、たしかにそれは、ど、どうみても、U、UFO…」

「そういうわけだ。ほつ太君、悪いが空を飛んで人間たちに姿を見せた時点でアウトだったんだ。というわけで、心中ですね」

「いやだいやだ！ 死にたくないって俺！ なんでまだ若い俺が死ななくちゃならないんだー！」

「少女を見殺しにした罪だとも思えば気も休まるだろう」

「あれは仕方が無かったんだって！ 条件反射だったんだって！」

「そんな事情、UFOは聞いてくれないぞ」

「わけわかんねえこと言ってるねえで、龍なら龍らしく格好良く火でも噴いてUFO燃やせよ！ この大馬鹿龍！ 役立たずのノロマ！」

「な、なんだと…き、きさま…わ、わつついだって、千年間、星のキラめきを一日もさぼらず食べ続けたという恐るべきキャリアがあつてだな…」

「だったら星を吐き出してUFOを撃退したらどうなんだ！？」

「無理に決まってるんだろ！ 自ら嘔吐が出来るほどわつついは器用にできていないのだ。えっへん」

「威張るところじゃないんだよ。ああ、もうだめだ、UFOが目前まで迫ってるじゃないか。なに、あの巨大な砲身。なんかすごい撃つてきそう」

「ハイパーウルトラメガ粒子砲マーク百改という恐ろしい名前です」「す、すげえある意味。…って、感心してる場合じゃない。そうだ、

俺が嘔吐させてやる！ こころ辺をいじくれば…」

「あ、やめろ、何してるんだ、ああつ！ アーツ！ き、気持ち悪い、や、やめろ、気持ち悪い……」

「おお、おお、効果抜群じゃないっすか！？ いけるいける、このままいけるって！」

「や、やめろお……あ、やばい」

「吐きそうか！」

「いや、ハイパーウルトラメガ粒子砲百改が……」

「う、うわあ、なんか砲身が紫に光ってるう！ あれは明らかにやばい代物ですね。ち、畜生、しにたくないよわっつい」

「わっついをパクるんじゃない。ああ、焼け死ぬ。熱い、熱い」

「あ、こんなところにすごい腫れ上がってる部分が……ここを触れば吐くんじゃないか。えいっ」

「ぐげえっほおおおこおおおおおお、まじ、しんどおぐごおおお

おおおおご、ご、や、やべえうえおおごおおおおおおおお、
だ、だめぐおおおおおおおお

「や、やったあ！」

うがががががっ！

星の嘔吐は、流れ星の群れとなって、三万六千五百発のロケット花火の打ち合いが夜空で輝くよりも凄まじい光景を生み出している。そんな嘔吐とUFOの発したハイパーウルトラメガ粒子砲マーク百改が、ぶつかりあった。紫の砲撃と星の嘔吐がぶつかり合ったその時に、そして夜空はオーロラに囲まれた。二つの衝撃がぶつかり合った結果、寒い地域で見るカーテンみたいなオーロラが夜空で拡散したのである。街に住む人々の多くは、そのオーロラでまたもや時を共有し、同じものを見て同じように感激できているという喜びに浸る（もちろんみんなそんな風に思いながらオーロラを見てはいなかったが、まあ、とにかく見ていた）。

オーロラは神秘的な音を発していた。くららららあ、といった風な、音だ。例えば宇宙のどこかに神さまに近いような存在がいるのだとしたら、そういった存在が発するような、あまり普段聞いてはいけないような、圧倒的な存在感を持つている音というのが、とにかく、そのくららららあという音であった。そんな大切にしなければならぬような、何時間もヘビーローテーションしたら悟りを開いてしまうような神々しい音を、街に住まう人々全員が耳で聞いていた。くららららあ、という音を聞いて、みんな、それぞれがそれぞれの感想を発していたのである。

概ねは、「意味わかんない音だなあ」っていう感想であって、神々しいその音に感激するというよりは、気味悪い、ってのが大方の感想であった。

みんなが思う。

「意味わかんない音だなあ、くららららあ、って」

ってという風に、思っ、気分を鬱々させて落ち込んで携帯画面を開き誰かに電話して状況を伝えたりする。「この音、どう思う？」

みたいな質問もあれば、「身が清められた」なんて言う人も少数派だがいりした。

酒を飲んで顔を紅潮させて街を闊歩していた集団おやじ達はくらはららあを聞いて、陽気だったその調子を途端に皆青白くさせてしまい、「あしたも会社だなあ」なんていう弱気というか駄目な発言をするオヤジが出てくるようにもなったかと思えば、青白い顔で瘦身、頬も痩せこけていて絶望に身を浸しているなんていう雰囲気の人間が、くらはららあという音を聞いた途端に被っていたニット帽を投げ捨ててハゲ頭を月明かりで反射させながら踊りまわるという奇行に走ったりもしていた。

オーロラから発される、くらはららあ、という音で街はちよっぴりイカれた。

その中でも異端なる空気を放っていたのが、一組のカップルであった。

どうおかしいのか。

まず、傍らのホスト風な服装をしているが涎を常に垂らしている男は、なぜだか歩道橋で胡座を掻き念仏らしきものを唱えていた。ひどく必死な様子で、手はがくがく震えていてやばそうだった。

やばいのはカップルの女の方も同様で、モヒカンヘアの彼女は「くらはららあ」とか必死に歌っている。目がどっかに逝っちゃっててやばいのが明らか。

歩道橋の丁度中心のあたりでそのような二人が屯っているものだから、誰も彼もがその歩道橋で通行することが不可になっている。だけれどカップルはそんなことにも気が付かないままに、己らの行為に没頭し、熱中している。

だが、やがて休憩タイムとでも言うのか、二人は会話を開始した。「良い音だったなあ。私、全部の罪を帳消ししてもらえる幸福に身を預けたような思いにさせられちゃって、なんつうか、嬉しかったなあ。やっぱりこういうトリップ感っていうのは大切だよねとか私思ってた。だけでもう聞こえないなあ、くらはららあ」

「……………うがつ」

「良い吠えだよ。こついう風に吠えてれば月だつてオーロラだつて関係なく私たちは今日も笑い合つて生きていけるのかもれないなあ。だけど、私はもうだめだ。店主はバラバラになつてくたばつて息をしていなかった。私はあなたをよりどころにしているけれどももう駄目だとも思つてる。吠えてるあなたに合わせて、私も吠えようかなあ」

「うがつ」

「うがつ！」

「うがつ」

「うがつ！」

「うがつ」

「うががががががががが！」

「うがががががががががが！」

「うががががががががががががががが！」

「……………」

「ははは！ 楽しいな！ 全力で楽しいな！ 夜の歩道橋で、車がみんな立ち止まつてオーロラに瞳を向けてる！ 私たちは歩道橋のここでそれを眺めながら、やっぱりオーロラをみたりしながら月に向かつて吠えたりもしてる！ いいことだよ、これは、とっても楽しいことだ。みんなが楽しくなれば世界は平和なのにねえ。でもそうはいかないから、私は店主を撲殺したんだつたなあ」

「うがつ」

「吠えてばかりだね君は。いい加減にイラついてきたよ。だけどもあいいや。一緒に吠えるのは飽きたからしないけれども、もつとなんかやろう。例えば、祈つたりさあ！」

モヒカンガールはそしてオーロラへと指を示した。オーロラは夜空で様々な色へと転じながら幻想的だった。夜空を横に走っていた稲妻や、紫の光や星の大群たちは消えていたけれども、オーロラだけは夜空で消え失せることなく存在を強調していた。月も真上にあ

った。

モヒカンガールは両手を合わせて、またもや「うららららあ！」と叫んだ。やけくそな風でもあるそれは夜空に溶け込んですぐ姿を眩ましていく。ホストの服装をしている男は、涎を垂らしながら、そのモヒカンガールの歌う姿をしばらくみつめていたけれども、やがて、彼も歌い始めた。

「うららららあ！」「」

二つのやけくそみたいな下手糞な歌。そんな下手糞な歌を、みんなあまり聞いておらず、みんなオーロラを写メったりしててへラへラな笑顔。世界は二人と関係なく進んでいた。だから、二人も関係なく楽しむことにしている。やけくそがやけくそとなってやけくそにオーロラへと飛んでいつている。

「うららららあ！」「」

歩道橋の隅で、それを怖がりながら見ている人は三人。

みんな、禿げていた。

「怖いなあ、変質者」

「別の道を使おう」

「危ないからな」

とだけ述べて、三つの禿げ頭はどこかへと消えていった。

二人はそんなことを知らない。

二人はやけくそだから、知らない。

「うららららあ！」「」

絶叫。

般若面黒タイツ男の、影も。

「UFOは再びやってくるものなの？」

「当たり前だな、目標を裁くことが出来なかったのだから二台目のUFOがその内現れることだろうよ」

「じゃあ今の内に隠れなきゃ」

「どこに隠れるっていうんだ。逃げても隠れてもUFOは見つけ出してしまつよ、こちらのことをな」

「そういうものなの」

「そういうものだ。公園の遊具に身を潜めたって仕方が無いんだよ。さつきみたいなの溶解光線を撃たれてもがき苦しんだ後にボンッと弾け飛んで死ぬ。痛いだろうなあ、ひひひひ」

「ひひひひ、って。…笑えない」

「苦しい時には笑ったっていいんだよ。苦しいからって神妙な顔をしなくたっていいんだ。苦しいことから逃れたいなら笑ったっていいんだよ。分かるか坊主野郎」

「分かるも糞もあるか！ 腹減った！」

「なら自分のうんこを食べればいい。自給自足というやつだ」

「どんびき」

「わつついのうんこは星味です。星しか食べないから」

「星の味っておいしい？」

「饅頭の甘いのをより二倍甘ったるくした感じが星の味」

「そんなん死ぬじゃないすか、千年も食べてたら」

「毎日しんどかったよ」

「拷問の千年でしたね。同情します」

「そうだよ。わつついはそうやって毎日しんどい思いをしながらもしかし毎日努力を欠かさなかったっていうのに、それなのに今はこうして溶解光線で苦しみながら溶かされることに対して脅えてしま

っている。わつついは何の為に千年間もあれをやっていたのか、正直、わつついにもわからん。だけど気が付いたら千年経ってただから、まあ、すごいよね、わつついって」

「大変でしたね。あ、地面に下りようか。あそこならちようど人がいない。あそこに降りてから、これからどうするか決めよう、恒龍」
「ほっ太少年。わつついの話を聞いて感想が『大変でしたね』だけというのは一体全体どういことかね？ とわつついは非常に腹が立つ。糞野郎」

「俺だつて不幸なもんだよ。これから輝かしい未来が待っていると思ったら変な龍と同化されちゃっただなんて。最悪だよ」

「……………」

「着陸しましょう」

街にいくつかある公園のうちの「垂曲公園」と名づけられている場所に、夜の暗闇に塗れながらほっ太君と恒龍は着陸した。垂曲公園は、小さな山がぼこっ、ぼこっ、と幾つもの場所で膨れ上がっていたり、夜の中でまったく音も鳴らない静かな湖があったり、遊具がそこかしこにあったり、など、あまり特徴は無いが広いところであつた。

恒龍は巨体なのに音もなく地面に足を着けると湖に口をつけて、がぶがぶとそれを飲み干してしまい湖は陥没した。中で泳いでいた鯉やその他微生物などは全て水が無くなったので死んだ。

飲み干した恒龍は『ぷっはー』と述べてからため息を付き、「あももうやってらんねえよ、久しぶりの水なのになんだこれ。濁ってるじゃねえか」と言いながら公園の内部のちよつと山になつてる所を枕にして、ぐでんとだらしなく腹ばいになった。その横たわっている体の一部をほっ太君はパカッと開けて、外に出た。

ほっ太君は「んー」と伸びをしながら、「同化したけど、あんまり何か変なところってないね」と自分の体を見下ろしながら恒龍に尋ねた。

「外見上には何の変化もないが、魂がわつついと君は一致している

状態だから君が死ねばわつついも死ぬしわつついが死んだら君が死ぬ。一蓮托生つて感じにはなっているね。それと、君、地面に拳を叩きつけたりしてみるといいよ」

そう言われたほつ太君は、しばらくは躊躇したが、しかしやがて勢い良く拳を地面に向けて振り下ろした。すると地面に恐ろしいほどのヒビが入った。メキメキ、というひどい音も鳴った。

「すげえ」

ほつ太君自身の拳は、痛みが襲い掛かってくるかと思つたのに、不思議と痛くも痒くもない。恐ろしく夜を切り裂く音が鳴つたので、彼は思わず周囲を見渡してしまつたが、近くを歩く人は見当たらずに幸運だつた。

恒龍に楽しげな瞳を向けるほつた君。

「すごいね、これ、ほんとすごいよ、これ！ 何で痛くないの！？ すげえ、痛くない！」

彼はその場でぴょんぴょん蛙のように飛び跳ねては、腕をブンブン激しく回転させる。恒龍は目を開かないが、一度だけ「んっふう」と言つて喉を鳴らした。さも、「うるせえ」と言っている様子だつた。だが、ほつ太君は自重せず、腕を激しく振り回しながら何か殴つても良さそうな対象を探し回る。「すげえ、すげえ！」とか言いながら。

やがて、そんな彼を恒龍は一喝した。

「渴ッ！」

判決

黄金の木槌などというものが現実にあつて、そして音をたてる為に、実際に存在してゐる等という

状況自体が現実離れしてはいるが、それを振りかざしている輩が現実離れしている感じであつたから、おかしいことではないのかも知れない。

おかしいな存在はポロンという名前。全身純白の羽毛で囲まれてゐるその肉体の幾つもの部分に眼球が隠れている。その眼球はちつとも動こうとはせず、常にどこか一点を見つめている。だけれど眼球はいくつもあるのだから、ポロンはきつとたくさん場所を常に見ているのだつた。それがポロン。

黄金の木槌が大好きで、昔から彼はそれを愛している。それ以外のものは愛さない。常に様々な部分を見ている彼だけれども、愛しているのは木槌だけだ。それは彼自身、これまで、そしてこれからも一生変わることはないことだと知っていた。それがポロン。

だからポロンが『存在』の罰を決定する時、そこに躊躇はない。木槌だけを愛する彼は『存在』を愛さない。

彼は何かの判断基準を利用して『存在』が受ける罰を決定付けているようだが、それが何かなのかは、他のモノにはわからない。例えば、ポロンには配下がいくつかいるが、その配下たちにはわからない。だが、たしかに、ポロンは『存在』の罰を決定する時、その判断基準だけを利用して、相手の罰を公的に決定する。

だれかに言われて公的なる判断基準を為そうと決めたのではなく、ポロンは昔からそうやって来たのだつた。昔から繰り返され続けてきていて、その一番最初のこと覚えていない彼には、何故自分が公的なる判断基準を為そうとするのかはわからない。だが考える前に習慣として『そうしよう』と決まっているものらしく、いつだつて彼は公的なる判断基準を揺るがすことなく罪人を裁く。罪人はそ

れを受け入れなくてはならない。ポロンは公的なる判断基準でその存在を裁いたのだから。真摯なる姿勢に対しては、真摯に受容をする必要があるのでないだろうか。

だが、たまに、察しの良い罪人は気が付く時もある。

『公的なる判断基準の、公的、とは、なんなんですかあ？』

皮肉を込めて。理解の出来ない判断基準。罰を与えられる側が、生きていた世界とは違う基準によって、罰を決められるが、ポロンより与えられる時、たしかにそこにはポロンの個人的な感情は込められていない。ポロンは相手を公的に裁いているのみだ。それは真摯。

だけれどポロンにとっての公的とは何なのか。時折、罪人にはわからない。

ある時には『強姦をした男は』絞首刑だった。

ある時には『暴力を振るった女』凍結刑だった。

ある時には『何もしなかった奴』が足を折られた。

ある時には『真剣に考えていた者』が胸を突き刺された。

ある時には『ただの馬鹿』が腹を貫かれた。

ある時には『人を嘲笑い尽くした奴』が片腕を切られた。

ある時には『純粹を貫いた者』が怪物に変えられた。

ある時には『殺人者』が銃殺された。

何がどうなつてその罰が決められるのかは誰にもわからない。ポロン自身にも深い理由はわからない。だけれどポロンはそれらを当然のごとくとして罪人に伝える。ポロンはポロンが罪人に伝えた罪状が、己の感情で決めたものでないとわかっている。ポロンは公的に事実を相手に伝えたのだとわかっている。だけどポロンだってわかっている。なぜ強姦をした男が絞首刑なのか。なぜ何もしなかった奴が足を折られたのか。そもそも何もしなただけでなぜ罪人は罰を受けなくてはならないのか。ポロンにだってわからない。頭ではその公的なる判断基準の仕組みをまるで理解していない。だけれど体は覚えているってな感じで、ポロンは全ての罪人に罰を簡単に

与えてみせる。

そしてそれには誰も反論しない。ポロンは、絶対的だった。

そこは純白な景色。

全ては暴かれるとでも言うかのように、真っ白だ。

ポロンが一番奥にいて、その手前にはポロンの配下たち。それらの配下に囲まれるようにして罪人は存在していて可哀想な感じ。

その空間の地面は、雲のようにふわふわしている。ポロンの配下たちは気にせず雲の上でぶかぶか浮かんでいる。ポロンの配下たちは全員同じ仮面をつけていて、格好は道化師。仮面は青色。青空のようにすかっとしていて青色だ。それが槍を片手に持ち、もう片方の手には、何故か扇子を持っていたりする。

ポロンの黄金の木槌が、純白の景色の中でまばゆい。輝きは凄まじい。

さて、純白の景色の中に、罪人は、その時いない。

いや、人ではない、という意味で、罪人はいない、ということであって、実際には、『罪人』はいるのである。ただ、それは人ではない。人ではないならば何なのか。

地球だった。

ポロンや配下たちは、純白なる空間の中で、地球を取り囲んでいた。その大きさは机上に置かれる地球儀と同じ程度だというのに、その質感は地球儀のそれとはまるで違う。

なぜならばそこにあるのは本物の地球だからである。

厳粛なる沈黙が流れているせいで、地球はまるでこじんまりとしている風に見える。私たちが生きている地球という惑星も、ポロンやその配下たちに囲まれて回転している状況では、ただの赤子よりも非力な存在に見える。宇宙飛行士も真っ青な展開である。地球は青かったなんて話ではない。地球はその時、小さかった。

「地球君を裁くことになるうとは僕も予想だにしていませんでした。が、この場に召集されたということはあなたは罪人だということですよ。まあ、あなたは人ではなく惑星でしょうけれど。ですがまあ、

公的なる判断基準つてのがあるから、規模の大きさとかは考えにあまり入れず、いや、入れるかもしれないけど、まあとにかく、公的なる判断基準であたのたを裁きます。これはもはや確定的です。なんであなたが罪に問われたのかは、公的なる判断基準に聞いてください。僕にはよくわかりません。いや、わかるんですけど、説明できないんです。ですから、細かい理由などは聞かないで下さい。とにかく、罰を決定します。罪には罰がつきものですからね」

そこまで言い切ったポロンは大声でげらげら笑った後に、ふつ、と気障つたらしい微笑をすると、とても悲しそうな涙を流し、最後に顔を真つ赤にしながら黄金の木槌を近くにあつた風船に叩き付けた。風船は「パツツン」となさない音を鳴らしながら割れたかと思つと、内部から何かを吐き出した。出て来たのは何か紫色をした気持ち悪い感じの代物で、よくわからないが気体だつた。

ポロンは持つている黄金の木槌の、柄を、指先で器用にくるくる回転させる。黄金の木槌は紫色の気持ち悪い気体の周辺で回転したすると綿飴が割り箸に纏わりつくのと同様に、黄金の木槌に紫色の気体が纏わり付いた。

毒霧がへばりついてるみたいになつてしまつた黄金の木槌を、ポロンは再び真つ赤な顔になつてから、全力で近くにあつた四角い箱に叩き付けた。「ペツコン」、というなさないにも程がある音が鳴り響いた後に、その四角い箱から一枚の書類が出て来た。

風が吹けばどこかへと飛んでいつてしまうようなその書類をポロンは空いている手で掴みとつた後に、彼はその内容を読み始めた。

その様子をポロンの配下たちはただただ見ている。道化師たちは仮面をつけているから表情がわからない。

地球は惑星だから表情とかがそもそもないが、全体的に表面に雲が多い感じだつたから、不機嫌なのかもしれない。もちろん、惑星のことだから、何が何だかわかりはしない。

やがて時間が過ぎていく。百分ほどの時間が過ぎたのだ。

地球はただただ回転している。地球も落ち込んだり疲れたりする

のだろうか。それはポロンにもポロンの配下たちにも理解できることではない。ただとにかくポロンの役割というものは罪人に罰を与えるというだけのことだ。ポロンが地球の気持ちを理解する必要はない。公的なる判断基準に基づいて、感情を挟まずに相手の罰を決定すればポロンはそれで正しいのだ。だからポロンは黄金の木槌だけ愛でていればそれで良いのである。ポロンは黄金の木槌を愛していてその他一切に無関心であれば相手に同情をせずに、役割をきっちり果たすことが出来る。

といってもポロンは木槌を振り回してただけだから、本当のところはポロンが何をどう思おうが公的なる判断基準は変わらないのかもしれないが。

そこら辺のところは謎である。そもそもポロンという存在が謎である。地球が裁かれてる状況自体が謎、っていうことでもある。

だが、判決。

「はい、判決です。ではこれから、地球には、苦しんでもがき泣いて滅びるといふ刑を受けてもらいます。どういふ風にして、苦しんでもがき泣いて滅びるといふことになるのかは僕にもわかりません。どれくらいの期間、苦しんでもがき泣いてという拷問が続くのかも僕にはわかりません。ですが公的なる判断基準ですから正しいのだと思います。では、地球の判決は、これにて終了します。地球、何か言いたいことは？」

ポロンが尋ねる。配下たちも地球へと仮面を向ける。

みんなに注目されながら地球は、しかし口が付いていないから何もいわなかった。

ただ、その時地球は、とっても黒かった。

泣いている風に見えなくも無い。あるいはもしかすると、既に苦しんでもがき泣いているのかもしれない。罰はすぐさま行われるのだから。

地球が黒いだなんて、宇宙飛行士も真っ青である。

スペシャリスト

朝日が昇らない世界というものは、奇妙な風景ではなかった。ただ単に夜がずっと続くだけで、星が常に満天であるだけで、夜がずっと続いている。

もちろん人々はそれなりに混乱している。たとえば。

『どうもみなさんこんばんは。えーと、時刻的には朝なんですけどねえ』

『みなさんもご存知の通り、今日も夜のままで、朝日は昇らずとい
う…』

『いやー。大変なことですが』

『本日は様々なお方をお迎えした上で、お話を進めて行きたいと思
っているわけですが… TAKESEHIさんとGLOBALさん。寝
ないで下さい！』

『え、ああ…』

『おろおろ』

『おろおろって何ですかGLOBALさん』

『あ、この人は先日妻のローカに関する一件から少しおかしくなっ
てしまったのですよ』

『おろおろ…』

『…ちよ、ちよっと、こんな人が公共の電波に乗っちゃっていいん
ですか…。まあ、今はそんなことを議論している場合ではありません
ね。本日はスペシャリストの皆様方を会場にお呼びしています』

『はいどうもみなさん。朝なのにこんばんはー』

『おろおろ』

『ええとですね』

『おろおろ』

『えーと』

『おろおろ』

『（苦笑）』

『TAKESHIさん。GLOBALさんはずっとこの調子なので
すか？ この番組の間ずっとこの調子になってしまっているのですか？』

『シヨックがどうにも大きかったようなのです』

『そんな人をなぜテレビに出すことになったのでしょうか、私には
わかりません。ていうかGLOBALって名前ださいですよ。…
さてさて、そんなことは置いてと。今日はスペシャリスト松岡
さんに来ていただきました。スペシャリストとはどのようなお仕事
なのでしょう？ 松岡さん、お願いします』

『はい、ご説明します。スペシャリストというものは特別な人とい
うことで、いつも、私は皆様方に説明しています。何がどう特別な
のかを今から説明します』

『おねがいします』

『世の中で生じる不思議な出来事というものは科学や他の様々なる
学問では対応し切れないのですが、それがなぜかというところ不思議な
出来事というものは人の対応できる範疇というものを遥かに飛び越
えているからです。ですから人を飛び越えているレベルの存在でな
ければ悪夢的なこれらの不思議なる出来事に対処することはまず不
可能なのです。そういう風に人を飛び越えているレベルの存在とい
うものが、私たちスペシャリスト、ということになります』

『詳細などが乏しく実情が良く見えないという声もありますが』

『そう言った声はよく耳にしますが、我々としては皆様方の理解力
不足ではないのか、という思いもあります。ええとですね、我々ス
ペシャリストの仕事の詳細がわからないと仰りたい声なのでしょ
うが。当たり前ですよ、わからないのは。我々にだって詳細はわか
りません。事態が変化した時に柔軟に、その場その場で対応の仕方を
変えるのが我々のやり方ですから。例えば、そこにいるGLOBAL
Lさんという方の、おろおろ、という言葉が邪魔で放送が上手くい
っていませんよね、現在。そしたらば、こういったことをするのが
我々スペシャリストのやり口です。おい、やれ』

『あ、何をなさるんですか、スペシャリストのみなさん。お止めください、なんですかその物騒な代物は。どこから持ってきたんだ！あ、ああ！ ちょ、ちよつと！』

『仕方がありませんでした。今は緊急の時でありますのに、GLOBALさんは、おろおろ、とか言って我々の邪魔をした。我々スペシャリストは世界の唯一の希望であります。この不測な事態の救世主が我々であるのに、その大事な言葉の一つ一つを、GLOBALさんは、おろおろ、などという意味不明な言葉で邪魔をした。聞き取れなくする、というね。それはつまり、GLOBALさんが実は我々の敵対する勢力の密かなる一員だったという可能性も示しています。我々の言葉が国民の皆様方に伝わるのを邪魔するためにGLOBALさんは、おかしくなったフリをした上で、この放送に出てきて、我々の邪魔をしているのかもしれない。だとしたら彼は、立派な犯罪人だ。悪い人だ。彼をここに呼んだ人もおそらくGLOBALさんの仲間でしょう。それはつまり、我々スペシャリストにとつての敵です。悪人です。ですからGLOBALさんをここに呼んだ方を殺します。鋭い刃、もしくは黒光りする銃で一撃で殺して差し上げます。さあ、名乗り出なさい。誰ですか、GLOBALさんをこの場所に呼んだ人は。ああ、あなたでしょう。顔つきでわかります。スペシャリストは見ていますよ、観察しています。常に敵の可能性を察知するために慎重ですから、表情のわずかなる変化の見落としはしません。ほら、あそこの人はたしかに表情がくぐもつた今、私たちに悪人だと気が付かれたことで、さらに怪しい表情に変わりました。さあ、みなさん、彼は敵ですから、殺します。安心しなさい。手を鮮血に染めて汚らわしく汚染するのはスペシャリストの役割ですから、あなた方が彼を殺すことにはないのです。あなたたちはそこで希望の光なる鮮血を眼球に焼き付けることで、滅亡への不安を和らげなさい。私たちが、あなた方の救世主なのですから』

『ああ、ああ！ なんてことだ、放送中に人が二人も殺されるなんて。しかも、GLOBALさんとTAKESHIさんは人気の方々。

そんな人が二人も、意味わかんない宗教じみた輩たちに殺されただなんて、前代未聞だ。大問題だ。首になってしまふ。責任を私も追及されるかもしれない。なんてことだ。はやく放送を中断するんだ。何をやってるんだ、ちくしょう』

『うふふうふふう。みなさん、チャンネルは、そのままです。スペシャリストに任せれば夜の闇もいつかは晴れますよ。あなたたちがぐーすか軒でもかいているうちにね』

全国放送の電波に乗ってスペシャリストの存在が露わになった。人々はこれによりさらに混乱を深めた。世界中が少しずつ狂いはじめていた。そもそもスペシャリストの姿は怪しい。

全身黒タイツで、般若の面をつけている。制服なのだろうか、スペシャリストは全員そういう服装である。

朝日が昇らなくなり、地球は全世界のどこもかしこも夜の闇となった。

全身黒タイツの般若姿たちが、普通に、街を徘徊するようにも、なっていた。

黒タイツたちは何をしてもなく街を徘徊する者もいれば、背中からカラスのような漆黒の羽を生やし飛びまわる者もいた。彼らの多くは通行人に対して無害であったが、しかし街を歩く人々の中で様子がおかしくなる者が日に日に増えていた。どのようにおかしくなっているのかは人によって違う。ある者は尻にナイフを突き刺したまま道を歩くようになったし、ある者は全身にペンキを塗りたくって道を歩くようになった。ある者は常に踊りながら歩くようになったし、ある者は会社へとキックボードで通勤するようになった。人それぞれ、社会から逸脱したような行動を取る者がひっそりと、しかし確実に増えたのであった。さらに、黒タイツの数もひっそりと、しかし確実に増加の一途となり、密かに人々は噂するようになった。

黒タイツ般若面の連中に、世界はのつとられてしまっただけじゃねえだろうか、と。そういうわけでみんな混乱を深める。

社会はゆっくりと狂いはじめた。ポロンが判決を下したせいでのようになってしまったのだろう。

虚空すぐすぐ

これはもしかすると人間たちが現実と幻想の境目を理解できなくなる兆候かもしれない。それは一体どういうことかと言えば。

『幻想と現実の境目などがわからなくなってしまうのだ』などと、まともな人間だったらそんなことを考えて生きる必要は無い。現実には現実であり、幻想は幻想であり。

例えば海にはこびる全ての鯨を捕鯨したいと願ったところでシーシェパード号に邪魔されるのがオチだし、それ以前に人間一人が鯨と格闘しても踏み潰されて終わりなのだから仲間を集めなくてはならない。船を運転しなければならぬ。船を運転するには免許が必要だし、仲間を集めるにはコミュニケーション能力と人を集めるだけの魅力が無ければならない。それらが全て揃った上でシーシェパード号を警戒しつつ捕鯨を年がら年中行い子作りをする際も鯨に与えないようにしなければ鯨を絶滅させることなどは出来ない。そもそも鯨を絶滅したいと願うなどという幻想を抱く人間自体の数が非常に少ないというか皆無かもしれないが、これは所詮一例に過ぎないから徹底的にありえない例を出してみただけのことである。普通は、もっと単純でもしかしたら叶うかもしれない幻想を抱く程度が面白かったりするのである。理想の異性と付き合えることを幻想としたり、自分が社会で唯一無二と呼ばれるほどにみんなから尊敬されるようになることとしたり。スケールダウンすればうまいものを食べたい飲みたいだとか、外国に旅行したいとか。って、これは幻想ではなく願望である。幻想というものは、やはり鯨を絶滅させるなどという100%あり得ないことを考えるからこそ幻想であり、絶対に現実で生きている限り手が届かないからこそ、幻想というのは魅力に映えるはずだ。シーシェパード号という存在がある時点で、鯨を絶滅させることは幻想となる。邪魔されて銃弾でもぶち込まれたら命を落としてしまうのだから、大変だ。

幻想と現実の境目を理解出来なくなるということは、先述したような絶対に不可能なる行為を『本当に出来る』と思ってしまうということであり、まともな人間だったらそういう境目を理解することは簡単である。だが、鯨を絶滅させる、なんてことを本気で考えてそれを目標とする人間が出て来たならば、それはおそらく、その人間こそが幻想と現実の境目をわからなくしてしまった人間と言えるのではないか。それは社会から逸脱するということである。社会の受け皿から零れ落ちて、どこまでも虚空へと落下していく、ということである。

その先にあるのはどんな光景だろうか。人間に理解できる範疇の光景ではないのかもしれない。どうなのかはわからない。だが、少なくともそこにはシーシェパード号はいないであろう。だが鯨も存在していないのだろう。ならば何が息づいているのだろうか。虚空の先には。

この物語の場合、そこには銀の平原が広がっており、そして蜘蛛人間が人間の代わりに繁栄している奇妙なる世界であるとなっているのだが、だが果たしてそれは本当だろうか、事実だろうか。そもそもが虚空の先などという空間があるということは偽りであるかもしれない。だがスペシャリストの方々は虚空の先には銀平原と蜘蛛人間が広がっていると信じているし、現に、ホスト男が見せられたあの漆黒の部屋での映像が人間を変貌させる効果を持っていることは事実。ホスト男は確かに涎をダラダラさせるだけの無能力者になつてしまったのだから、映像の驚異性は考えるまでもなく圧倒的である。そこには確かに銀平原や蜘蛛人間が映っていたわけであるし、ほっ太君は蜘蛛の足で殺されそうになったわけでもある。名もわからない少女にいたっては殺されてしまったわけでもある。

そういつた出来事があつたことを考えれば、虚空の先に奇妙なる世界が広がっていることもあながちあり得ると思える。ホスト男やほっ太君や少女が体験した奇妙なる出来事は、現実から逸脱していた。逸脱したものに会ったから、ホスト男はおかしくなつたし、

少女は死んだ。逸脱しているものというのは、何なのか。と言えば、すぐに答えは出る。

それこそが、虚空の先。幻想。ありえるはずがない、シーシエパード号も手を出せない、鯨も存在していない、虚空の先。それは人が触れられるものでない、理想の世界。それが虚空の先。銀平原で蜘蛛人間のいる世界が理想だと言われてもいまいち納得は出来るものではないと思われるが。

とにかく事態は混迷を深めていくばかりではないか。このように頭で考えるような言葉の数々が入り込むことによって、事態はより混迷を深めるだけで意味無しではないだろうか。

やはり事態は動かなくてはハッキリしない。物事をわかることは出来ないのではないだろうか。

ですからほつ太君のが体験する出来事を見守らなくはいけません。あるいはモヒカンガールが体験する出来事を。そうすれば、事態についてもっと理解することが出来るに違いない。ポロンだとか地球だとかスペシャリストだとかの動きを見てもよくわかりません。やはり同じ人間の動向を見守った方が、いろいろとわかりやすく、良いに違いありません。

所詮、我々には彼らの体験する出来事を追体験することしか出来やしないのでしよう。

住んでる世界が違うのです。

電動ドリル

かつて昔、日本にてオーロラは赤気と呼ばれていたそうだ。日本でオーロラを拝めるといふ機会など滅多にないと思うが、赤気などと名づけられていたのだから、日本でもオーロラを垣間見れる貴重な瞬間というものがあつたのだろうか。迷信が多い日本のことだから、その時は大騒ぎになつたかもしれない。『神さまが怒っていらつしやるのか』とか本気で考えて、頭を抱えて悩んでしまう信心の深いお方もたくさんいたのかもしれない。

だがまあ、近頃の日本人などというものはそんじよそこらのことじゃ驚かない。情報社会で伝えられる様々なる情報を頭に取り入れ続けている近頃の日本人というものは、知識が深々しいのですから迷信に騙されたりはしないだろう。だからオーロラを見て本気で『神さまが怒っていらつしやるのかも』などと考える人間というものは、昔と比べれば数が少ないのかもしれない。結構、冷めている人が多い現代の中で。

「まあ、こんなもんだよね」

みたいな、感じの人間は多く、それがゆえにオーロラが日本上空に突然登場したとしても、冷静に携帯を取り出し、写メを何枚もパチパチと取り『これ、すごくね?』などといつて気軽に友人にそれを送りつけたりしちゃう。たとえ『うららららあ』などという不可思議な音を聞いても、頭では『気味悪い』などと思つても、パニックがすぐさま生じたりなどはしない。パニックに陥る様がどれだけみともない様相なのかを心得ている人間が多いからかもしれない。だが、モヒカンガールは焦っていた。

「うららららあ!」

「うがっ」

「違つ。うららららあ、だ!」

「…うがっ」

「違つて言ってるじゃん！」

「ばちこーん。強烈な平手打ちがホストだった男の右頬に打ち付けられる。「うぎゃあ」と、聞く者に憐憫の感情を掻き立てさせる鳴き声を出しながら、ホストだった男はコンクリートに肩から倒れた。肩が硬い地面に打ち付けられることで損傷するような鈍い音。あららあららら、とモヒカンガールは口走りながら、ごめんなさい間違えた、と意味不明なことを言いながらホストだった男の肩を優しく擦り出した。男は「うがっ」。それを聞いたモヒカンガールは途端に顔を紅潮させてしまい、

「違つて言ってるでしょう！」

夜の闇を切り裂く怒号を発した後、ホストだった男の、今度は左頬をばちこーんと叩いた。「うぎゃあ」とさつきよりも聞いた者の心を空しくさせる叫声が上がリ、ホストだった男は痛めていない方の肩も痛めてしまった。両肩が損傷という悲劇。で、またモヒカンガールは、あらららあららら、と言いながら、ごめんなさいごめんなさい、と謝るのだった。

月はあつて星も相変わらずであることは良い。だけれど空は相変わらず漆黒の闇であるとともに烏の黒い羽が時折頭上より降り注いでくるなんていう、不吉な世の中でモヒカンガールとホストだった男は行く当ても無くぶらぶらと道を歩いたり、あるいはこうやって時折平手打ちが生じたりなど、と言った風にしながらとにかくぶらぶらぶらぶらしていたけれども、だからどうした。

どうしたかという。モヒカンガールの問題はまず家に帰れないことだった。様子がおかしな世の中では、愛している男と一緒にいようとも、住処が無ければいけない。何時どこから銀の刃が振りかざされるかわかったものではないからだ。だから家が必要だ。常に夜なのだし、常に危険なのだから家は必要不可欠だ。だけれど、モヒカンガールとその家族が使っていた家は、全身黒タイツ般若面のスペシャリスト何人かに、すでに使われていたのだった。しかも、他の家族の誰も見当たらなかったというのだから、心配にもなる。

だが玄関から家に入り込んだら、スペシャリストたちが炬燵でぬくぬくしながら鍋料理を突つついていたのだから、そんな家にいれるわけではない。モヒカンガールはモヒカンの鋭利なる針でスペシャリストどもを追っ払おうかとも思案したが、いかんせん数が多すぎたので逃げるしかない。

そういうわけで、モヒカンガールとホストだった男は、帰る家を失った状態のまま、スペシャリストが空を飛びまわる夜の不気味さを、突き進む他なかったのであった。突き進むと言っても、行く道がそもそもなかったのではあるが。二人は完全に迷える子羊みたいなものだった。

「ここは北でしょうか？」

ある時、二人は話しかけられた。全身が黒ずんでいるホームレスのような男だった。

二人が歩道橋で足を休めている時に、暗闇の中からのつぺりと現れたのだ。

「うががががつ！」

ホストだった男が唸る。警戒しているのだ。露骨に怪しいから。モヒカンガールは何て答えたらよいのかわからない。下手に答えれば何かをされるのではないかと思えた。怖いのは、ホームレスは片方の腕を後ろに回していて、隠しているのだ。

唾を小さく飲み込みながら、彼女はしかしはつきりと。

「いえ、ここは北ではないのではないのでしょうか？」

と伝えた。北朝鮮のこととは違う。もっと違う意味での北であるう。とにかくここは北では無い。

「そうか」

と言いながらホームレスのような見た目のそいつは、隠していた腕を二人に見せ付けた。

そこには電動ドリル。日曜大工に使うような。キュルルウと音が鳴るような。

「これずっと使ってるねん。この間からずっとこれを持って生きの

びてきてんねん。これが無いと生かしてもらえないねん。俺、仕事もしてないろくでなしだから、生きていくのに幅が狭いねん。あんたさんは、いったいどうやって生きてきてんだろつか？」

「うががががっ」

ホストだった男が、先ほどよりもやかましく唸る。警戒が強まっている。犬の格好をして、今にも襲い掛かるうとしてしている彼の唇から、涎が零れている。

「だめだよっ」

と叫び、モヒカンガールはホストだった男の胴体を抱きしめて飛びつかないようにする。

ホームレスらしい男は、それを見ながら、目を細くした。とても細くした。

その後にもう言った。

「この間、キックボードで通勤しとるギャグみたいな奴がいたねん。だから俺ねん、むかついたねん。だからねん、俺ね」

そこまで言うてから、彼は嬉しそうに、卑屈を含めた微笑み。そしてキュルルルウと電動ドリルを回転させた。

「キックボード蹴っ飛ばしてな、倒れたところをな、俺な、このドリルでな」

ホームレスのようなその男は、ふへへ、と下品に笑うと、二人にドリルの先端を向けた。

二人は戦慄して固まった。殺される恐怖に怖気付く。だが、ホームレス男は電動ドリルの回転を、途中でやめた。

そして、

「キックボードが、悪かったのだ。あんなにふざけていたから」

と言った後に、どういう心変わりだろうか。彼は、自分の額に、

電動ドリルの先端を当てた。二人は息を呑んだ。モヒカンガールは、

「や、やめてください」

とだけ述べたが、ホームレス男は卑屈な微笑みのままで、何か覚悟さえもしているような表情でもあった。他人が止められる状態で

もないようだった。

「俺はある時からおかしくなってしまったのだ。全てが上手くいかないということもワツと頭で理解できてしまって、絶望を頭で深めたのだ。だけれど周りはみんな大丈夫って言っているから、俺だってなんとかなるのかもしれない、とぬか喜びすることも何回もあったが、全部結局だめだった。それは俺が俺であるから駄目なのであって、どうしようもないことではない。だからキックボードのふざけた男を見た時に、ワツ、となってしまうって、あれを殺せば俺は俺でなくなるとなんとなく悟れたのだ。いや、勿論、本当はそんな風に思っていないかったかもしれない。ただ単にむかついてしまって、それが抑え切れなかったのだ。だがスーツ姿でキックボード何ていう姿を見せられて、君は耐えられるか？ いや、君はまだ若いからわからないか、この苦痛が、閉塞感が。俺はね、この電動ドリルを凶器にしながら道を歩いたよ。誰も彼をも信用せず、俺のやり方でもやるしかないと思っていた。けどもう駄目だね、こうなってしまう。お二人さん、仲むつまじいのはよろしいが、あまり見せ付けないでくれよ。悲しいものだから、みせつけられて。…血が飛びかかったら、ごめんよ、汚くてさ」

ホームレス男の電動ドリルが回転して、彼の額を貫いていく。皮膚から頭蓋骨へ、最後には脳を貫くのだろう。男は結局、最後まで自分の頭を貫いて行き、二人の目の前で勢いよく倒れこんだ。痙攣しているその体はやがて、秋の肌寒い夜風に吹かれて固まり、動かなくなった。

二人は夜の中、やがて、立ち上がった。

「いこうか」

「うがっ」

モヒカンガールは電動ドリルを拾って、近くにあったゴミ箱へと捨てた。

そして歩道橋を後にして、何処かへと歩いていく。

やがて闇の帳に隠れる。

その三日後に、ほつ太君が歩道橋に現れた。

豚汁

「はあ」

その歩道橋で、彼は白骨化した亡骸を見る。といつても、ため息はついたが、驚きはしなかった。ここ最近、白骨化している死体などそこら中に寝っ転がっているものだから驚くのものにも飽きる。

なぜ白骨化死体などがそこら中に転がっているのかと言えば、鳥の羽で空を飛びまわるスペシャリストたちに亡骸は肉を食われてしまふからだ。それに加えて最近は何びもスペシャリストの数が増え、頭がおかしい人間の数も増えた。

社会はすっちゃんかめっちゃんかだと言えた。すっちゃんかめっちゃんか。テレビだつてもう情報を伝えてくれやしない。新聞だつてそうだし、パソコンだつてそうだ。警察とかだつて機能しなくなつちやうだから、みんな白骨化したままなのかな。いや、何もわからないままだけど。わかるのはむちゃくちゃつてことだけ。みんなはどうしてるんだろうか」

ほっ太君は己の右拳を全力で握りこんだ。拳に力が漲っているのが脳に電気信号となつて伝わっている。ほっ太君は何か自信のようなものを持ち歩きながら夜闇を一人で散策していた。

彼は命の危険に遭っている何かを探していた。正が悪にやられるような危機を捜索していた。なぜかという拳を試してみたかった。力を振りかざす理由として丁度良いからこそ悪なる存在を探していた彼なのだが、自分が力を振りかざしたいから、なんていう理由を彼自身はわかつてはおらず、ただひたすらに胸の鼓動だけが激しく脈打っていたりした。少し危険な感じである。ほっ太君は子供ながらに調子に乗っていた。こういうのは大概、後で痛い目を見ると相場が決まっている。

だが、彼の拳がそこら辺の大人なら一撃でのせてしまえる程に強力なる物になつていることもまた事実であった。ボブサップだとか

チエ・ホンマンだとかいう怪物で無ければ、いや、彼らでもってしても、今のほっ太君の拳を止められるかは定かではない。

一撃で地面を割るといふ龍の拳を授かっているほっ太君は、常人離れの力を手にしているのだ。

例えば、先日カップル二人に襲いかかろうとしたあの電動ドリルあれが通常の人間の拳に突き刺されれば、中指の第二関節辺りからドリルが入り込み、一発KO。拳として再起不能に陥ってしまうことは考えるまでも無い。

だがほっ太君の拳ならば電動ドリルにカウンターをかませること間違い無しというか、よくわからんがとにかくいきり立った中学生が大人に腕相撲を挑んで瞬殺されるのと同様に、電動ドリルのその尖ってる部分を大破壊してしまうこと確実。ほっ太君にかかれれば、電動ドリルなどいきり立った中学生が軽く捻り潰されると同様に捻り潰せてしまうのだ。

恒龍との同化によって得た力である。

すごいね、ほっ太君。

調子に乗っても仕方が無い。

電動ドリルに真っ向から立ち向かって大破壊できるなんて、ギネスに乗るくらいでしょうよ。

無理無理無理。もはやほっ太君自身が怪物。

そんな彼は筆者がひいていることにも気が付かぬままに、歩道橋の丁度、中央にあたる部分にまで足を進めると、その柵に寄りかかって、下に広がる車道やその他諸々の、見え辛い歩道の暗闇なども眺めてみたりしていた。悪を搜索しているのである。彼の心臓は激しく脈打っている。

しかし彼の期待に悪が応えることは無く、ただひたすらに、夜は静かなる気配。

普段ならば自動車たちが渋滞を起こす、ほっ太君の真下に広がる車道は、あんまり騒がしくない。車の通行量というものも激減しているのが、最近の街の風景。

そのおかげか、どこかに生息しているのであろう鈴虫たちの騒がしい鳴き声ばかりが、ほつ太君の耳にしがみ付く。街は秋の風情。風もそれなりに吹き流れている。その時に。

「…?」

その風に乗って、凜とした風な女性らしき声が。くぐもった感じになっっているそれが、拡声器やらで通常でない騒音となっただ道を爆走し始めた。ほつ太君の背後の側からの声だったので、ほつ太君は柵に寄りかかっていた体を起こし、首を曲げて背後へと目を向けた。すると、白いワゴン車っぽいのに拡声器が乗っかっている代物が車道を走っていて、そこから女性の声が流れていることが判明した。女性の声は、何だか、くっちゃべっていた。長々と。

「…団結すべきです。私たちは団結するべきですのに、男のど阿呆たちは今日も頭が可笑しくなっているばかりでろくな行動を起こさず、酒や博打に明け暮れ、無駄話や下劣な話にばかり花を咲かし、ちっとも努力しようとしません。社会は改善されず闇に堕ちたままでは、弱者である子供は一体どういう未来を過ごすことになりましょうか、想像してみなさい。男たちは今こそその無価値なる生命を奮起させ、子供たちの明るい未来のために神風特攻隊のような勇姿を見せるべきではありませんか。少なくとも男たちが墮落の体たらくのままでは、私たち女が社会を奮起させるべき行動を行う他ありません。事実、今、多くの力強い女性たちが立ち上がり団結し、スペシャリストだとかほざく糞集団に対抗するべく戦力を整えております。男たちが本来守るべきである女性たちがそのように行動を起こしている事実に対し、力無き貧弱なる男たちはどのように思うのでしょうか。貧弱ですからうじうじするだけで結局何もしないのでしょね。舌打ちだけして、また墮落の体たらくへと落ち込んでしまふのでしょね。最悪ですね。もう知りません…」

ほつ太君はぼんやりとその言葉を聞きながら、「あほみてえ」と呟いた。

男でも女でもない、まだ『子供』であるほつ太君からすれば、ワ

ゴン車のくつちゃべつている内容は自分と関係あるようで関係ないような、曖昧な感じだと思えた。他所事の話のようでもあった。

ただ夜の暗闇で、ろくに周辺に人もいない街の中を爆走し、無闇に拡大されている声を放り投げまくっているそのワゴン車に対してやかましいと思う気持ちが強くもあった。だからほつ太君はイライラさせられてしまい、拳でワゴン車を叩き潰してやりたいと彼は思考した。

「まあそんなこと言っても仕方が無いけどね。こういうイライラしているときに怒つちゃうのって何かダサいしね。ああやってぎゃあぎゃあ騒ぐやかましい奴なんざそこら辺に幾らでもいるんだし、わざわざ目くじらたてるのはエネルギーの無駄ってやつ？ はっ」

最後に嘲りを入れた後に、彼は歩道橋から降り下った。ワゴン車のやかましさも遠ざかって聞こえなくなった。ほつ太君は垂曲公園へと戻った。今、あの公園は彼と恒龍の基地だった。

垂曲公園にはたくさんの方に帰れない人が屯っていて、まるで地震などの災害によって避難しているような有り様。老若男女が行ったり来たり、入り乱れて、ぐちゃぐちゃになってお互いの手助けをし合っている人もいれば、茫然としていて心をどこかに置いてきてしまったような様子の人もいる。

テントが幾つも建てられ配給所もあり、公衆トイレも設置されている。公衆トイレは大概人が並んでいるから野ですます人も多い。配給所には豚汁。白衣のおばさんが豚汁を容器に入れて渡したりしている。ここにはスペシャリストたちはいない。露骨に、おかしかったり狂っていたりする人も、いない。垂曲公園はその時避難所だった。家に帰れない人々の。

「ちようどいいな」

ほつ太君は腹が減っていた。力士みたいに巨大な人の背後に付いて、配給がもらえるのを待つこと十分。「はいよ」元気な声。「どうも」で手を出して受け取る。多少からだを冷やしながらも豚汁を受け取ることに成功して、熱々。湯気が昇るとともに独特の嗅ぐだ

けで温まる匂いが、幼い全身を包み込んだ。ずずつと噉りながら、ほっ太君は「ふはぁ」と大きく息を付いた。その息は湯気みたいに夜空を飛んでいく。

豚汁を

若者が数人、うへへへらへらといった雰囲気の兄ちゃんどもが、ほつ太君がいつも豚汁を啜るのに使っていた場所に座り込んでいる。「ぎゃははは」と辺りを気にせず騒いでいる彼らには近寄りがたい。「はあ」と小さなため息をついて、やれやれ、と言った仕草をするほつ太君という餓鬼。

仕方が無い、と思った彼は『基地』へと足を進めることにした。恒龍が人間に見つかることなく息を静めているであろう、窪みへと向かう。湯気の立っている豚汁を抱えながら。

公園の奥へ、奥へと。時折、陰りでカップルがいちゃついている陰りを、なるべく気にしないようにしつつほつ太君は、奥へ、奥へと。垂曲公園は無駄に広い。ほつ太君は豚汁が冷めるのが心配。

そして湖に到着する。恒龍が水を全部飲み干して陥没させた、あの湖。

しかし今は水面が張られている。静まり返っている夜の中で、湖は生物の気配などまるで感じさせることも無く、しかし確かに、水は満杯だ。濁っている湖の水が。黒い水面がそこにある。

ほつ太君は周囲を見回して、人がいるのかいないのかの確認を怠らない。人にこれからの行為を見られてしまつては困るのだ。

そして人が見当たらないことを確認してから、彼は湖へと、『足を着けた』。冷たくないのか。

冷たくはなかった。ほつ太君は平然とした表情をしている。むしろ得意気でもあつたかもしれない。

水中の何かを探るように「の」の字を足で描きながら、やがてどこかへと足を落ち着かせる。すると彼はもう片方の足も水の中へと踏み入れさせる。それでもほつ太君は平然とした表情のまま、水が冷たそうでは無い。そのまま全身を、黒の水面へと、沈み込ませた。

傍から何も知らぬ人物が彼のその様子を見たならば、少年が入水自殺を試みようとしている風にしが見えなかっただろう。だが、ほつ太君は入水自殺を試みたわけではない。

なぜならば黒い水面は、恒龍が施したカモフラージュだからである。実は水面の下には水が張り込まれておらず穴ぼことなっていた。その隠れた穴ぼこそが、恒龍とほつ太君の基地だった。

「上手そうなものを持つてるな。わつついの分もあるんじゃないのか？ まさかな」

恒龍は大きな舌を出して、犬のようにへらへらと舌を出している。だが、ほつ太君は穴ぼこを下りながら豚汁を一口啜ると、

「二杯貰うのは出来ないよ」

とだけ簡潔に述べるのだった。恒龍はへらへらしていた舌を口の中に閉じ込めた。

そして二本の髭を何だか気持ち悪く動かした。

「わかる。腹が減ってる」

「俺も腹が減ってる」

「わつついが餓死したら貴様も死ぬんだぞ？」

「龍はそんな貧弱じゃないでしょ」

「そう思うか？」

「そうだろ。伝説の生き物」

「伝説だからって食べ物が無くても平気ってわけじゃないんだよ馬鹿の糞。むしろ龍つてのはどんどん食べないとすぐに死んでしまうような生き物なんだ。お前らの想像上の設定だけで、イメージだけで、決め付けるんじゃないよ。もう腹ペコで結構やばいんだよ」

「でも俺も腹が」

「つべこべ言わずに、だ。また貰ってくれば良いだろうが、このどアホ。わつついは千年、星を食べ続けた」

「いらつくつ」

ほつ太君は恒龍に取られないように一気に豚汁をかきこもつとした。だが、恒龍も素早い。

しゅん、しゅん！

二本の髭が長さを変えてほっ太君へと襲い掛かる。彼が両手で抱え込んでいる容器を、柔軟に、髭が、金魚をすくうかのごとく繊細に。ほっ太君は目をまん丸にして驚いたが、驚いたところでどうしようもない。彼が何か手を打とうとした瞬間には、容器は既に髭によつて盗まれていた。

「ああっ！」

叫ぶほっ太君に、恒龍はいやらしい歪んだ表情を見せ付けた。そして髭が元の長さに戻ると同時に、恒龍は容器ごと豚汁を一口で飲み干してしまった。咀嚼も数回。感想は、

「でりしやす」

であった。嫌らしいことこの上無い。ほっ太君は少し泣きたくなつたが、拳を握り締めると、再び豚汁を貰いに行くことに決めた。二杯目貰えるだろうか、白衣のおばさん俺のこと覚えていてしまっているだろうか、という不安に駆られつつも、しかし彼の腹は空腹であったから急ぎだ。

「ちくしょう、相変わらずの糞だ！」

穴から抜け出る時に、ほっ太君は捨て台詞を吐いた。恒龍は、

「あいあいよー」

と、だけ答えてから眠りに落ちた。鼾を掻いて。

最悪としか言いようが無い。

「うひひひつやつた」

おばさんは幸いにして必死に働いていたのだろう。

ほっ太君のことなどまるで覚えていなかった。というわけで、二杯目の豚汁を彼は見事GETしたというわけであるが…。

秋の夜風。より寒さを増し。

食べる場所の確保を急ぎたかった。豚汁が冷めてしまつては最悪だ。豚汁はやはり熱々に限るのだ、なんていう、ほっ太君には願望があった。だから彼は必死にキョロキョロ眼球を動かしていた。だ

から彼は、急ぎ足であつて、彼のいつもの場所をいまだに独占しているチャラチャラしている野蛮なる騒ぎに向けて怒りを放り投げたりにしたのだ。といつても睨んだだけのことだが。当然彼らは彼らなりに楽しんでゐるから、ほつ太君のことになど気が付きもしないギヤハハハ、と楽しそうに。

「お、丁度いいとこ、めつけた」

割り箸を口で割りながら、彼は空いているベンチを発見した。そこで豚汁を平らげることにする。

周囲にはやる気の無い人の多いこと。公園の中でも陰りが濃い感じの場所であつた。だからベンチも空いていたのだろう。

着席する。座り心地は別に普通のベンチに。

座つたほつ太君の目の前では、三十くらいの男かも女かも見分けが付かないのが、尻をぼりぼりと搔いてる。そんな中で豚汁を食うのは、嚼るのは、いささか精神衛生上心地良い塩梅とは言えなかつたが他に場所も無い。ほつ太君は口で割つた割り箸を手で構えて、まず、どのようにして手をつけてやろうかと思索する。

しばし、思考。人參や葱や七味や豚肉。そして汁。湯気の出ているその、何から手をつけるか、という彼の時間。彼の口内では涎が滲みでるようになる。抑え切れなくなった彼は、まず汁を嚼つた。温かみあるちよつと濃い目の汁が、彼の口内でぶわつと存在感を主張する。

「いやああああ。うんめえええ」

笑顔を抑えることが出来ないほつ太君。そりや嬉しい。彼はとても空腹だったし、今は秋の夜でそれなりに寒い。そんな中での湯気が立つた豚汁なのだから格別だろう。

「いやあ、うまいうまい」

彼はあつという間に全てをたいらげてしまう。残されたのは空っぽの容器だけで空しい感じ。お代わりは当然できないよなあ、とほつ太君はため息。しばし、食休みの意も含めつつ悲しみの余韻に浸る。豚汁への鎮魂歌。そりや違う。豚汁への希望欲望媚びへつらい。

これも違う。豚汁への愛情請求。わけわからない。豚汁への？ 豚汁への弔い合戦。

豚汁への弔い合戦。なぜかこの思いついた言葉がほつ太君の頭脳で一致した。こりゃあなんか丁度良い、と、豚汁の弔い合戦という言葉を思いついたことへと己で己に感謝を思う。

ほつ太君は「ぷはぁ」と大きく息をついた。その息は湯気みたいに夜空へ飛んでく。

血に塗れている手

食休みも終了。

尻を搔いていた奴に屁をこかれることも無く、彼はベンチを後にした。

もう眠かったので、湖内の基地で休もうと思った。眠りに付こうと。

欠伸をしつつ公園を歩く。奥の方へと、奥の方へと。

先ほど温かい思いをしたせいだろうか、ほっ太君の全身は、末端から冷え始めている。奥へ進めば進む程、体は、時間の経過と共に冷えていった。ほっ太君は早く眠りにつきたい。

その道の途中で、異変。

「……………」

公園に設置されている街灯の明かり。それに照らされている物をほっ太君は見た。注視した。

それは烏の羽だ。彼はそれを注視した。

街灯の明かりはぼやけている。そんな中で黒がハッキリと、ほっ太君の視界に入り込んでいた。スペシャリストの物と思われる、漆黒の羽の欠片。

ほっ太君は立ち止まった。彼は思う。まるで烏の羽にスポットライトが当てられているような様が、非常に不気味だ、と。だから、前に進めなくなったのだ。

彼はしばらく意識を固まらせてしまった人になって、黒い瞳はずっと烏の羽と向かい合ったまま他の場所を映そうともせず固定された。息は定期的なリズムで繰り返され、繰り返されればされる程リピートされる頻度が激しく変わる。すー、はー、すー、はー。すーはすーはすーは。すはすはすはすはすはすはすはすは。湯気が出なくなりつつ、いらつき。意味不明。せっかくの豚汁への弔い合戦という意気込みをやっていた頭脳が、途端に苛立ちに満たされて

いた。すはすはすはすはすはすはすはすはすはすは。

ただ単に烏の羽が目の前にあっただけなのに、ほつ太君の呼吸は呼吸として非常に不器用となつてしまつていて上手じゃない。陰りに隠れていたカップルの一部が、不器用な彼を見ていぶかしむ。ほつ太君はそう思われていることになど気が付くことは出来ない不自由な鼓動。巢はすはすはすはすはすはすはすは。激しい呼吸は止まらず続いている。調子が狂い始めていた。

その時、街灯スポットライトのその円形を見ている時に、円形の縁から、何かが浸食していることにも気が付いた。スポットライトにじわじわと入り込んでくる何か。一つの、烏の羽へと向かつている何かだった。それは何かな、とほつ太君は視線を動かさずに注視しながらすはすはすはすはすはすはすは。そしてそれは、鮮血の手だった。ほつ太君は、わっ、と思つた。鮮血の手が烏の羽へとじわじわと、近づいていた。誰の鮮血の手なのかは彼にはわからな。だけれども思うのは、少女の手ではないだろうかという疑問だった。見過ごした少女の手。が、烏の羽へと、落ちていっている一つへと近づいている。じわじわと。いや、だがしばしの後、違う、と気が付いた。

標的はこちらだと思つた。ほつ太君の脳味噌に分泌される焦り。なぜならば、鮮血の手は、じわじわと地面に血痕を残しながら、進路を変更して、ほつ太君へと人差し指を示したのだから。『お前、みつけたよ』とでも言っているわけでもないだろうに。それは、人差し指は間違いなく、ほつ太君の双眸へと向けられていた。だからほつ太君の脳味噌は焦りでいっぱいになって零れ落ちた。

すはすはすはすはすはすはすはすはすはすはすはすは。気持ち悪い展開だと思つた。ホラーな展開だと思つた。あり得ない展開だと思つた。とてつもない窮地に陥ると自分を客観視するのだと思つた。自分は舞台の一役者だと思つた。それが人差し指に標的を定められた。ドラマで言うならば見せ場なのだろうかと感じる。自分が主役なのだとしたら、どうするのが正しい行為だろうか、と

感じる。

鮮血の手は五本の指を足にして、じわじわと、ほっ太君の方角へと足を進める。スポットライトからやがてはみ出て、ほっ太君の視界から消える。街灯に照らされなくなった鮮血の手は暗闇に潜んでしまつて視界からはみ出た。主役の己はどのような行動することが正しいのだろうかとほっ太君は思案する。戦うべきだろうかとも思い拳を握ると、汗まみれでオイルを塗つてあるみたいだと知る。逃げるべきかと思えば足だつてがくがくだからどうしようもないのだとも気が付く。ならば、こういう展開のときに、何をどうするのが一番、劇として盛り上がる行為だろうか、とほっ太君は思案する。焦りが分泌されている中で少年の俺はどのようなにして行動するのが正しいのだろうかふさわしいのだろうか、と彼は思案する。

そういう混濁の曖昧な流れの中で、彼は何時の間にか鮮血の手にしがみ付かれた。

「やめろっ」

叫び声を上げる己の滑稽さをどこかで感じて、自分で自分を嘲笑いたい気持ちに駆られる。すると、頬は自然と笑みを作つてしまひやめろ、と言いなながら楽しんでいるような笑顔だつた。自分は何をやっているのだ、早く手をどかさなければ殺されてしまうじゃないか、とも思うが、どのように振舞うことが正解なのか、などという自分の状態を客観視する感覚が再び生じてくるせいで、しがみ付いてくる手を離そうと思つても上手く決断が出来ないから踏み入つた行いが出来ない。手は恐ろしい程の握力で顔面を握り締めている。ほっ太君は握り締められていることに痛みを感じることも無ければ不気味さもはや感じておらず、なぜならば、それを味わっている己の感覚は所詮客観視できる劇でもあるのだ、とも言えるからだ、とも思つた。だけれど彼はそこで自嘲の思いにすぐ駆られてしまひ、『なんで俺はこんな冷静だ。気持ち悪い。まだ餓鬼だ』とも思うと、またにやけてしまった。馬鹿らしさが溢れて、表に出て来たのは笑顔だつたけれども、それさえも馬鹿馬鹿しい。とりあえずパニック

なんだから手をどかさう、って急に冷静になれたので、手をひつぺはがした。鮮血の手は、案外簡単に、『ベリ』っという小気味良い音で剥がれた。

そして、地面で転がった。鮮血の手が。

誰の手なのかはわからない。だが、ほっ太君はそれをもう一度拾い上げた。

「誰のかわからないからな。近くに、持ち主がまだいるかもしれない」

そう呟きながら彼は、しばらくまじまじと血だらけの、それを眺め見た。

見れば見る程、少女の手に見える。

だからもう見ないようにしようと思っ太君は思う。

その少女の物に見える手を眺めていると、思い出してしまふのだ。先日を経験した漆黒の部屋での出来事は嫌な記憶で、あそこで見えた光景も耳に入れた言葉も、全て嫌な記憶の一部として分類してきた。だから手を見ないでおこうと思った。だがほっ太君は、持ち主を探そうとも思ったので、手を道端に捨てたりはしなかった。

ほっ太君の顔面は、鮮血の手に飛びつかれてしがみつかれたせいで、気が狂った模様を付けた頭の可笑しい人みたいな感じになっってしまった。だけど彼は気にもせず、持ち主を探す。

街灯のスポットライトを一瞬浴びた彼の顔が、悪魔のように陰鬱だった。

言葉

目を覚ました。

あれ？ と思いつつ、ほつ太君は目の前で地面に横たわっている、でかくて不細工な尻を見た。さつき見た尻じゃないか、と思う。

「夢か。あ、夢だったの」言葉を発したその時に、風が吹いた。秋の冷たい風。

ベンチに座っていた。いや、眠っていたのだ。目を覚ましたのだ。どこからどこまでが夢？

「夢か。どんな夢だったっけ」

もうほつ太君は夢の内容を忘れ始めた。手繰り寄せようとするけれども夢と繋がっていた何かが干切れて行き、それに付して夢の内容も失われていく。秋の風が再び吹いた時には、もう夢の内容をほとんど忘れた。まあ、別にほつ太君はそんなことは構わなかった。どうでも良かった。まだ眠気があるので基地に帰って眠りに着こうか、と思った。何でこのベンチに座って眠っていたのかは思い出せないが、そんなことは直に思い出すかな、とも思いながら、彼は立ち上がる。

物静かな秋の夜。夜空を見上げれば、時折、スペシャリストたちの羽を伸ばす影が見える。そんな風な、少し恐ろしい部分もある秋の夜。日に日に気温が落ち込んでいる。太陽が昇らないせいだろうか。それはほつ太君にはわからない。とにかく眠いので、彼は公園の奥へと向かう。奥へ奥へと。

「寒いなあ……」

歩きながら、家族たちは今頃どうしているのだろうと思いを馳せる。このように物事がぐちゃぐちゃになり始めてから全てがバラバラになってしまっていて狂ってもいるから、連絡を取ることも出来ない。例えば、友達たちのことも想像する。学校で一緒に日々を過

ごしていた皆は、今頃何をしているのだろうか、などと。誰のことも見かけていない。そもそも、垂曲公園というところはほっ太君が過ごしていた場所とは、違う地区にある公園だ。だから知り合いがない。携帯を持ってきているわけでもないから連絡も取れない。

家には一度向かったのだ。だけれども、占領されていた。スペシヤリストたちに家が取られていたのだ。彼らは湯豆腐を食べていた。ほくほくな湯豆腐を、平らげて満足そうだった。表情はお面のせいで伺えなかったけれども。

ほっ太君はその時拳を振るわなかった。相手の人数が多すぎたこともあり、大人が数人いるという威圧感は想像していたよりもほっ太君にとって威圧的だった。力があっても腰から下が震えている感じになってしまい、戦える気がしなかった。

ほっ太君は街灯を見上げた。公園に設置されている街灯。それが地面を照らしている。照らされている所は、スポットライトを浴びせられているかのように唯一光っている。眩い。

彼はスポットライトの手前で足を止めた。足が自然と進むのを止めていたのだった。

じつと、そこで立ち尽くすことどれくらいだろうか。スポットライト、何も映していなかった。砂利の地面だけを、照らしていた。だけれどほっ太君、足を止めていた。呼吸が、気になった。何で自分の呼吸が気になってしまうのか、ほっ太君にはその理由がわからない。喉の奥に突っかかるような違和感だけがあって、それによって呼吸が妨げられている気がする。上手に出来ない。

そこになって、デジャヴ、という感じが湧き上がってきた。実際には先ほど見た夢での光景なのだから、そりゃ既視感があつて当然の如くのはすだが、夢でそれを見たということなどほっ太君はちつとも思い出すことが出来ない。だけど、足は止まっててしかもデジャヴだった。何かが起こるような気がするけれど、何が今から生じるのかハッキリとはわからない。と言う、奇妙な、心の躍動というかわくわく感。ほっ太君はスポットライトを注視する。砂利だけが

映っているそこに今すぐにも何かの姿を現すような気がするのだ。秋の風が吹いて首元が寒い中。

事態が突如。

「あつ」

スポットライトに突然に現れたのは、人。

何処からか画面が切り替わったかのように、突然に、砂利しかなかった地面に変化。

人が砂利を踏みしめ、スポットライトを浴び、ほつ太君の方へと顔を向けていた。

その子は右手が真っ赤だった。学校で給食の時に着るような割烹着を装着していて不自然な雰囲気だ。不自然なのはその姿だけではなく、目付きなどもどこか遠くへと飛んでいつてしまっていて、何を見ているのかよくわからない。真ん丸い黒目ばかりの目をしていたけれども、それが逆に気味悪い。それに加えて右手が真っ赤。さらに割烹着。

ほつ太君はびびるあまりによたよたとした。逃げようとも思った。どのように見ても突如出現したその少女は異常というか社会を逸脱してしまっている類の人間だと思えなかった。

だけれどほつ太君は、やはり、逃げ出すことも出来なかった。

少女をどこかで見た覚えがあったからだ。というか、突如現れたその瞬間から、「あれ？」とほつ太君は思うところがあつたのだが、しかし心内の何処かの部分が、それについて探ることをあまり良しとはしていなかった。『あんま考えない方がいいよ屑』と心のどこかにいる何かしらが危険信号を発しているような感じだった。

だが、まあ、結局何処で見たのかほつ太君はすぐに思い出さなかった。逃げ出す訳にはいかなくなってしまった。相手の目を見ているうちにわかつたのだ。腹貫かれた少女じゃないかと。

「……」

そりゃ、途端に気まずい思い。見捨てたのだから。見捨てた？ほつ太君は、『見捨てたわけじゃなかったよなあ』とひとりごちる。

しかし自分で自分に尋ねたので誰も答えてくれない。仕方が無いのでわざと『そうだよそうだよ』と心の中で呟いてみる。何だか空しかったので、嫌な気持ちになる。『だけどさあ、あの時には事態が混濁していて混雑していたよなあ』『だけどもつと気の利いたことが出来たかも』『だけどさあ、わけがわからなかったもんねえ。それに俺、子供だしねえ』『罪とかは、無いよね。子供だもの』『それなのに、気まずいんだねえ』『嫌だねえ』『どうしようか』『とりあえず、彼女の右手は真つ赤だ。それに割烹着を着ていて裸じゃない。だから、腹にまだ穴が開いてるのかどうかもわからない。逃げる時に、確かに腹からアレがはみ出てるの、見たのにねえ』『俺、怖かったよ、あの時、恐ろしかったよ』『恐ろしかったね。だから、今の目の前にいる少女のことも恐ろしいよね』『でも謝ったりしない……』『そうか。彼女が俺のことを恨んでいるのだとしたら、謝ったりして誠意のある態度を見せ付けなければ、もつとひどいことをされるのかもしれない。復讐されるのかもしれない、昼ドラマみたいな恐ろしい復讐のされ方をされるのかもしれない、女つて怖いって話はよく聞くからさあ』『じゃあ、謝ろうか、右手が真つ赤な彼女に。割烹着の彼女に。どう見ても頭が狂っている人にしか見えないけれど』『でも、こうやって自問自答みたいな会話を脳内で繰り広げている俺も狂人の一部とは言えないかな？』『わからない。もしかしたら、俺はもう社会から逸脱した人間の一人になってしまったのかもしれないね。狂人は自分が狂人だと気がつけないと言うし』『じゃあ、もう手遅れということ？』『そうかもしれない。ならば、彼女は仲間かもよ』『同類項』『子供なのに、難しい言葉を知っているねえ』『子供だけど、知っているんだ。どこかで聞いた』『やっぱり、もうおかしくなっているよ』

「ねえ、君、女の子。以前さあ」ほつ太君の唇が動いて、少女に言葉が向けられる。

どうなっている

「あ…あの…以前、まだこういう風に世情が大変なことになる前のことなんですけど、どこかでお会いしましたよね、僕とあなた」

ほっ太君は笑顔が無理矢理作りながら話しかけた。真顔で話しかけるか笑顔かの選択の中で満面の笑顔を選択した。真顔で話しかけるのは防御が手薄な気がして無理だった。こちらが真顔で話しかけたて相手も真顔で答えたら、非常に辛辣な空気になるだろうから、笑顔を作っておけばそういう空気になることは避けられる。

「……」

何も答えてもらえない。

ほっ太君は、少女との会話が辛辣な空気になるのだけは避けたい思いだった。それはやはり漆黒の部屋での引け目があるからで、辛辣な空気になればそのような引け目が真面目な顔から表出してしまいう可能性があった。だから事前に笑顔を作っておくことで、引け目が露出することを避けようとしたのだった。裸をあららと見たことにしろ、一度盾になって助けてもらったというのに、成り行きとは言え結果的に少女の亡骸を見捨てたことにしろ…本人を前にしたら気まずい。

とにかくほっ太君には、目の前の少女に対して通常に接することはまず無理だった。距離感というか壁をある程度作っておかないと引け目につけこまれるような気分がしていたのだった。

つまりそれだけ、ほっ太君はあの漆黒の部屋での出来事を気にしていたということだった。

だから少女がどういう反応をするのか確認することは、ほっ太君にとつては見ておかなければならない重要なことで、ほっ太君は少女の宙に飛翔している黒目がち両眼をガッチリと凝視していた。

しばしの凝視。秋の風が白けている。スポットライトに照らされている二人の子供。

少し静寂な間が空いた。その間ほつ太君は割烹着で右手が血まみれの少女の黒目をずっと眺めていたわけだが。結果、一つの、感想が湧いた。そしてそれは、

この人へんちくりんじゃない？

という感想だった。自分で自分のことをおかしくなっていると評していたほつ太君が他人をへんちくりんじゃないかと評価する。それはよほど相手がへんちくりんなのか、それとも、ほつ太君が頭おかしいからまともな人間をへんちくりんと評してしまうということなのか。果たしてどちらなのか。

割烹着で右手が真っ赤な状態で、夜道で茫然と立ち尽くしている女の子がへんちくりんなのかそうじゃないのか。社会的に普通に考えれば考えるまでもなく少女はへんちくりんだと評されると思う。だからほつ太君の評価はごく普通の意見だと思われる。一見したただけで『へんちくりんだなあ』という感想が少女に対して浮かぶのがきつと普通だ。けどほつ太君はしみじみ彼女を眺めた上で、観察した上で『へんちくりん』と実感した。何故そのように実感したのかと言えば、よく観察するとよりへんちくりんな部分を発見できるからだった。

小刻みに。小刻みに、ミキサーが回転する時に横に小刻みに回転するがごとく、彼女は小刻みな振動を行っているということが判明したらからこそ『へんちくりん』と再確認することが衝撃的に行えたのである。衝撃的に小刻みだった。

彼女はミキサーが小刻みに振動するように振動しているからこそ、ほつ太君の言葉に答えることをしないのだと。

黒目がちの両眼が宙へと旅行している上に小刻みに震えていて右手が真っ赤な割烹着姿の少女。

もうわけがわからないという言葉やへんちくりんという言葉では表現するのが申し訳ないくらいに、彼女はもはやアーティストなのではないかと思えるくらいに、超人なんじゃねえかと思うくらいに、何か言葉を掛けること自体が間違っていたというか愚かしいことだ

つたというくらいに、彼女は大自然の一部であり平凡たる己が見ることも許されなくらいにとんでもない奴なんじゃないかというくらいに、社会的没落というよりはこれじゃ社会的逸脱といってまさにふさわしいねというくらいに。くらいにゲシュタルト崩壊するくらいに。彼女は衝撃的に小刻み。

「あ。僕はもう失礼します。お呼びじゃございませんでしたね」

急に怖くなった。引け目も持っているのに何故俺は彼女に話しかけたのだろう、こんなにも危なそうな奴なのになあ、馬鹿だったな、話しかけた俺は。と思いつながら、ほつ太君はいそいそと彼女を通り過ぎようと歩を進めた。だけれど彼女の真横を通り過ぎる瞬間に、ほつ太君は肩を掴まれた。勢い良く、どこにそんな勢いを隠していたのかと思う程に勢い良く、ほつ太君は肩を掴まれた。思わずほつ太君の少女の方に目を向けると、何ということでしょう、今まで宙を自由飛行していた彼女の黒目がちな両眼がほつ太君をギョーンと射抜いているではありませんか。

まるで鷹か鷲のように尖った瞳で。鋭利な瞳で。さっきまで自由飛行で拡散だった瞳が鋭利で。

そして彼女は言った。

「右手が真っ赤なのは、血まみれっていうわけじゃないよ。念の為くふふふふははははははは」

喉奥から狂気が漏れ出しているような笑い声。

社会から逸脱してる。ほつ太君の頬が引きつる。それと同時に音ぼとぼとぼと、という。少女の割烹着の中から何かが零れ落ちて地面の砂利に落ちたのだ。それがぼとぼとぼと。

「なんだよやっぱりあんた腹がまだ開いたままなのかよ貫かれたままなのかよ」

少女の体の空いている穴から臓器か何かがこぼれたのだろうかと思つたほつ太君は怯えたような息ぎりぎりで口走る。だが少女は否定の意味なのだろう、首を横に振った。そして「違う違う。よくみなさい、ほつ太君。腹貫かれてたら生きてられないでしょ普通」と

彼女は馬鹿にした風な嘲りを混ぜながらほつ太君に言った。

落ち着いた声音で名前を呼ばれたことに戸惑いつつも、言われた通りにほつ太君は冷静になってぼとぼとという音を鳴らしたその臓器かと思つた赤色のそれを真剣に見る。するとぼとぼとという音を鳴らしたその正体は何だったのかようやく理解できた。

「なんで割烹着からこれが落ちてくるんだ。右手が赤いのは、これのせい、これのせい。血のせいじゃなくてえ」

言っている途中に咽るようなニンニクの臭い。「くはっ」鼻を押さえつつほつ太君、白菜とかを薬念で漬ける漬物、白米とよく合い、チゲ鍋などに使われても吉、様々な用途が可能な美味なる食べ物キムチの目が冴えるような赤を確認したのである。臓器ではなくキムチだった。右手の赤いのも血じゃなくてキムチだった。これは笑い話だ。グロい話になるかと思つたら、笑い話だった。臓器とキムチを勘違いするとは、キムチに失礼だった。

ほつ太君は、ほつと一息を付いた。

「びっくりさせないでくださいよ。血かと思つたじゃないですか。キムチか、キムチか。良かった、マジで。正直、臓器とかだったら気持ち悪さが半端じゃなくてどんびきでした」

その言葉に対して少女はこう答えた。くふふふ、と笑いながら。「そっかあ、良かった。私どんびきされると思つてたけど、大丈夫なんだ。そっかあ、大丈夫か。キムチは、そうだよ、おいしいもんね。私もよく白米で合わせて食べるなあ。もつと見る？」

「え？」

「いや、もつとあるんだよ」

ほつ太君は思わず「あるんですか」と、阿呆な程に茫然としながら答えた。もつと見るとはどういうことでしょうか、何を見せられるんでしょうか、とほつ太君から恐怖が再び表出しそうになった。なのでほつ太君は笑顔を作ってみた。

「いや、見るのはもう、いいです。ニンニクが臭いし」

断わりを入れてみた。こうやってはつきりとNOの意思表示をし

ないと何でも相手の思い通りになってしまつのが世の常。己の身を守るためにはハッキリとNO！と言える勇気と根性と愛が必要不可欠なのですよね、とほつ太君は心で呟いた。

だが少女はほつ太君の意見など鼻から確認する気が無かつたのだらうか、

「じゃあ、見せるね」

とコミュニケーションが成立しない。

「えええ」と思わずリアクションを取ってしまったほつ太君のことなどお構いなしに、彼女は先ほど地面にぼとぼと落ちたキムチを、むんず、と鷲掴み。「な、なにを…」とほつ太君は眉を潜めた、その次の瞬間。彼女は割烹着を、空いている方の汚れていない手で、割烹着をガバつとめくり上げた。露出狂みたいな勢い。

「あららら！」ほつ太君は目を背けようとしたけれども、しかし一拍を置いてから、彼は彼女の、露わになった腹の辺りに目が釘付けになってしまった。

その釘付けの目が、ぐるん、と白眼を剥いて、ほつ太君は昏倒。砂利に横倒しに。

ほつ太君が泡を吹きながら気絶してしまったことに快樂でも感じているのだろうか、少女は倒れてしまったほつ太君の哀れな姿をしばらく観察してから、捲れていた割烹着を元に戻した。

「くふふふう。いやあ、本当、この体になってから人を驚かすのは簡単になったもんだよなあ。常にニンニク臭いのが最悪だけど、ま、こんな世の中だし別にニンニク臭い女がいても別にいいよね。ていうか、ほつ太君は私が同級生だつていうことに何時になつても気が付いてくれないんだなあ。私ってそんなに存在感なかつたっけ？

ま、今は存在感バリバリなんだろうけどね。臭いじゃ負けないよねおそらく。このニンニク臭が体全体に詰まつてるんだもの。くふふふうふふあははは。あ、ほつ太君どこに運ばいいんだろ。このままにしておくのもなあ。ま、適当でいいか。って、危な、キムチがまた零れ落ちちゃうところだったよ。キムチといえども常に体に

入ってるんだから、地面で汚しちや衛生上よくなさそうだもんね。
あはははは。あーあ、なんで私生きていられるんだろ。謎」

殺伐

秋の風の冷たさを受け止めて、彼女はぶるつと一度だけ大きく震えると、倒れているほつ太君の手を握り取った。そして彼女はほつ太君をひきずった。ずるずるずる。砂利にうつ伏せになったままなのにひきずられてしまうほつ太君。

「あー。重いよほつ太君。とっても重い。だけどまあ、キムチな私に出来る行為というものは限られているのだから、これくらいはしてあげないとねー。風邪ひいちゃったら、可哀想だしね。だけど若い少女の私がキムチを腹に詰め込んでやっとかさ生きているっていう状況もなかなか悲惨な現状だとも思うけどなあ。あ、危なっ。また落ちるとこだった。ていうか、ほつ太君、重ーい」

愚痴りながら、時折陰りに潜むカプルのことも気にせず、彼女は闇夜を奥へ奥へと進んでいく。その間ずっとひきずられているほつ太君にはどんまいとしか言い様が無い。起きる頃には顔面が真っ黒になっていることだろう、擦り傷だらけで醜い有様に陥っていることだろう。

ずるずるずる。少年が少女にひきずられる音が、夜闇に響いている。

だが、中年男性のモノとおぼしき怒声が、途中、陰りのどこから突然流れたので、少年がひきずられる音は小さくなり、堅気とは思えないようなドスの聞いた声ばかりが夜闇に響くようになった。

声は、

「ざまあみさらせ、ぼけなす。俺の仲間の頭おかしくしやがったのはお前らなんだろ？ わかってんだよボケナスが。数で押し切れば人間みんなお前らにひれ伏すでも思ってたんじゃねえんか、ああ、わかってんか、お前、あ、おい。羽出してみろよ羽、出して逃げてみろよ、ああ、お前らさあ、お前らが社会におかしな奴を出したんだろつが。おかしいだろ、お前らが現れた途端にみんなおかしくな

って気が狂い出してよお、タイミングがおかしいだろうよお。お前らなんだろ、世の中狂わしてボコボコにしてんのは。わかっただよ俺ら。お前のせいであいつ、おかしくなっちゃったんだよ。お前のせいであいつ死んじまったんだよ。しかもお前らは死肉を貪りやがって。この乞食野郎。ああ。おい、これが人間様の実力です。わかっておりますか？ あなたは。ボケナス野郎、おい、羽出して逃げてみるよ。まあ逃げられねえけどな。逃げる前に俺らがお前を殺してやるよ。なあ？」

もう一つの声が相づちを打った後に、喋り出した。それは女で、柔らかな声音ではあった。

大人びたような落ち着いている雰囲気の中に、静かな怒気のある口調だ。

「マンホールってあなた知ってる？ まあ烏の羽なんか生やして夜空を飛んで私たちを見下しているあなたがマンホールの暗闇な世界を知っているかどうかと言えば、知らないのでしょうか。教えて差し上げましょう。マンホールの奥深さを、その羽をもぎとって滲み出る傷口に、塗りたくって、塗りつけて、ぐちゃぐちゃにしてマンホールの奥深さを教えて差し上げましょう。私たちは無闇にスペシャリストだとか名乗る気狂いなどにはならず、この夜の闇の中で人間として生きていきます。絶望的なこの世界には本当の救いなど何一つ残念ながら存在していませんが、私たちは夜の闇の中では景色と溶け込んでいるから安心できるのです。ははは。この言葉を聞いてスペシャリストのあなたは一つ察したと思うでしょうが、私とこの男の人、この二人は実は十分にいかれてしまっているのです。私たちらはいかれてしまっているのです。だからスペシャリストだとか名乗る異質で近寄りがたいあなたに立ち向かって、この矢を放って地面に叩き落してみせたような度胸もあります。いいですか、私たちは自分が正しいなどとは思っていませんよ。間違っていると思っ

ていますよ。憎しみには憎しみを返すのでは結局世の中はぐちゃぐちゃが増えるばかりで良いものにはなりませんよ。だけど私、私

とこの男の人はね、あなたが私たちの友人をおかしくして殺した時点で、もう復讐に囚われているというか、昼ドラの住人になったというか、ね。もう、悪役になる覚悟が出来たのです。だからあなたに出来るだけむごい仕打ちをしてやるうと企んでいるのです。あなたたちスペシャリストは、テレビで自分たちがさも救世主である、という様子で語っていましたが、許しませんよ。悪なら悪らしく、悪役らしく振舞えば良いのに善人ぶりやがって。そりゃ、人間の誰も彼もがあなたたちのことを信用したりはしませんでしたから、みんなそんな馬鹿ではありませんが、しかし、あなたたちが何かをしでかしたせいで世界は夜のままでしかもめちやくちやになった。あなた達にどんな思いがあって世界をめちやくちやにしようという決意があつたのか、私にはわかりませんしこの男の人にもわかりません。スペシャリストの事情なんて知りません。ですが私たちは友人を殺されました。いえ、親友です。親友が何かに囚われたように発狂して、彼はいなくなりました。きっと白骨化したのでしよう。あなた方スペシャリストとかいう阿呆に死肉を貪られてね。だから私とこの男の人はね、あなたに、今からひどい仕打ちをするのです。……耐えなさいよ。死んじゃ、駄目だよ？ あなたには苦しんでもがき泣いてもらわなければいけないから。許しを請うようにむさび泣いてもらわなきゃいけないから」

男の人は、女の長い演説のような言葉に相づちを打った後、このように呟きました。

「じゃあ、こいつ。マンホールの中に、詰めようか。圧迫させて殺す」

終末

このようにして、人間たち皆様方はスペシャリストに対する怒りを爆発させるようになりました。

人間たちはスペシャリストにやられてばかりではありませんでした。中にはスペシャリストを殺そうとする直前に、急に「私はもう何もやっていけない。今、私は死ぬ。生きていくことを終える」と呟いて持っていた包丁を自らの頸動脈に切り付けたりするお方もいました。そうやって誰かが可笑しくされる前にと、自分が可笑しくされる前にと、人間たちはスペシャリストを必死になって殺すようになりました。火炎放射器。チェーンソー。斧。ナイフ。銃。鋸。包丁。鈍器。ゴルフクラブ。金属バット。メリケン。などなど。様々な凶器で、地球の表面は覆い尽くされました。夜の闇の中で、鮮血が流れます。ポロンの判決を下された地球が、真っ黒な地表を膿んでしまったかのごとく、人間対スペシャリストの構図が世紀末的な、凶暴な、慈悲の無い、もがき苦しんで泣いてしまうような、殺されながら生きているような、世の中を作り出していました。

一言で世の中その時の状態を示すならば、『殺るか殺られるか』といった風であり、暴力的な人間が社会に跋扈するように変わっています。元々暴力的だった人間が暴れ出した、というよりは暴力的な人間の数自体が増加した、という風でした。そこら中で気が狂ったように殺戮を繰り返す人間が少数でなく多数現れている世の中というものは、なんつうか、ほんと、世紀末って感じです。それが普通って感じになりました。

世紀末が普通ってというのが、世の中の基準として成立していたのでした。

そういう風になってしまったのでした。ちなみに、その状態は長い間続きます。

朝日が昇らないままの世界なので、そんなものが長いこと

続いたら世の中は余計にはちやめちやになるのですが、しかしそのはちやめちやを終わらせる希望のようなものが社会に出現することもありません。日に日に世の中は狂氣的というんですか、とにかくめちやくちやになっていってしまっています、最悪でした。暴力は当たり前で強盗などの犯罪もそこから中で発生。かつてのように人々が優雅に午後にティーを楽しむなんて状況はどこでも見られなくなり、みんな、没落した平民でした。平民が没落するということは貧民になるという感じであり、みんな臭かったり顔が真っ黒だったり性格が荒廃していたり、って感じになってしまいました。おおらかな人間なんて希少ですよ。みんな我が我がって感じで生きているのです。腹が減れば他人から飯を奪い、相手が抵抗すれば凶器で脅すなどして飯を略奪しようとしています。相手も凶器を持っているなどしますから、自然とそこに暴力が発生します。一人対多数の構図になれば確実に一人の側は損をしますし、たとえ多数がそうやって弱者から物を奪ったりなどしても、その多数の中でもいざこざが発生するのが日常茶飯事で、多数ですからそれは周辺も巻き込む程の大騒ぎになったりします。その大騒ぎが人を集め、そこでもまた争いが勃発したりなどして騒ぎが大きくなったりします。

で、めちやくちやが深まります。

そうやってして社会は、人々は、動いていました。スペシャリストが根絶されることはなく、相変わらず彼らは夜空を鳥の羽で飛んでおります。スペシャリストの代表である松岡は、スペシャリストが発している電波放送の中で相変わらず自らの正当性を主張し続けます。いろいろと小難しいことを言ったりするのですが、いつも結論は、

『我々は正しいからあなたたち人間を良い方向に導きます。地球は現在危機ですが、私たちがあなた方を管理すれば、地球も平和です』
ということだった。そんなことを言っているスペシャリストが実際にやっている事は、人間の頭を社会的に逸脱したようなバグった感じにするだけのことであり、人間側からすればそれが良い方向な

どとはとても思えない。むしろ悪い方向としか思えない。だけどスペシャリスト松岡は『私たちはあなた方の救世主です』などのたまっている。実際には人間はスペシャリストに救われるどころか、頭をおかしくされてしまっているというのに。

だからやっぱり、人間とスペシャリストの溝は深まるばかりだし、人間同士の溝も深まるばかりなのだった。人間の中に『希望』とも言えるようなみんなをまとめるリーダー的存在がいれば、人間たちもバラバラにならずにすんだかもしれない。だが、リーダーは存在しない。なぜならば人々は『リーダー』の存在など信用しないからだ。それは『救世主』を信用しないのと同じことだ。人間たちが信じているのは皆、己、であった。信じられるものは己だけだ、ということを手で行くのが人間たちであった。だから、人々はリーダーなど信じないし救世主などといったら更に持つての他だ。

だから人間たちはバラバラのままだ。個人個人がそれぞれ生きていくだけだ。

だから人間は争うだけだ。殺しあうだけだ。狂うだけだ。

もうおしまいだった。

或いは、もう、おしまいだ。

考慮（前書き）

僕の作品はくだらないですか？ 駄目な作品ですか？ それとも最高の作品ですか？ それとも最低な作品ですか？

僕自身は最低な作品だと思っています。だけど、最低なりにいろいろとやっていると自分で思います。僕の作品はそういう作品ですが書き続けます。やめたりはしません。途中でやめたりはしません。最後まで書きます。

存在する価値があるかどうかの話は別にね。

だけど俺は自分の作品を価値あるものだと思ってるぞあ！

考慮

『憎しみに憎しみを返した時あなたは報われる。さらに加えるならば、自分の為だけに生きた時、滅びる快感に身をやつしながら全てを疑うことも可能となる。だからあなたは孤独だ。だけれど生きていくことはできるかもしれない。選択肢は限られている。何かを信じて死ぬか、何も信じず生きるか。その選択から逃れるならば、何が必要でしょうか？ 何が必要でしょうか。さらに加えるならば何が必要でしょうか。何がどうしようもなく大切になつてくるのでしょうかかどうしよう』

言葉。言葉の景色。つまり活字の景色。万華鏡つてぐにやぐにや歪んでいるよね。そんな感じで、言葉が言葉の景色になつてた。あるいは活字の景色になつてた。万華鏡がぐにやぐにや歪んでいるのだ。なんだそれ。よくわからない。万華鏡はぐにやぐにやにならなんでしょう。万華鏡がそもそもぐにやぐにやだよ。そんな感じで、言葉が、ぐにやぐにやだ。活字がぐにやぐにやだ。どういふことかというと、活字の万華鏡と云えばいいのでしょうか、そんな感じ。それがね、眼前でぐにやぐにやしたの。例えば、こんな言葉たちの群れが、ぐにやぐにやしたの。

大海。天狗話。想起。紫。群青。夢。滅亡。刹那。幼児。書類。
悲愴。浪漫曼荼羅。同情。無。若草。拘泥。電波。枯葉。電柱。蛆
虫。豊穰。暗闇。恥。吐露。現前。対置。家族。逃亡。逃亡。苦慮。
演説。生物。啓蒙。優雅。優雅。愛。異質。自演。遊離。激怒。貴
族。股間。追悼。高層。自負。過労。妄想。虚。貧相。正常。乙甲。
羞恥。逢瀬。組織。蛞蝓。苦。兄弟。退行。援交。進歩。進行。社
長。距離。飛翔。願望。乖離。真実。追憶。真心。法事。報復。笑
顔。機械。登山。渋茶。機会。念。醉狂。飛躍。嘘。伽藍。文章。
豪胆。胆力。富豪。自薦。詠嘆。心。忌憚。労働。幼児。公証。貞
淑。借金。後光。情熱。吐露。邪教。神。夢想。稀代。緑青。徒勞。

調教。放蕩。織毛。真。反語。咀嚼。小梅。破廉恥。潤沢。鬼才。
紅葉。信。製鉄。百足。胃袋。雀荘。

活字でしかも全てが黒の文字たちが、熟語たちが、意味合いも持たず、景色となつて、目の前で、通り過ぎることもせず、交差していて、万華鏡みたいで、緩やかに、しかし時に何か切迫させるように、慌てさせ、めちやくちゃに、無意味に、めちやくちゃ。例えば思うのだけれど目に見える景色が全て万華鏡の現在だけれども、世界が通常このように全て活字であつたらならばとても面白いのじゃないだろうか。世の中は今、めちやくちゃで、スペシャリストたちのせいでめちやくちゃで、全ての社会の通常な法則が成り立たなくなつていて予想が付かない有様だけれども、めちやくちゃ繋がり、活字たちが全て世界に成り変わるといふか、とにかく、活字が世界を埋め尽くしてしまつたら、これは本当めちやくちゃだ。想像してみたのだ。別に、そういう世界が良いって思つてるわけじゃなくて、ちよつと想像してみたということなのだ。活字だらけの世界。それつてとつてもぐちやくちゃじゃないのだろうか。黒色だけれど、文字つて、たくさん種類がある。

だつてさ、例えば今俺が生きているこの世界では、様々な気ちがいがある。或いは、様々な絶望がある。或いは、様々な狂気がある。だけど、おかしなことに、全てがどこかで見たような光景といふか想像の範疇だつたりする。というのは、皆、『どこかで見たような』ことしかしていなくて、なんつうんでしょう、ほんと、テレビとか小説で見かけたことのあるような出来事ばかりが現実に出出し始めたというだけで、フィクションがノンフィクションに変わったといふだけで、本当の本当の意味でのめちやくちゃというものはまだ何一つ現れていないと思う。だからさ、なんつうのかな、もっと異常なことがさ、頭も心も全てが澄み切つてとろけてしまうような異常つていふのかな、そういうのはスカツとすると思ふんだよね。お笑い芸人が、予期せぬハプニングで彼自身想像していなかった滑稽を犯した時に大きな笑いが生じるといふやつ半端がないバージョン

というか、そんな、スカツとした感じ。レモンスカツシユのように酸味のあるスカツとした感じの百倍濃厚な感じ。

想像の範疇を飛び越えた出来事というか。現世を超越した出来事というか。常識を覆した出来事というか。人間の想像を遙かに超えている創造というか。例えば今、俺は『創造と想像』とかいう風に言葉を掛けているけれども、こんなのは愚かな人間が思いつく想像の範疇であり、本当にめちやくちやで想像が付かない創造というわけではない。所詮、想像が付く創造だ。だから、活字だらけの世界とかすごいんじゃない、みたいなことを俺は考えたけれども、所詮、これだつて人間である俺が頭で思い浮かべた時点で人間の想像の範疇ということじゃないか。俺が言っているレモンスカツシユの百倍くらいの濃度のとんでもない代物つてのは、もう、本当に、とんでもない代物であるに違いないのだ。とんでもない程にありえなさすぎて誰もが思いつかないような出来事が表出するということが本当の意味でのめちやくちやだと俺は思うのだ。だけれど、今の世界は人間の想像できる範疇の暴走だとか暴力だとか殺意だとか狂気だとかが溢れている。もう、全て出し切っちゃってる感じの世界。既に知っていることばかりの世界。それを繰り返すだけの世界。「こんにちは」と言われたら「こんにちは」と返しますみたいな常識ばかりの世界。全てが決まりきっている世界。全てが冷め切っている世界。予想外が起こり辛い世界。というか、私たちが知りすぎてしまっているから全てを冷めた目で見ていいのかもしれない。じゃあ、知らなければよかったということだろうか。でもたしかに、世の中の様々なることを知らなければ、何にも無知ならば。今の俺みたいに、想像が付かない創造が見たいですみたいな意味不明なことを言い出す奴も世の中に出てくることは無かったのではないだろうか。もっと、この社会の中で、スペシャリストたちがはこびり人間たちがそれを殺すために精を出すという狂った社会の中で、少なくとも、想像が付かない創造が見たいです、と言い出すことは無かったと思う。俺も殺し合いに参加していたことと思う。もっと狂気と凶器を

持ってして、他の人間たちと同じようにスペシャリストと戦っていたことと思う。頭がおかしくされる前に、奴らを殺していたことと思う。だけど、今俺は、戦うことをせずに、想像が付かない創造がみたいっす、みたいな戯言を言いながら欠伸を掻いたり屁をこいたり逆上がりをしたりブランコを漕いだりしている。何故、そんなことをしているのか自分でもたまによくわからない。でも、みんなが戦っている中で俺自身はそんな意味の無い行動を取っている。それは誰もが認める程に無意味な行動だし、阿呆みたいとしか言いようがないし、みんなが戦っている中でブランコを漕いでいるのだから周りから白い眼で見られてもそれは仕方が無いというか当然だ。

だけど今の世の中というものは、我が我がみたいな、己が己が、みたいな個人主義というものが跋扈していて実際それによって都合良く社会が回転できていた部分がたくさんある。だけどその都合良く回転できたことによつて、確実に、たくさん、犠牲があつたのはまた事実で、たくさんの方が我が我がと言つて飯を食うために何が何でもな行いをやり続けたことによつて、もう、頑張れば何とか回避できたような犠牲だとか失敗だとか、たくさんあつたのに己が己がとか我が我がという欲望の突っ走りによつて回避できていないと思われる。そもそも『殺るか殺られるか』なんて社会はもう最悪な社会で常にストレスを感じつつ何も報われず最終的に死ぬ、みたいな社会じゃないか。

そんな最低な社会の中で、子供だった俺は、懸命に、恒龍の力も借りながらだけれども、しかし運良く生きてきたわけだが、生きてきてきたわけだが、もう、こんな世の中にはうんざりだったりする。朝日も昇らなくて常に陰気だし。もっと人は人を大切にすべきなのに常に凶器が振り下ろされている。あの時子供だった俺も、今や青年だ。青年になって社会はマシになつたかと問われればどう考えてもYESとは言えない。世の中はつきり言つて弱肉強食であり、常に凶器が振り下ろされるかどうかな感じた。俺はもう、しんどい。正直、もっとやり方というものがあると思われれるのです。それだと

いうのに、みんな興ざめなことをして他人を排したり或いは己の希望を叶えようと躍起になったりする。周りのことを滅ぼして、周りのことを見下して、周りのことを苦しめて、己の懐を温める。それは結局、孤独へと一直線なルートじゃないですか。それなのに孤独になるために一直線なことをやってしまっている弱肉強食社会が今であり、スペシャリスト対人間というよりはもう、とにかく個人対個人みたいな感じが浮き彫りで、常に心はストレスに襲撃されなければならぬ。俺には恒龍の力があつたのでこれまで生きのびることもできたが、普通、あの暗黒時代の始まりからこれまで、子供だった俺が生きのびることが出来たのは、本当、恒龍の力のおかげであんな弱肉強食の時代にただの子供が生きのびることが出来るのは普通あり得ない。大抵、殺されて死ぬ。狂った大人から被害を受けたりするのが通常だと思う。なぜならば、子供は非力だからだ。処世術も大人に比べれば、当然、下手糞だからだ。ただの大人が生きるのに必死な世の中で、非力な子供が生きれるわけが無い。スペシャリストだって夜空を飛んでいるわけだから、いつ頭がおかしくされるのかもわかったものじゃない。或いは、もう頭が可笑しくなっている可能性も低くは無い。こうやってブランコを漕ぎながら、ひたすらに脳内で愚痴を言い続けている俺というのは、やはり頭がおかしくなっているのかもしれない。それは子供時代の頃からそうだったから、やはり、子供時代から俺はおかしくされてしまったのだ。あの、スペシャリストどもが、夜空を飛びまわり始めたせいで、地球が夜闇に包まれたせいで、俺は、自分でも気が付かぬ内に、頭をおかしくされてしまったのかもしれない。だとしたら、空しい。ブランコを漕ぐだけの人生というのは。だけど仕方が無い。こんな風にみんなが、己、己、と言うのが口癖の世界で、社会では、もはやブランコを漕ぐしか他にないじゃないか！こんちくしょう。

ああ、また、嫌な光景だ。今、夜の陰りで、俺の目の前で、誰かが殴られている。俺はブランコを漕いでいる。錆びている鉄を握っている俺の手に、じよりじよりとしている汚い感じが心地よかった

のに。けどまあ、誰かが殴られているけれども、しかし殴られる音が生々しいのも、もはや何の気にもならない。ああ、殴られてるなあ、って感じでもはや同情の念すらも湧き上がってこない。なんて薄情な人間だろうか、俺は。夜の闇の中、やっぱり俺はブランコを漕いでいるだけだ。目の前で誰かが誰かに暴力を振るわれているのに、俺はブランコを漕いでいるだけで結構これに満足しちゃっている。

俺は、あの殴られている人を救うことが出来るだろう。何せ龍の拳を俺は持っているのだから。そんじょそこの糞どもなど軽くポコポコにしてやる程度に最強な拳なのだから。喧嘩で負けるわけがない。けど殴るわけにいかない。だって、今、社会で常々起こっていることは、これはもう、戦争ですよ。常に殺るか殺られるかが蔓延しているという悪夢なのだから、一度拳を振るえば喧嘩なんてものじゃ済まない。これは戦争ですよ。戦争と言わずに、何と言えばいいのか。

戦争の中で俺が最強の拳を振るうということは、それがどういうことかと言えば、俺が兵器になるということだ。俺自身が最低最悪な人命を奪うための兵器になるということだと思っ。そんなのが許されるか許されないか、と考えたら、それは許されるべきではないと思っ。誰が許さないのか。俺が俺を許すことが出来ないのだと思っ。格好付けるようだが、これは事実だ。

ブランコを漕いだりして戦いに参加しなかった俺には、俺なりの哲学というか信念みたいなものがあるからこそブランコを漕ぐ必要があったのだ。ブランコを漕ぐというのは無意味だが、暴力や己が己がという行為を縦横無尽に闊歩させる連中よりは、これは、無意味な行動を取る俺の方が人間としてまっとうだと俺は思っ。傍観者を気取っているわけではないのだ。無意味な行動を取ることによって、俺は俺なりの意志を表明しているということなのだ。

そんな俺が、最強の拳である龍の拳を振るって他を成敗するということとは、これは俺が俺の哲学を破ることに繋がると思っ。自分の

生き方を否定することに繋がると思う。それは己で己を殺すことに繋がる。己の人生を否定することに繋がる。だから、俺は目の前で殴られている人を助けることが出来ない。相手に対してすまないとおもおうのだが。ブランコを漕ぐことしか出来ないのだ。

だけどそうなると判明してくる事実が一つあって、それは、結局、俺も所詮は、『己が己が』と言っている連中と同じだということが判明するのだ。俺は俺の哲学だとか生き方だとかにこだわって今、他を見捨てようとしている。龍の拳を振るえば彼を助けることは出来るのに、俺は、己の行き方を守るために他を見捨てようとしている。それは結局、己が己が我が我がと言って他を弱肉強食をする連中と同じレベルのことをやっているに過ぎないような気がする。ただ単に、ちよっぴりあいつらと比べて穏健なだけで。結局、やっていることは俺も、己が己がということに違いは無い。

だが、やはりそれでも俺はブランコを漕ぐのだ。俺は目の前で殴られている奴を助けるわけにはいかない。なぜなら、今あそこで殴られている奴も所詮、ろくな奴じゃないから。この社会で生きている奴は大概がろくなもんじゃない。実際、見た感じひどくみずぼらしいし、言っちゃ悪いけど魅力が無いし。助ける気にもならないような雰囲気。

結局、全てはどうしようもないのだ。それに、俺が龍の拳を振るったら、それが話題になってしまって、俺は有名人になっている。ろくな人に名前が知れ渡るようになってしまいかもしれない。今の世の中でそれは非常に危険で、そりゃ有名になることはそれはそれなりに良いことだとも思うよ。人に注目されるってことは己の存在を誇示できるってことだ。それは何だか格好いいじゃないか。

だけど今の世の中で有名人になったら何かしらの理由で殺されてしまいそうだから、危険だ。だからやっぱ、常軌を逸している力のある龍の拳を、俺は振るうわけにはいかない。様々な理由を考え含めた上で、俺は龍の拳を振るわないし、目の前の彼を助けることもしないで、ブランコを漕ぐことを決意している。

これが今の俺が取れる、ベストな、あるいはベターな、とにかく真面目に考えた上で出した結論だ。だから殴られている人、許してくれ。俺だって、頑張っているのさ。不真面目に何も考えずに適当に己の欲望に突っ走る奴よりは、俺は多分ましな奴だ。だから、どうか、許してくれよな。

こんな世の中だ。自分の身を守るだけで、精一杯だ。

だからどうした

時ばかりが流れて、問題は深刻化していく。

「仕方が無いよね」

人々が生まれる中で、人々が死んでいく。大人が死んで赤ん坊が生まれる。子供が生きていくこと或いは成長していくことは、安定しない社会の中で難儀。だから子供は子供のまま屍となり、或いは肉体ばかりが大人として成長したという存在になる。ただ夢中に我武者羅に生きるために。

愛することの幅が失われているということかもしれない。人に対する許容の薄い心。余裕が無いから。個人が。社会が。余裕ないから。「生きるために他を殺す」

朝日はいまだ昇ること無く、夜間はさらに世界に広がり人々と同化している。

街のそこかしこに落書き。K A E F E Y A O K D だとか、E Y A G + X I W E T A だとか、A G J H O I A E K G J A E U だとか、A D O G K E J G O A E M G だとか言う、わけのわからない落書きが、赤のスプレーや青のスプレーなどで、古びている鉄橋や空家の塀、学校だった場所の壁や病院、公園、とにかく壁と思われる何処にでも描かれている。きつと壁に落書きを描きたいという奇人がいたのだらう。スプレーで描かれたその落書きは、まるで意味不明。動物の死体を処理する者はおらず、骨がそこら中で転がっている。死肉はスペシャリストが食べるから滅多に転がらない。骨ばかりが転がり、時折通過する車などに、骨が踏み潰されて粉状になっていたりする。栗を拾うような格好して骨を拾う奇人の類なども街を歩いていたりするが、そんな奴が突然、背後から何者かに襲われて殺され、自らが白骨化したりする。ミイラ取りがミイラに。

「そんな格好して、呑気な奴だ。だから殺されたわけだけでも、そのことについて弁解は出来ませんか？ 出来ないよね、君は殺され

を再び我が物顔で飛びまわるようになる。すると突然、夜闇で銃撃音が再び鳴り、さつきまで死肉を貪っていたスペシャリストが車道に墜落した。撃ち落されたのだ誰かに。そのスペシャリストの痙攣しながら血を流す身を、向こう側から走ってきた軽自動車が轢いてトドメを刺していた。その軽自動車はしかし、それによってバランスを崩し、近くの電信柱に激突してしまい、黒煙を吐き出しながら停止してしまった。その中から出て来たのは二人の人間。女と女。二人は「あーあ」と言いながら悲しそうに呻くが、そんな場合では無い、頭上から狙うはスペシャリスト、仲間を殺された復讐ということだろう、彼女らの頭上で円を描いて飛んでいます。女と女はそんな危機に気が付くこともせず、呑気に、「あーあ」と嘆息し合うばかりで、自分がスペシャリストを轢き殺したことに気が付いておりませんでした。そして三度目の「あーあ」を女が呟いた瞬間に、事態が進行しまして二人は殺されました。なんと、スペシャリストが襲い掛かったわけではなく、どつかに潜んでいたのでしょうか。男の三人組が下劣な笑みを浮かべながら背後から女と女を襲撃したのです。襲われる女と女は、様々な暴行を加えられた後に、殺されて車道に放り投げられました。そんな二人に対して「うへへ」とこれもまたお下劣な微笑みを浮かべた男三人組が、頭上からスペシャリストに頭をおかしくされました。というわけで三人は元々犯罪者の思考があつてヤバイ屑だったにも関わらず、さらに頭をイカレポンチにされてしまい、近くに置いてあつたピストルで順番に自害していきました。「朝焼けに身をやつせば助かるのに」と呟きながらトリガーを引いたようです。その転がった三つの亡骸をスペシャリストたちが貪り、あつという間に人間三人は白骨化しました。そのスペシャリストが今度は消防車に轢かれて殺されました。中から消防士の格好をした凶暴な顔つきをした何人かが降り下り、轢かれたせいで痙攣しているスペシャリストたちを火で燃やしました。なぜ消防士の格好をしておいて火を発生させるのかは謎ですが、スペシャリストはこれによって全員燃やされてしまいました。「よく燃え

るなあ、スペシャリスト」と消防士の格好をした者の誰かが呟き、その言葉を聞いた他の仲間が相づちを打ちます。そして落ちていたピストルは彼らの武器となって、消防車の中に持ち込まれます。そして消防士の格好をした連中は、街の中を、獲物を探すかのようにして再び徘徊を始めました。そしてその途中で、交通事故の現場を目撃しまして、どんな状況だろうと伺いますと、彼らはそこに奇妙な光景を見ます。一人のホスト風の格好をした男性が、車に轢かれたのでしょうか、息ぎりぎりといった様子で血まみれで今にも死んでしまいそうです。その近くに、恋人でしょうか、ワンピースを着ていて、そしてなぜかモヒカンの女性がいます。そのモヒカンの女性が恐ろしい程に鬼気迫る表情をしていて、その女の人は何をしていたかと言うと、頭突きを繰り返すことで運転手を殺していました。車の運転をした不注意もしくは故意で、運転手はホスト風男性を轢いたのでしょうが、その報復行為ということなのでしょう、モヒカングルが凄まじい勢いで何度も運転手に頭突きをかましているのです。運転手はもう死んでいました。見るも無残な有様です。そんな光景を目の当たりにした消防士の格好をしている連中は、どうしようかと相談し合った結果、モヒカングルが気持ち悪いので殺してしまおう、という結論になりました。モヒカンの女性を見るのが彼らには耐えがたかったようです。或いは、何かむかつ腹が立つ理由となった様子です。連中の誰かが、車内で不適な微笑みを浮かべつつピストルの準備をして、弾の確認をした後、「今日の戦利品を早速試してみましようか」と呟きながら下車しました。そして、頭突きをいまだかましているモヒカングールの元へと近づき、「動くな」と叫びました。

そして、消防士の格好をした男は、ピストルの引き金を引きました。

弾が発射される音と共に、夜闇に鋭い銃撃音が鳴り響きます。しかし、残念ながら。

弾は受け止められました。

「うふふふふふ」

女の狂っている笑い声。

モヒカンガールのモヒカンに、弾は、受け止められてしまったのです。

彼女は怒り狂っておりました。

長年連れ添ったホスト風男性を殺されたことにより、気が立っているでしょう。

「うがっ」

吠えと共に、モヒカンの鋭利なる針が、男の首に突き刺さりました。

生々しい音が鳴り、ピストルが、車道にガチャリと落ちます。

人が死んで人が死んで人が死んで、です。

消防車に乗っていた男たちは、彼女の怒りで容赦ない拷問に遭った後、生命の息吹を無くして車道に放置され、スペシャリストによって白骨化させられ、後々に通り過ぎる車によって骨を粉々にされて粉末化。塵となって、空気と一体化。それはつまり、夜闇と一体化。

だからどうした。

どうしたかといつと

どうしたもこうしたも無い。稲妻が闇を切り裂き、大雨がアスファルトに激突の音を立てる。体内を循環して時と共に一人の中で息づいていたあの血液たちは墜落した大雨たちの流れで排水溝まで導かれていく。吸い込まれて混ざりこんで赤を薄めやがて雨と変わらなただの汚水。血液は生命の証だったけれども、宿主を失くせばすぐに汚水と寸分変わらぬ有様となるのだ。宿主はもはや粉末となって風に吹かれ、夜闇と一体化してしまっただけだ。

稲妻がまた横に走った。だけどそれは実際には稲妻じゃなくて龍だ。銀色の龍が夜闇を珍しく飛んでいる。大雨の日に銀の龍は夜空を横に走ることがあった。それは己を稲妻とすることで龍という身分を隠しているということ、つまり、カモフラージュなのだろうけどそれで天の目から逃れることが出来るなんて不思議だけど…恒龍はただ稲妻として夜空を横に走り、銀色の鱗が付いている長い胴体をくねくね蛇のごとく動かしながら散歩。そして彼は、歌を歌っていました。

こんな詞でした。

わつついの体を舐め腐るな天の声

わつついの心を舐め腐るな人の声

千年の誇りと千年の努力

わつついの頭を舐め腐るな馬鹿の天

わつついの体を舐め腐るな馬鹿の人

千年星はわつついのモノだったんだぜ

わつついは心のままに空を飛ぶぜ天罰なんて知ったことか

もう全てが有耶無耶でむちゃくちゃならわつついの全てを見せ付ける

君の心にハイジャンプ お酒を飲んで飛翔ジャンプ

いるから。もうそれは、その男は、骨だ」

大雨と混ざってノイズのように乱れる声を、果たしてモヒカンガールは聞き取ることが出来たのだろうかはわからない。壁に頭を押し付けてモヒカン突き刺したまま、彼女は俯いていて、身動き一つをしない。

やばいな精神的にこれは完全にきてしまっている。慰めてやるのが真つ当だろうが、わつついはただの酔っ払いオヤジみたいなもんだからまあ、なんつつか、こういう人を慰めるという機会に出くわしたことが少ないからなあ。ていうか龍が人間を慰めるなんて状況自体が始めてだし。でもこいつが発狂してきて襲い掛かれたらわつついの銀色ボディに傷を付けられてしまう可能性は濃厚だ。この女のモヒカン針は痛いからなあ。刺されるのはいやだなあ。とりあえず連れて帰って寝かさなきゃ何するかわからんぞこのモヒカン女。そのように思考した恒龍は、というわけで二本の髭を、器用巧みに動かしたり伸ばしたりすることによってモヒカンガールを包み込んで垂曲公園へと連れて行こうという行動を起こした。

だが上手く行かない。なぜならばモヒカンガールが髭を拒むのだ。壁に突き刺していたモヒカンを壁から離し、近寄る髭を威嚇したりもするのだ。「うががっ！」と、ホスト男の吠えを真似しながら。

彼女はそれによってホスト男が死んだという事実を受け入れることを拒もうとしているのかもしれないが、恒龍だって非情では無いのだからその気持ちを理解出来ないわけではないが、しかしここで雨に濡れたままでは寒さで体調を崩してしまうのも事実なのだから、恒龍としてはモヒカンガールにはおとなしく基地に戻って眠りに着いてもらいたいところだ。

「うがががっ」

だがモヒカンガールは警戒を強めて、モヒカンの鋭利なる針で恒龍の髭二本を近づけないように威嚇する。そんな彼女は目から涙を垂れ流していて、頬も真つ赤だ。しゃっくりもしている。充血している瞳。憐れな彼女。そして、その彼女の傍らにはホスト男の白骨

化したものが置かれている。うんとも、すんとも、言わず、ただ雨に打たれ、今にも泣き出しそうだけれども泣くわけが無い。「うがつ」と言う訳が無い。突っ込んできた車に命を奪われ、死肉をスペシヤリストに食われてしまったのだから。

「夜はまだ続くんだぞ、ほつ太の姉。風邪でもひいて熱を出しても、誰かが薬を渡してくれるわけでもない。とりあえず、今は帰ろう。生きたいだろう？ スペシヤリストにだって、死肉を食われたことに対して復讐するなら、生きていなければ出来ないんだし、誰にホスト男が殺されたのかはわつついは知らないが、そいつのことも殺してやらなくちゃ、駄目だろ。…え？ そいつはもう殺した？ ああ、それならばそれはそれで良いだろうが、スペシヤリストはまだたくさん夜空で飛んでるんだからな。とりあえず、暇なほつ太の野郎が基地か公園にでもいるんだらうから、あいつに薬とか探してきてもらおう。風邪を引いたら、厄介だからな。ただでさえ、寒いばかりなんだ。温まるモノも探してきてもらわなくちゃな。あいつはわつついの強さを同化で得ているにも関わらずちつとも碌なことをしないから、こういう時に働いてもらわなきゃ駄目だ。またブラコン漕ぐなんていう意味不明なことをしているんだらう、まったく、あいつもスペシヤリストに頭をおかしくされてんかな。だがまあ、わつついと同化しているあいつが頭おかしかつたら、わつついも頭がおかしくなくちゃ話が合わないんだからあいつは正常だ。わつついも正常だ。このようにツラツラと言葉を話せるし、筋道通った理論も展開できるよ。ほら、ほつ太の姉、モヒカン女。お前は、まだ生きるべきだよ。復讐のためでもなんでも良い、お前が生きてホスト男が死んだ。だったら、お前に生きる意味があるんだらうよ、何かしらの」

長々しいが静かで、芯のある言葉ではあった。酔っ払い龍は酔っ払い龍なりの言葉で彼女に語ったということだろうか。それを相槌も打たずに聞いていたモヒカンガールは、しかしキョトンとした瞳をするだけでまるで何も理解出来ていないようであった。いわゆる

白雉のように。涙を両頬に伝わせているその顔は、夢見心地なのだろうか、恒龍の髭のある位置ばかり眺めていて、焦点が合っていない。日本人形のように感情の欠落している両眼が、何も映していない。

おそらく疲れているのか、もしくは虚脱状態なのだろう。

そんな彼女に対して憐れみを用いながら、恒龍は二本の髭を再び伸ばし、そしてくるくると彼女を包み込んだ。彼女はもう「うがつ」とも言わなかったしモヒカンを振るったりもしなかった。おとなしく髭に包装され、大雨の中、基地がある垂曲公園へと、髭の温もりに冷えた体を温められながら輸送されて消えていったのだった。

残されたホスト男の骨の、一部分を、モヒカンガールは持ち去った。

ホスト男の一部分だけが欠けている亡骸が、大雨にぐずぐずにさられてやがてくたばって車道に転がり車に轢かれて粉々になった。粉々になった骨が大雨で湿りぐずぐずを強め、もはや何が何だかわからぬぐずぐずとなって、終わった。果てた。くたばった。ホスト男は跡形もなく闇と同化した。

おかしく

大雨が止んだ頃。

垂曲公園などというフザケタ名前の場所にフザケタ基地。湖の水が陥没していることなど人々は知らず、その底で銀龍が住み人が住んでいることなど、もつての他、命のやり取りに夢中であるから知らない。だから数年間、子供が考えたようなこの秘密基地は大衆に認知されることなく一つの家として公園の中に在った。

「おららあ」男の怒声。

「ひえええ」女の叫声。

かつては避難場所として安全地帯であったこの垂曲公園も、現在では暴力と墮落と陰湿に塗れ、非常に人間らしい生活をするのが難しい環境となっている。

公園の内部で、ホームレスらしい風貌の人間たちが焚き火をしているがそこでは当然のごとく犬が燃やされている。勿論、食すためだ。近頃の人間たちは皆、犬など躊躇なく食うのだ。犬なら贅沢なほうで、蛙や百足なども時には食べてしまう。そのような有様だから、数年前にほつ太君がたいらげていた豚汁などはもはや幻の一品として人々に認知されている。犬がご馳走として認知されているのだからそりゃ豚汁など食べれるわけが無いのは当然であった。

「脂がのつてるのうこいつ。近頃では非常に珍しい。どっかの金持ちが育ててた犬じゃろうかのう」

「あんま一人で食べてんじゃねえよおっさん。燃やしたるぞ。蹴り入れて焚き火でおっさん焼いてやったっていいんだで」

「おっそろしいこと言うんじゃねえよ。仲間じゃねえか、おいおい、やめてくれよ。仲良く食べようぜ、ほら、上手そうな所が焼けてきたじゃねえか。これ、全部お前さんが食っていいからよお」

「わかればいいんだよ、おっさん」

「と、みせかけて」

「うぎゃああ何するんだおっさん突然背後から忍び寄って蹴り付けて、俺を業火の中に放り投げるだなんて、熱い熱い、助けてえ、皮膚が燃えちゃうよお。更に言えば臓器が間ッ逆さまに天国かもしくは地獄で裁判だよお。蜘蛛の糸に期待、俺もう燃えちゃって駄目死ぬ」

「安心しろがきんちよ。お前の燃えた体を我々の肉欲が平らげて差し上げる。所詮、貴様はなんらの価値も無い猿の一匹だ。だから殺すことに躊躇も感じぬ。恨むなら無個性の安心に浸ることによって他の追求を避ける甘い生き方をした己の無考を恨め。はっはは」

「貴様も死ぬ」

「誰だお前。うわあ」

恐怖、もしくは憎悪と言えよよろしいだろう。正解なのだろう。人間も犬畜生と同じような価値として扱われ他の人間から食されているが、それに対して神が救いの手を差し伸べてくれるわけでないのは、元々人間たちの多くは神の救いなど求めていないのだから当然である。死ぬ時にも救いはなく、がきんちよは、「ああ、空しい」と言っただけでもその思いなど誰も汲み取ってはくれないままに果てて、ホームレス風の糞人間どもに食られて白骨化するのだった。

本当、人が死ぬばかりである。最悪な社会である。ハートフルもロマンも皆無の絶望的状况である。

そんな垂曲公園の秘密基地に、酔っ払い龍である恒龍が静かに着陸して髭を解いた。解かれた髭から姿を現すのは、日本人形のような黒目で一点を眺めたまま停止してしまっているモヒカンガールである。目を開いたまま気を失っているのだった。

壁に電球が幾つか埋め込まれているだけの基地は、蝙蝠や土竜あるいは蚯蚓が住むのに適しているのではないかと思える程に薄暗い。その薄暗さの陰の中から声が上がった。

「何で帰って来たんだ姉ちゃん。ここで暮らすのに嫌気が差したんじゃないの？ まあ別に帰ってきて構わないけどさ。ここ

つて、無駄に広いし」

蝙蝠土竜あるいは蚯蚓と思われる程に陰気な声である。陰に住むにふさわしい程にその声には元気が無いというか、やる気が無い。果たして、それはこの最悪な社会で年月を幾ばくか過ごしてきたほつ太氏の姿である。これからはほつ太君では無く、ほつ太氏と呼ばなければならぬ。見た目は覇気が皆無な薄汚れた青年という感じであるが、この物語の主人公である彼を呼び捨てには出来ないのほつ太氏と呼ぶのである。

恒龍が成り行きをほつ太氏に説明した。目を見開いたままピクリとも動かないで横たわるモヒカンガールを挟んで。しかしほつ太氏は特に驚いた様子も見せず、濁った瞳のまま。

「そうか。そりゃ大変だったよな。姉ちゃん寒そうだから毛布か何か探してくるよ。それが俺の役割となる。役割が存することに感謝感激雨嵐。アメフラシ。あめふらしっていう虫みたいなものっているよね？ あれって上手いんかなあ。まあいい、俺は毛布を探してくる。恒龍君はここで寝そべって心地よい夢でも見ているといいよ。俺は去る」

と、濁った声音で語ると、ボロ布を身に纏っただけの薄汚れた姿で、基地の壁面に取り付けられている錆びだらけの梯子に手を掛け、地上へと登って行って消えていった。

冴えないほつ太氏の後姿を見送った後、恒龍は小さくため息をついた。地面に横たわっているモヒカンガールに対して憐れみの視線を向かわせつつ、もう一度小さくため息をついた。そしてもう一度冴えないほつ太氏の後姿を見送ろうとしたけれども、彼はもう地上へと消えていた。恒龍はもう一度ため息をついた。そして眠りに付くのだろうか眼やにだらけの瞳を閉じると、最後に、

「やっぱりあの男は、おかしくなってしまうたのだろうかなあ」
とぼやいて鼾をかいた。

ふああ

「僕はせくしい。だけど君もせくしい。だから矛盾が発生している。異議は。何がこと細かく設定され、僕はせくしい？ ぷっぷっぷぶうぶ。いやあ、なんつうか、湿気が欲しい、なんて、いつてる」

「スマイリーなわたし。わたしはわたしと平仮名でわたしと己を示す。その意義を与えたのは誰による声？ あるいはこれも設定でしょうか。わたしはスマイリー。平仮名で己を示す」

「ぷるこぎを食べていたの。遠い昔の、遙かなる絶望の追憶よ。もう家庭は帰ってこず、胃がぎぢぢするばかりで、胃ギ。意味分かん。屁こきたいっ」

三人の頭上ではスペシャリストがせせら笑いを浮かべている。イカレタ頭になった人間を眺めることを悦楽としているような不気味さで、残酷さで、スペシャリストは夜空を回っていた。

そのいかれている三人の言葉を耳に入れながら、特に何の感情も沸き立たせることなく公園を歩いていくほっ太氏は、その時毛布を探していたが、何やらその時、彼は非常に苛立っていた。

『ブツ』

屁の垂れ流れる音がさらにほっ太氏の苛立ちを増幅させる。屁を垂れ流した人間の方を見ると、それがボロ布を身に纏いつつ「ぷるこぎ、ぷるこぎ」と言っている顔の汚い女性であることが判明して、さらにその女性が末期な黄色の歯垢をこびりつかせたまま満面の笑顔だったので、ほっ太氏は慌てて眼を反らしたが、さらに苛立ちを深めることは防ぎようが無かった。一度見てしまったという事実は変更できず、脳味噌に残像がこびり付くには一度は充分過ぎた。

（ここにいる三人全員生きている意味ねえんじゃねえの、何ならあそこで焚き火やっている連中を呼んできてやるうか。あいつら乞食だから人間でも平気で焼いて食っちゃうんじゃねえかな。あ、でも、

もう人焼かれてるな、あれは。道理で異様に臭いわけだ。公園で人焼くとか本当勘弁してくれよ、道徳は本当どこにいつてしまったのだ。やっぱりこんな社会に生きてる限りは真つ当に生活するなんて不可能だな。毛布もきつと見つかるまい。このまま毛布も見つからず姉を凍死させてしまうことになったら大変だな。そうしたら俺の責任かな。ははは。責任。責任を負うのは、嫌だな。こんな世の中なんで責任なんて背負わなくちゃいかんのか理解が本心から出来ない。けどまあ苛立つても仕方が無いな。俺は人を殺したり殴ったりしないだけ人間として、マシだから。それを誇りにしてるからお前らみたいなのとは違う。はっ、そのお前、何を人なんて焼いてるんだ、おい。人を焼いてどうすんの、食うってマジ頭いかれてんのか？ ていうか、人を焼くなんて行為にまで及ぶのならば、それを食うんじゃなくてさあ。…もつと、あるんじやないの？ 例えばほら、もつと想像が付かないことしてくれないかなあ。見てるこつちをアツと言わせるような感じのことをやってほしいよね。そりゃ最初は人を食ってんのは衝撃的だったけど、いまやそれが普通だし。スペシャリストに頭をおかしくされて踊り狂ってる奴のほうはまだ見てて面白いわ。まああいつらも踊り狂ってるだけで碌なことしないから見ててイラツクけど。つたく、何もしないんだつたら自分で死を選べよな。人間生きてるだけで牛さん豚さん大量虐殺してんだぞ、おいこら。まあ牛さん豚さんなんてこんな狂った社会じゃ拝むことも出来ないけどねってああしました。豚汁のあじわいを思い出してしまった。…ああ、なつかしい。ちょうど、この公園で白衣のおばさんが配っていたのだった。あのおばさんももう、きつと、死んでしまって白骨化したのだろう。ちっ、誰が悪いのだ。誰の責任だ。少なくとも俺は暴力は今まで振るってこなかったぞ。俺は、ああいう暴力的な最悪な連中のような行為はしてこないで生きてきた…あんな連中と俺は違う。存在の根源のレベルがはつきり言っただけ。恐ろしい程に違う)

ほっ太氏は心の中でだけ悪態をつきながら、表面上は実に平凡な、

無表情な顔つきをしている。なるべく己の考えていることを表出しないように無表情を努力して形作っているのだ。思っていることをいちいち表情に出して自分の感情を心無い愚かな人間に読み取られるのが、彼にとって屈辱だから。

このようにしてほつ太氏は偏屈というか、長い年月を経て、以前よりも荒れているというか、とにかく殺伐とした人間になっていた。ただ彼のような荒廃の具合はこの社会ではたいしたレベルではなく、むしろ恒龍の力のおかげであろう、彼は力を持っているからこそ精神の荒廃が他よりは進行していない。人間を食う人間が公園で存在している社会なのだから、他人に悪態を付く程度の人格はそんな社会の中では言えば、荒廃している側とは言えないだろう。

荒廃が遅れているほつ太氏は公園中を歩き回り、そして『穴』の位置を確認をしてそこから離れた場所を歩かないようにしながら、姉に被せられるような毛布を探していた。

『穴』とは、この暴力だらけの社会で暴力を振るわずに生きるためのほつ太氏の智慧である。

どうということかと言うと。それが活用される例をいまから出そうと思う。

例えば、公園を歩いていると確実に出くわすのが野蛮人。本日も出くわしました、ほつ太氏。

「うへっへ。てめえ、金出せよ」

「跳ねてみるよ。小銭入ってんだろうが？」

「金ないなら死んでもらおっかなー。腹減ってんだよねえ」

野暮ったい集団という奴であり、古典的チンピラという奴であるが、世紀末なのだからこんな奴らが現れてもそりゃ何もおかしくない。むしろ自然な出来事と言ってもいいかもしれない。格好も昔の不良といった風だが、この社会の中ではそんな服装が出来るのは恵まれている方である。普通はみんなボ口布に身を纏い、奴隷のように道を歩く。一体どこから時代遅れの特攻服を調達してくるのかは不明だが、事実身に纏っている。奇妙な謎を携えながら襲い掛かっ

てくるその野蛮人どもは、手に釘バット。そこにはこびり付いて落ちないのであるう血液。逃げなければ、或いは闘わなければ、マジ殺される。命の危険である。

ここで『穴』を使用する必要が生まれる。使用方法は。

「あ、待ちやがれこの野郎」

まずは脇目も振らずに相手から逃げ出し、距離を空ける。木々が生い茂る陰りに逃げ込み、器用巧みに根っこに躓かないように注意しつつ、ひたすら全力で距離を空ける。この日は大雨の直後であるため湿っているから、普段の1.5倍は滑りに足を取られぬよう気をつけねばならない。ある程度まで距離を空けて、一旦、相手の視界から逃れることが出来れば、『穴』を使用しても大丈夫な状況と言える。見られてる状態で『穴』を使用するのは好ましいことでは無い。無論、相手との距離を空け切れなかった時はやむを得ない。相手の視界の範疇にあっても、『穴』を使用し、魔の手から逃れなければならぬ。

ほっ太氏は『穴』の位置を暗記している。何処に『穴』があるのか知っているのだ。その暗記している位置に到着した彼は、誰かに見られていないか確認するために鬱蒼の夜闇を一度見回した後に、両足でほいっとジャンピング。跳躍。それによって、なんと、着地と同時に、地面がパカッと開き、ほっ太氏はその地面の『穴』へと吸い込まれ、姿を消したではないか。

これによって暴力を振るうことも振るわれることもなく、不良集団から逃れることが出来たということである。ほら、後から現れた不良集団のあの挙動不振ぶりを御覧下さい！

「ちっ。どこにいきやがったあの野郎。ああ、もう、金でも人間でも何でも持ってかねえと、明美さんに怒られちまうじゃねえかよ、おい、どうすりゃいいんだよお、俺、罰を受けたくねえよお、何されるんだよお、うわああああん」

「お、落ち着いてください先輩。大丈夫ですって、明美さんは今日、機嫌がよかったですよ」

「嘘付けど阿呆。明美さんは今日マジ半端ない鋭利な瞳をしていらしたぞ。あれはやばい。殺される。ああもう嫌だああああああ。うわああああああん」

不良は泣き出して、さらに、漏らしていた。それ程明美さんたる人物に怯えているのである。何をされるのだから知らないが、きつとひどい目に遭うのだろう。少し可哀想だが、ほつ太氏はそんな事情など知らない。不良には不良の事情があるのと同じく、ほつ太氏にはほつ太氏の事情があるのだ。だから、例えば不良は、ほつ太氏が『穴』に入った瞬間に、最悪なる出来事に遭遇してしまったという事情を知ることが無いのである。

何があつたかと言うと。彼は『穴』の中で、不良どもという難が去るのを待っていた。だが『穴』に入った瞬間、ほつ太氏は心底より苛苛する羽目に陥った。何故ならば、先ほどの大雨のせいだろう、ほつ太氏の入り込んだ『穴』の内部は床が沼のようにぐずぐずだったのに、ほつ太氏はそこに勢い良く足からズボツと入り込んでしまったのである。彼の履いている靴は穴だらけだから、沼のぬめぬめが容赦無く指の隙間や爪の隙間に侵入する。最悪である。足の甲辺りに這うような違和感も感じたので、もしかするとミミズとかの不快感が靴内に侵入した可能性もあつた。最悪である。

その困難を紛らわすためだろう。ほつ太氏は独りぶつぶつと『穴』の暗闇の中で、喉から絞り出すように愚痴を言い続けた。苛苛を言葉で紛らわそうと言う彼なりの起死回生の手段である。いや、まったく起死回生ではないけれども。

「…はっ、んだよ、おいっ、はっ？ なんだよ、おいっ、これ、はっ、おい。まじ、これ、はっ、おい、あ、あ？ おい、まじ、んだよ、あっ？ これ、まじ、おい。はっ、んだよ、おいっ、はっ？ まじ。んだよ、おいっ、これ、はっ、おい。まじ、これ、はっ、おい、あ、あ？ おい、まじ、んだよ、あっ？ これ、まじ、おい」

ほつ太氏は呻きながら、愚痴りながら、悲しい。或いは、空しい。何故、こんな風に『穴』の中などというただの落とし穴みたいな空

間で一人、足元の最悪なぐずぐずぬめぬめと格闘しなければならぬのか。

今日は本当に最悪な日だ、とほつ太氏は思う。ホスト男も死に、モヒカンの姉も倒れてしまった。それだけでも大変なのに、その姉を助けるために毛布を探しに出た途端に、いつもの不良集団に襲われ、暴力を振るわないという信念の為にわざわざ『穴』に逃げ込まなくてはならず、その穴に入ってみたら大雨の影響でぬめぬめの沼。叫ぶ気力すらも、もはやほつ太氏からは、失われてしまった。彼の荒れた唇から洩れるのは毎日の徒労で疲れ果ててしまった肉体の嘆きであるかのような空しいため息。

「ふあああっ」

第二段階

「みなさんこんばんは。常にこんばんはですが、こんばんは。本日も様々なニュースを皆様方に提供しようと、考えていたのですが、本日は緊急特番として、「スペシャリストと人間の未来」という内容をお送りしようと思います。スペシャリスト松岡さん、よろしくお願ひします。相変わらず、恐ろしい般若の面ですね。格好も黒タイツのままだ。烏の羽は仕舞いこんでいるのですね」

「人間の皆さんこんばんは。私の顔がむかつくからってチャンネルを変えたりテレビを消したりしないでくださいね。って、テレビが今現在社会でどれだけ残っているのかもわかりませんがね。あ、烏の羽ですか。烏の羽は仕舞いこんでおかないとね、痛いんです。あれ、背中が痛いんですよ。出していると」

「そうですね。まあ、場所をとりますからね、羽は。結構ですよ、出さなくて。で、今日はいろいろとあなたとお話をしたいと思っておりますが」

「そうですね」

「やはり人間の皆様方が知りたいことは、どうして頭をおかしくされてしまうのかということだと思っておりますよ。あなた方は急に社会の中に現れ、人々をいかれさせていますが、あなた方はそもそも何者なのですか？ 人間ではありませんよね。それなのに人の言葉を理解し、喋ることも出来るってのが謎ですが」

「うん。そうですね。我々も、そういった、我々のルーツに関しては、あまり詳しくはない。というか何も知らない」

「はっ？」

「うん。つまりだね、我々もわからないですよ。なんで我々があなた方を救うためにあなた方の頭をおかしくしなければならぬのか。我々にも、その理由は、ハッキリとわかっておりません。です

が、生まれてからの性というのでしょうか、スペシャリスト全員がこれは一致している考えなのですが、我々はあなた方人間を救わなければならんです。救済です。ちなみに僕は九歳です。嘘嘘」

「じゃあなんですか。九歳のあなたは、救済のために人間のあたまをおかしくしているけれども、何で頭をおかしくしなければならいいのかという、その理由はわかっておらんのですか。何の確証も無いのに物事を進めていたというのですか」

「うん、まあ、だって生理的に「やらなくちゃ」と思っていることなんだから、そりゃ、やるでしょ。腹が減ったら飯食うでしょ？

それと同じで、人間見かけたら頭をおかしくしたくなるし、しなくちゃならないと思えるわけ。僕たちが生まれた時から、僕達はそういう発想だったよ。それが人を救うことだともわかっていたしね。ま、これも生理的に」

「あなたたちの欲望で我々は人生を台無しにされたというのか」

「そうなんですか？」

「そうなんですかとはどうなんですか？ いいですか、人には夢や希望があったのだ。それをあなたの方が勝手に、欲望で……なんてことをしてくれるんだ？」

「うん……。でも、人間はこれによって救われることもまた事実なんだよなあ」

「今まで、頭に電動ドリルを突っ込んで自害した人や、ピストルで頭を自ら打ち抜いた人や、キムチをお腹に詰めたまま生きるようになった人や、犬のようになってしまった人や、髪型をモヒカンのまま変えないでしかもそれを凶器にしている人など、様々なイカレポンチが生み出されてしまいました。それが救済だと言うのですか」

「ええ、そういう風みたいです」

「わけのわからないことを」

「あのね、人間さん。そうやってあなたは頭をおかしくされたことに対して文句を愚痴愚痴言っていますかね」

「何ですか。言い訳でもする気なのですか」

『言い訳とは違います。あなたたちの思慮の浅さに対して侮蔑の念です』

『どうということ?』

『わからないのですか。いいですか、頭に電動ドリルを突っ込んだ人とかピストルで自害した人とか。確かにそれは、スペシャリストの誰かが彼らの頭をおかしくしたということなのでしょうが、だからと言って、その自害をした原因がスペシャリスト側にあるわけではないんですよ』

『いや、あなたたちの責任でしょう。あなた達が欲望に身を任せて頭をおかしくさせたせいで、彼らは自害してしまったのだ。己の意志とは裏腹にね』

『そこが間違ってるんだよね』

『どうということでしょう松岡さん』

『我々スペシャリストのしていることというのは、あなた達人間は頭をおかしくされたと仰っているが、実際我々がしているということはそこまでたいしたことではないんですよ』

『と、言いますと?』

『もう、面倒くさいなあ。いいか? 我々があなたたちの脳味噌に行っている干渉はね、そんな、頭をおかしくする、なんて大それたことでは無いんです。我々があなたの脳味噌に行っていることはね、あなた達の脳味噌の枷を外しているという程度のことなんです』

『枷? 枷って、どうということ?』

『つまり、我々があなたたちの脳味噌に行っていることは所詮隠れているあなた方の欲望を表出させただけのことであって、頭をおかしくしたなどということではないんです。いいですか、例えば、今あなた、あなたの脳味噌の枷を私にもうとっくに取っ払ってあげているんですよ』

『え、ええ、えええ!? もうおかしくされてるんですか、私』

『そうだよ。君は君たちの間柄で言っている「頭がおかしくされている状態」に実は既に陥っているんだよ。だけど、君は自害なんて

しない。それどころか、仕事をしつかりと行えている。それは君の欲望がそれなりに叶っている状態だからなんだよ。それなりにストレスフリーってことなんだよね」

「ス…ストレス、フリー」

「我々スペシャリストの役割は、人間に貯まり過ぎている抑鬱もしくは抑圧を取っ払わせて救出させる、ということなんだと思いますね。実際には知りませんが。まあ、その行いをしている結果、これだけ社会が混乱してしまうとは想像もしませんでしたかね。ま、朝日が昇らないということも混乱の一因なわけですから、結局、社会が混乱しているのは我々の責任ではありませんよ。むしろ、抑圧或いは抑鬱を溜め込みすぎている人間たちに責任があると言ってもいい。自らに巣食うストレスを解消することが生活の中で自らでは不可能だったから、我々の様な存在が生まれたのかもしれないですよっ?」

「…わけがわかりませんが」

「あなた方はストレスの中で悩み抜いていてそれを解消する手段も持ち合わせていなかった。それが少数の一部の人間の生き方だったならば、我々だって世の中に表出することは無かったが、しかしこうして表出してしまった。あなた方は我々スペシャリストのせいで世の中がおかしくなったなどと責任を押し付けるが。逆なんですよ。あなた方が社会で耐え切れなくなって泡を吹いたから我々が生まれた。そしてあなた方の望んでいる状態へと、我々はあなた方を導いてあげただけのことです。そのために、あなた方が日々溜め込んでいる抑鬱もしくは抑圧の、止められているのを、ちよつと無理矢理引きずり出してあげるのです。まあ、だから、自害した人もいたようですが、それはその人自身が本当に望んでいたことなのですよ、実は。抑圧されていただけで、彼は心の奥底ではその行動を望んでいたのです。自害という選択を」

「よけいにわからなくなりました」

「わからないならわからなくても構いません。所詮、我々スペシャ

リストはあなた方を救済するためにある存在。あなた方の望むままに、あなた方の生きたいがままに。その方向へと導いてあげる役割を持つているだけの存在ですからね、我々は。そんな存在の言うことを深く理解する必要はありません」

「……………」

「妙な空気になってしまいましたね」

「一ついいですか？」

「なんででしょう」

「あなた方を作ったのは、我々人間だ、とあなたは仰っているので
すか？」

「そうですね。あなた方の抑圧されている感情が、爆発した結果、我々が望まれました。生まれました」

「何時、爆発したんですか」

「知らない。何時の間にか我々は社会で存在しておりました。そして世の中の枷をどんどん外し、どんどんめちやくちやを表出させ、どんどん数を増やしました。最近は数が減りましたよ。あなた方人間が素直に感情を爆発させているから、我々が必要なくなってきたのです。はははははは。社会は平和ですね。人間たちの望んでいる姿に陥っているのですから。欲望のままに」

「でもこのままでは人間は滅びる。それを我々人間が、望んでいる
というのですか。滅びることを」

「この社会ではそうなのでしょう。滅びることを望んでいるから、
滅びる方向へと向かっているのです」

「そんな！」

「ですがまだ、我々スペシャリストが行わなければならないことは
あります。ハッキリ言って、今までの行いは第一段階でしかありま
せん。これから、第二段階に突入です」

「だ、第二、段階、ですか？」

「ふふふふつふふふふふ。皆さん、お楽しみに！」

「って、あ、ちよっと待ってください」

「なんですか、せつかく、決めたのに」

「最初に、何もわかってないって言ってるけど、あなた方、いろいろわかっていらっしやるじゃありませんか。何で私たちの頭をおかしくさせているのかとか、全部、理解してるじゃないですか。何が、理解出来ていないだ」

「演出ですよ」

「え、えんしゅつ…」

「盛り上げるために、知らないことも知っているフリをし、知っていることを知らないフリをする。それはいけないことですか？」

「無理矢理な感じがして、話に説得力がなくなります。これでは人々はあなたの話を信用してはくれません」

「はははは。いいんですよ、スペシャリストは信用されなくて。それに、いきなり「私たちは全てわかっています」と言っても、あなた方人間はすぐには信用してくれませんからね。みんな、無駄に疑り深い。だから、はじめに知らない風な、演出を利かせてみたのです。よかったですでしょう？」

「テレビの前の皆さん、馬鹿にされた風がして怒っていらっしやると思いますよ」

「ははははははは。申し訳ありませんでした。では、これから第二段階がスタートします。もっと我々スペシャリストが、あなた方をあなた方自身が望む方向へと導いて差し上げます。水先案内人って奴？ では、これにて、第二段階が、スタートオ…」

ため息

冬の風は冷え冷えとしていて、ボロ布だけの人間たちを苦しめている。だからそこから中で焚き火が行われている。だけど早く暖まりたいと願う人ばかりが集まるせいで、焚き火が他に燃え移らないようにするという配慮があまり為されない。その結果、火事が頻発するという悲劇。公園にはそこから焼け野原が広がるようになってしまった。多くの人が燃えだし、多くの人がやりきれない思いに駆られて泣いた。そして人々は虚脱状態のようなものに取り憑かれてしまい、幽霊のような陰気さで、焼け野原の地面に横たわるようになった。或いは、死んでいる人もあった。餓死である。

スペシャリスト松岡の放送を見た人間は少数だ。もはやスペシャリストがどうこうとかどうでもいいと思う人間が多数で、そういった者は生きる気力を無くして自ら飯を探す能力さえも欠けていた。放送を見た人間は、例えばほっ太氏もその一人のだが、しかし多くの人間の感想が「ふうん」の一言か、もしくは舌打ちをするかのいずれかであり、様々な真実を伝えられたにも関わらず特に行動を起こす者はいなかった。何故ならばみんな疲労しているからである。ただ、やはり『第二段階』について気にかかる者は多かった。後々にそれについて相談し合う者もいた。

「第二段階って何だろうな」

「第三段階もあるんじゃないか」

「RPGのラスボスみたいな感じだね」

「世紀末だな。世紀末」

第二段階に何が起こるのかの予想を付けられるような賢い輩は、公園の中で潜む人間の中には誰一人としていなかった。適当に世間話をしながら、時折暴力を振るい碌でもない物を食い、いつ自分も殺されるかわからぬ恐怖に怯えながら、ただ何もすることが無いので冬の寒さに震えるのみ。人々はボロ布を纏いつつ、寒さを逃れる

ために毛布を必要とした。実際に毛布を探すという行動に移せるような体力のあるものはもはや少なかったが。

誰も彼も食べる物の確保だけで精一杯の日々であった。ちなみにほつ太氏は体力があるので、毛布を探し回る側の一人である。

だがほつ太氏も疲労しているのには変わりなく、やはり何よりも彼からは活気が失われていた。

身体にも異常が発生している。常に頭に重りが乗っかっているような気分で、多少、道を歩いただけで頭痛が起きる。脳味噌の内部に住んでいる小人にユサユサされているような苦痛だ。それに生きていて何だかぼんやりとするばかりで視界に膜が張られているような気分さえもあり、耳も通しが悪いらしく、入ってくる人の怒声や叫声に体が反応することも無い。反応しないのは耳が悪いのではなく脳が悪いのであろう。前屈みで、頭を重たそうにしながら、彼は歩く。

ほつ太氏は誰から見てもしんどそうに道を歩いているのに、彼は自分がそんな風に他から見えてしんどそうに歩いていることに気が付いていない。のそのそ、歩いてるのに。頭が重いことに関しては、理解している。揺さぶられる脳味噌は日々、子供のように悲鳴を上げているのであり、全身に痺れるような痛みをもたらす。ほつ太氏の、苦痛。

山のように盛り上がっている膨らみに、彼は腰を下ろして、疲れた肉体と精神に塗れてドロドロになりながらため息を付いた。はあ、と。胡座を掻きながら、周囲の光景を見回した。夜の暗闇を。最低な暮らしを送っている人々が屯っている公園の夜闇を。

何故、このような有様に陥ってしまったのでしょうか、とほつ太氏は小さく呟いた。誰にも聞こえない針の穴のごとく小さな声で、今、彼の目の前に広がる情景を彼は否定したい。

三人の人間が、すでに息絶えているスペシャリストを取り囲んで『かごめかごめ』をしている。その三人の服装は原始人だとも言うのか、葉っぱを胸部と股間にくっつけているだけ。いや、目を凝

らせばそれは葉っぱに擬似している存在だということが判明する。彼ら三人はスペシャリストの漆黒の羽を胸部と股間に貼り付けているのだ。

そんなのを眺めるだけでも気分が嫌なモノになるのに、耳を凝らせば、遠くからは絶叫。『きゃあああ』とか『うぎゃあああ』とでも言うような苦しみの悲鳴。

「明美に拷問されている不良の声とかだろうか」

ほっ太氏はぶつぶつと独り言をする。ほっ太氏は悲鳴によって明美という人物のことを思い出させられる。だが彼にとっては明美などという存在はどうでもいいというか、あまり頭で彼女について考えたいと思えない。

何故ならば、ほっ太氏にとって明美は歓迎すべき人物ではない。

彼女は横暴で策略に長ける、井戸端会議で常に会話の中心になるような、典型的嗜好きおばはんみたいな性格をしているからだ。だからほっ太氏に限らず、大抵の男は彼女が恐ろしいから歓迎したくない。顔は綺麗なのだが性格が異常な程に捻くれているので、一種のカリスマ性というか、威圧感といったものを持ち合わせているのが明美なのだ。だからほっ太氏は明美が苦手だ。彼女に関わると碌な目に合わないというのを理解している。彼女は馬鹿な男を奴隷のように扱い、それに対してなんらの良心の呵責も感じない魔女。そんな手強い人物であるから、彼女は公園で実質もつとも力があるというか、周りにもつとも強く影響を与える人物である。だからたくさん配下がいる。老若男女問わず。性格が悪い人間にたくさん人間が集まるなんて不思議だ、とほっ太氏はいつも思うが、だが皆が彼女の配下にしてもらいたがる理由も、ほっ太氏にはわからなくもない。皆、力が欲しいのだ。己を守ってくれるような屈強な存在に付き従うことで、命の安全を確保したいということだ。じゃあ何故ほっ太氏は明美に付き従おうとしないのかと言えば、それは無論かれが恒龍と同化しているから。

この絶え間ない悲鳴は、いつも通りに明美が配下を拷問すること

で生じる悲鳴なのだろう、と遠くから響いてくる悲鳴を聞きながら
ほっ太氏はうんざりする。

（おそらく鞭とかでしばかれてるのである。明美は悪趣味だから
な。ああ、配下の奴らは可哀想だな。俺の知ったことじゃないけど）

ほっ太氏は薄情なことを止め処なく考えながら、再び襲い掛かっ
てきた頭痛に、苦しんだ。頭痛を抑えるために忘れるために言葉を
呟いて気を紛らわそうと思ったので何か適当に言ってみた。

「子供がゆさゆさ」

呟いた後、『ああ、俺はなんで気持ち悪い言葉しか呟けないんだ
ろう。意味不明じゃん。なに、子供ゆさゆさって』と感じてフツと
いう自嘲の微笑みを浮かべてしまう。だがもう、そんなことはほっ
太氏にとってはどうでもよかったりもする。自分がいくら気持ち悪
くなるうが、不気味になるうが、どうしようもなくなるうがどうで
もいい、とほっ太氏は思っていたりする。

そんな彼はため息を一つ。そして、ブランコを漕ぎたいなあと言
う逃げの思考に入った。立ち上がり、頭痛に苦しみながら、また奇
妙な歩き方。とここで、歩いて、夜闇を散策。人々の狂っている様
を眺めながら頭の痛みに耐えながら、明美に拷問されていると思わ
れる悲鳴を聞きながら、夜空に飛びまわっているスペシャリストた
ちの鳥の羽を見ながら。彼はブランコを漕ぎに行く。

布団のことなど、もう忘れていた。

若ハゲ？

ブランコを漕ぐとほつ太氏は様々なことを頭の中で考える。ブランコと頭が連結して連動しているということ、彼にとつてはブランコに乗っている時間は楽しい時間だったりするのだけれども、そんなのは他人からしたら頭がおかしい様子にしか見えないのでほつ太氏は公園の中では既に『頭がおかしくなっている人』として確認されている。そりゃそうだ。

余りにも漕ぎ過ぎて頭痛がひどくなったので、数回漕いただけで彼は基地に帰ることに決めた。

その途中で男の子に出会った。泣いていた。髪の毛の所々が禿げているのが痛々しくて印象深い。全身真っ黒で、骨と皮しかないようなひどい有様で、瞳も濁っている。瞳から涙が幾つも零れ落ちていた。

「よく生まれてここまで成長することが出来たものだね。こんな公園で」

率直な感想をほつ太氏は呟く。まるで独り言のように小さな声で泣き止んだ男の子は、嗚咽しながら、ほつ太氏の言葉に答えた。

「何も考えられなくなっていたら、こんな様だったの。どんどん小さくなってるの。多分、もうすぐ赤ちゃんになって、そして……ああ！」

男の子は苦しそうに眉を潜めた後に、何処かへと駆けていってしまった。

意味不明だなあ、とほつ太氏は思う。

「やはり子供たちも大変なのだ。大人たちの気が狂い、子供までもおかしくなったか。ふふ、こりやどうしようもないね。これで第二段階に突入したら、本当、人間は滅びるのかもね。ていうか、今のがもう第二段階の兆候とかじゃないんかな。ははは。そりゃないか」

ほっ太氏は薄ら笑いを浮かべながら、布団のことなど頭の片隅にも無しに基地へと帰った。

基地に到着した頃には、男の子のことも忘れた。頭痛が激しくて吐き気もしていたから、思考をする余裕すらも無い。

薄暗い土竜が住むような基地。その地面に足を降ろした時になつてようやく、ほっ太氏は布団のことを思い出した。薄明かりにひっそりと照らされる、青白い顔のモヒカン姉を視界に入れた瞬間に彼の頭で電光がはじけて布団のことを思い出した。そしてほっ太氏は、

「ああ！」

というなさない悲鳴を上げてから、

「姉は大丈夫か。生きてるか。すまん、布団を忘れた」

とこれもまた、なさない報告を、躰を掻いている恒龍へと叫んだのだ。その叫び声を聞いた恒龍の眼やにの付いた黒目が、見開いた。「…ここはどこだ？」ねばけている。

（恒龍も、寝ていた。ならば誰が姉が無事かどうか確認していたのだ？）

（答えは簡単に出る。誰も彼女のことを看病していなかったし、様子を伺ってさえもいなかったのだ。恒龍以外にはこの場所に人も龍もいない。もう一人の住人である俺は布団を探しに出掛けておいて結局自らの頭痛とブランコに気をとられて布団のことなど忘れて収穫もなしに帰って来た。寝てる恒龍も悪いが俺も悪いじゃないか。これでこの姉が死んでたら俺はどうすればいい。何をどうすればどうなるのか、わからないんだが。手を当てて、命があるかどうかの確認を）

ほっ太氏はすぐさま命の確認をしようと思い、一瞬戸惑ったが、彼女の左胸に耳を当てた。心臓の音を確認しなければならぬから強く耳を押し当てて、生きてるか確かめようとした。その確認の途中で、（よく考えたら脈があるかどうか調べればいいんじゃないん）ということに気が付き、ほっ太氏は何だか恥ずかしかった。だけど

そんな場合では無いのだ。姉の命の有無を確認している時に恥ずか
しがっている場合ではない。彼は、頭痛に耐えながら、耳に神経を
集中させる。

そして…。

やがて聞こえてくる。

トクン。 トクン。

とても小さい音だったが、間違いなく聞き取れた。

「ああっ！」

再びほっ太氏はなさけない叫び声を上げ、そして腰を抜かしてパ
タンと仰向けに倒れた。

「よ…よかった…生きているというのは、よかった…こんな、こん
な…。ああ、頭が、いてえ」

安堵した息を付くと同時に、ほっ太氏の脳内に巢食っている小人
達が脳味噌をグリグリ揺さぶる。ほっ太氏は思う、めちやくちゃ頭
が痛いんだけど俺の方が重症なんじゃないのか、と。

しかし寝込んでいるモヒカン姉の二の腕などに触れてみれば、も
う死んでるんじゃないかと思えるくらいに冷たい。アイスクリーム
じゃないんですか、と尋ねたくなる程に冷え切っていた。さらに試
しにモヒカンに触ってみると、なんと、今まであんなにも鋭利だっ
たモヒカンが、まるでコンニャク或いはワカメであるがごとくふに
やぶにやではないか！やはりモヒカン姉には毛布が必要だったのだ、
今は生きているがこのままでは本当に凍死してしまうのかもしれない、
い、とほっ太氏は頭痛に耐えながら深刻に悩み、そして決意した瞳
となり体を起こした。

「よっしゃあ！ こういう時には全力で努力を欠かさないことによ
って毛布も軽くGETしちゃうしかないぜ！ あはは、待ってるモ
ヒカン姉！ 明美の腰巾着どもがちよつと面倒だが、毛布一つくら
いぐーたら軒かいてるホームレスから奪い取ってやるぜ、うははは
ははは！ …あたまいてー」

疲労をかつ飛ばす程の無理矢理元気を爆発させて、ほっ太氏は再

び基地の外へと飛び出して行きました。頭が痛いのでしょうか、彼は足元がふらふらだが、それでも毛布のために危険な公園へと飛び出していく彼は勇ましい。そんな彼を、恒龍が背後から応援しました！「頑張れよ！ わつついは毛布いらないから、一人分でいいんだぞ！」

彼はそれだけ言うと満足したような顔つきになり、ぐーすかと再び躰をかきはじめた。

本当、糞な龍ですね。しかしまあ、今はそんなことを言及している場合ではないでしょう。

ほっ太氏は情熱に溢れているのです。

しかし彼はこの時まだ気が付いておりませんでした。

自分の髭が、多少、薄くなっていることに。少し薄くなっていた髪の毛が、多少、息を吹き返していたことに（若ハゲ？）。

螺旋

（夜闇がさらに夜闇でとつても夜闇っている。こんな夜闇の中で俺は光り輝く光源。つまり世界の希望とは俺であり、つまり世界のメシアとは俺のことである。そんな俺が今全力で人のために姉のために、こんなに頭の中で小人が煩わしくてしんどいのには頑張つて、毛布を見つけ出すために誠心誠意のハートを燃やして情熱がマキシマムな、ホルモン。だから俺は小人たちの圧迫になんか敗北しない途中でブランコに逃げたりもしない。毛布を見つけ出し、姉のアイスクリーム過ぎる憐れを救うために、鬼畜生ばかりが巢食うこの公園で俺の両足が爆発している。心が爆発している）

ほつ太氏は、頭が割れそうな程に激痛なことを紛らわせるためであろうか、普段よりも脳内での思考が可哀想なほどに痛々しい。

だがアドレナリンもしくはドーパミンいやいやエンドルフィン辺りが大量に分泌されているのだろうか、他人から見たその時のほつ太氏は、絶望的夜闇な垂曲公園の内部で確かにマザーテレサ並に神々しい光を放っていた。活き活きしているのだ。彼はその時、たしかに光源だったのだ。

だが自らが光源の状態で見回したほつ太氏は、その周囲のあまりの夜闇っぷりに、あり得ない程の恐怖を感じた。普段は感じないのに。

『 例えば、向こう側で死んだ魚の目のままにチエーンソーの刃を回転させている、明らかなる奇人がいた。そいつはぶつぶつと、言葉を呟いている。例えば、木陰に体を隠しながら、頭だけひょっこりと伸ばして周囲を伺っている気持ち悪い胴長の男がいた。そいつはキョロキョロと、忙しく辺りを窺っている。例えば、以前『かごめかごめ』をしていた三人組が、何があつたのだろうか、三人ともそれぞれに武器を持っているのだが、その内の一人の武器が、頭

蓋骨だった。例えば、スペシャリストの漆黒の羽がもげて地面に転がっていて、その近くにその持ち主と思われるスペシャリストが集団リンチに遭っていたりもした。』

このような光景は今まで絶えず公園で生活していたほつ太氏からすれば『既視』でしかないはずだった。ありふれた当然のほつ太氏であった。しかし気分がウキウキで気持ちが悪持ちがメシアだったのが悪いとも言うのだろうか、今の彼にはそれらの既視がとてつもなく恐ろしかった。

目が覚めたような感覚だった。

今まで感じていなかった、忘れていた、あり得ない社会の異常を通常としていた己の感覚が、全否定されるような感じだった。表が裏となつて裏が表になる。己の感性が逆転。

(弱つたなあ……)

途端に気分が悪くなり吐き気がほつ太氏に襲い掛かってくる。陰りに潜んでゲロしてしまおうと思ひ茂みの陰に向かう。すると、丁度そこに亡骸があった。まだ白骨化していない、亡骸。肉が腐り始めているその亡骸に、蛆虫が集っていた。

『うじうじ』

吐いた。ほつ太氏は、蛆虫も亡骸も、それらの二つに纏めてゲロをぶちかました。

吐いた後には突然のゲロで溺れてしまつてもがき苦しむのかくねくねしている気持ち悪い蛆虫たちのもがき苦しむ姿とシチューのような光景。(ああ、まるで蛆虫が俺たち人間のようじゃん)と察したほつ太氏は、全身が途端に痒くなつてきたので、痒い所を所構わず掻き掻いた。掻き掻いて掻き掻いて、赤く腫れるまで彼は己の肉体を掻き掻いた。

汚水

掻き掻いている途中、頭で一瞬活字が蠢いたが、すぐにほつ太氏

はそのことを忘れる。と同時に痒みも忘れる。だが、頭がまた小人にユサユサされるように陥ってしまった。もう溺れている蛆虫を見ている場合ではなかった。頭が痛くてもういろいろと大変なほつ太氏は、しかし布団を探す使命を忘れてはいなかった。茂みの陰から飛び出てふらふらよたつきながら道へと戻った。(ああ、頭がいたい…)いつもの調子に戻ると、周囲の異常夜闇に恐怖をあまり感じなくなっていたので、不思議だったが、頭痛が激しくてそれについて考えることはほつ太氏には不可能だった。だから彼は道を歩く。とぼとぼ。とことこ、疲れ果てた後姿で。途中、狂っている人の言葉が頭に響く。

「ポンでピンで跳躍の嵐。抱きしめあっているカップルにうふふ僕ら。破壊者一号と名づけてくれたまえ、二号くん。ほら、返事はどうしたの。わん、とか、にゃー、とか言わないとうふふだよ」

「はい！ 僕の名前は三号です。今日は公園で一号さんとお散歩ボコちゃんです？ ですが明日からはもつと一号さんと仲良くなるために、あそこの陰りにちゅちゅちゅさ！ もう、加減を知らない暴走。全ては…」

「はい、OK！ いい絵が取れたよ三号くん。これから次の撮影シーンに向かうから、悪いんだけど頭蓋骨を取ってきてくれるかな。あそこで争っている人々が振り回しているあれ。あれが心なんだよふふふふっふ」

それらの狂っている言葉ら全てもほつ太氏の頭痛に変わる。世界がほつ太氏の頭痛のために回る。

(世界が頭痛のために？ 不思議なことだ)

夜闇に恐怖したり亡骸や蛆虫を見たりですっかりテンションがいつも通りに戻ってしまったほつ太氏は、それからしばらく歩いている内に、今度は、歌を歌うべきだという焦燥感に襲われたりする。自分でも何故そのような感情が沸き立ってくるのかまるでほつ太氏には理解出来なかったのだけれど、しかし歌を歌を唄っていたいのだ、次の瞬間には、彼の歌った歌…夜闇に夜闇して響く…。

やっぱりそれもすぐに忘れました。

それから二十分も歩いたところでしようか。彼の気力も限界に近づいてきたころのことです。彼は公園の向こう側に、街灯に、照らされている、毛布を、遂に見つけ出しました。現実のようでした。幻ではないようでした。確かに、街灯のスポットライトに当てられてそこに毛布があったのです。見間違いではなく。

頭蓋骨のことなど忘れて、彼は、感謝感激雨嵐の気持ち。

(…感動)

可愛らしいライオンが描かれているお子様向けな感じの毛布で、汚れが目立つが破れている箇所などは見受けられないし羽毛だと思われた。ほっ太氏は、感謝感激アメフラシ。駆け出しまして、彼は毛布を手に取ります。ふかふかです。気持ちが良い、羽毛の触り心地で暖かそうです。頭痛が激しいのさえも止むのではないかと錯覚したくなる程に羽毛は安らぎです。

「いやっほう！」

頭痛なのも忘れて彼は飛び跳ねます。ウキウキ気分が止まない内に毛布を肩に担ぎ、彼はスキップでもしながら基地に帰ろうかなと思案します。

実際にスキップをするために足に力を込めて軽快な足捌きを行う準備に入ります。(久しぶりのスキップ、出来るかな?)とか思いながらほっ太氏は足を持ち上げました。

しかし彼はスキップに失敗します。運動不足だとか久しぶりすぎるからという理由で失敗したのではありません。あまりの衝撃で、スキップをする余裕すらも一瞬にして攫われてしまい、肩に担いでいた毛布も地面に落としてしまったのです。

『憎しみに憎しみを返した時、あなたは報われる?』

女の人の声で、背後から。

振り返るとそこに、顔全体を覆う程の前髪をだらんと不気味に垂らしている、胴体が蜘蛛の不気味な、かつて漆黒の部屋で出会ったきり一度も会わなかった、その、怪物。

街灯のスポットライトに、照らされていました。

叫び

その蜘蛛人間の背甲には青色の花が一輪あつた。背甲に、埋まるようにしてくっ付いていて蜘蛛人間の背中で儂げに揺れている。スポットライトに照らされているその青色の花からは透明色の蜜がきらめいていたが、何故、蜘蛛人間が背甲に青色の花を埋めているのか、花は何故、蜘蛛人間の背甲等で生きていられるのか、それはほっ太氏にはわからない。

だがそんなことはどうでも良かった。ほっ太氏はみるみる落ち込んでいく。毛布の発見という、目標を達成できたことの安堵感もはや失われていた。感情が再びガラツと転じた。それは、目の前の蜘蛛人間が死神のように見えたから。髪の毛をだらんと垂れ流しジツと見つめられるかのような雰囲気で作られると、ほっ太氏は自分が生きてるのが不思議な気持ちにされるのだ。死に手招きされるような気分になれるのだ。

だからだろうか、ほっ太氏は落ち込みながらも、目の前の死神を受け入れるような気分になつてもいたのだ。手招きしている死神に、そのまま付き従つて滅びてしまおう、それでもいいのではないかな、とも思えるのだ。そういう気持ちに襲われている彼の脳味噌からは、自然と頭痛も治まっていたし、疲労しきっている心もやけにスッキリしている風で、姉が寝込んでいることもブランコのことも考えず、ただ川の流れにのつかるがごとく。

だからほっ太氏は蜘蛛人間に慄然とすることもなく、むしろ平然とした調子で、言葉をかけることが出来たのだ。死が訪れるまでの時間を数日だけ延ばして貰おうと願う、悲しい老人のように。

「こんばんは。なんだか、おひさしぶりな気分ですね。憎しみに憎しみを返した時あなたは報われる、という質問に対しての俺の答えでも伺いに来たのですか。違いますよね。あなたは俺にもっと重要なことをもたらそうとしているのでしょ」

一言一言を噛み締めるようにしてほつ太氏は言葉を紡いだが、蜘蛛人間はスポットライトに照らされるだけで、彼の言葉に反応を示さない。

構わず、ほつ太氏は続ける。

「あの漆黒の部屋で俺があなたに出会った時がきっかけであるかのように、あの出来事からの先の人生はめちゃくちゃでした。龍と同化したと思えばスペシャリストなんていうふざけた名前の連中が現れて、人々はみんなぐちゃぐちゃになりました。こんな世の中で生きていく意味なんて、実際、ありません。価値がありません。おいしいものも食べれないし、生きていく限り、このままでは俺も人間を食べなくちゃ生きていけない羽目に陥るのかもしれないのです。暴力を振るって生きていくことになるかもしれないのです」

ほつ太氏の言葉は、一言一言を噛み締める度に力強くなっている。

だが蜘蛛人間は何も答えない。

だからほつ太氏は続ける。

「誇りというものは俺にとって大切です。いや、誰にとっても大切なのだと思います。自分の生き方をそれなりに実践して生きている状態は、ふにやふにや闇雲に生きているよりはよっぽど幸福です。だから俺はあいつらがやっている馬鹿げた行いを遠目から哀れに思いつつ、毎日、一見無駄に見えるブランコ漕ぎをギコギコやっておったのですよ」

蜘蛛人間は足でぼりぼり顎を搔いた。

むかついたがほつ太氏は気にせず続ける。

「人が目の前で殴られて死んでいく様を俺は何度も目の当たりにしてきました。その度に俺は龍と同化できてきたことを感謝しました。それと同時に、やっぱり、生きてるのが申し訳ないというか、目の前で同じ人間が殺されているのに暴力を振るいたくないと言う理由で他人を救わなかった俺自身のなさけなさに、申し訳ないというか、ひどいなあ俺、といつも思っていました」

まだ蜘蛛人間は顎を搔いていました。

「ただけ顎かゆいんだよ、と思いつつも、ほっ太氏は続けました。ふと、時たま思うのです。社会がおかしくならなかったら俺は、どんな人生を送っていたのだろうか。俺は思うのです、龍と同化することもなく、社会がおかしくなることもなかった未来が、どのような代物だったのだろうか、思うのです。無い物ねだりは心を空しくさせるだけだとわかってはおりますが、最近、疲れている時には考え込んでしまうのです。もしかしたら、嫁だっていたかもしれなかった。子どもだっていたかもしれない。そんな未来を考えてしまうのです。それは無い物ねだりだって心の奥底からわかっております。だけれど思ってしまうのです。だから俺は考えるのに疲れることがあります。だから最近、ずっと、ブランクを漕ぐ時以外は、あまり頭を働かせないようにしてきました」

蜘蛛は違う足で今度は頬も掻き出した。

もうどうでもよかったので、ほっ太氏は話を続けた。

「この社会の中で、たくさん人間が人間に殺されました。たくさん人間がその人生の経緯など関係無しに、手当たり次第と言った様子で殺されていきました。俺はそれをブランクを漕ぎながらずっと眺めてきました。俺は俺の生き方を突き通さなければ生きていけなかったからです。こんな希望も夢も無い空間ではそれが無いと絶望だけがひたむきに溢れるからです。だけどその代わりに周囲の人々はどんどん死んでいきます、或いは怪我などをします。昔、俺の命を救ってくれた少女はキムチを腹に詰めねば生きていけなくなり、その生き方を続けていく内に随分とひねくれた、井戸端会議のうるさいおばはんみたいな性格になってしまいました。キムチを腹に抱えるなんていう大変な生き方をしなければそのような感じにならなかったのではないだろうか、と疑う時、その原因は俺を庇ったことにあるのだと気が付かされて、俺は嫌になります。でも彼女には詳しいことを聞いたことはないのです、実際のところはわかりません。元々彼女は捻くれていたのかもしれない。だけど、考えてしまうのです。目の前で、見知らぬ人も、殺されていきます。食べられて

いきます」

ほつ太氏の息は荒々しい。

夜の風がひんやりと冷たくても、彼の言葉は連なる。

「何かが間違っているような気分がするのです。何かを間違えてきたような気分がするのです。だけれど俺はそれがよくわからない。何を間違えたのか俺にはよくわからないんです、はつきりとは。燐辺がうつすらと浮き上がるだけで、本質が見えてこないんです。だから俺は本質を掴みたくてもっとブランクを漕ぎました。ブランクを漕げば頭が冴えるから、それで何かを掴めるような気がしたからです。その間にも目の前で人が殴られていましたが、しかしそれはどうしようもありませんでした。俺だって助けられるものなら助けなかった。でも、殴られてる奴だって誰かを殴ってきた奴です。だから、そんな奴を助ける必要なんか、やっぱり、なかったとも言えるはずなんです。でも、間違えてきたような気分にも時折、させられるのです。俺は、うつすらと、基地の中で薄暗い電球に囲まれながら、違う未来を想像してしまいます。様々な、もしもを考えてしまいます。疲れてしまいます。くたびれてしまいます。全てがどうでもよくなってしまうことがあります」

ほつ太氏は少し泣きそうな顔になっていた。

しかし彼は、続ける。叫びあげた。

「あいつらみんな糞野郎なんだ！俺がこんなにも頑張っていたことも知らずに身勝手に愚かなことばかりしやがったんだ、あいつら！だから俺はもう一人で疲れちまってさあ！本当身勝手なやつらじゃねえか！そりゃ、助けることはなかったよな、あんなやつら！軽い理由で人間を裏切って傷つけることも、なんでもやって時には殺すよりもひどいことを笑いながら行う！その原因は己にあるのではなく社会が悪いのだ他人が悪いのだ世の中が悪いのだと喚き散らしては愚痴ばかり零しやがって、お前らは何を残したっていうんだ！お前らが残したのは白骨化死体だけじゃねえか、なんで人間を人間が食わなきゃいけないのですか？人間が人間を食べ

てしまうだなんて地獄な光景だとは思えないのですか？ 何故、もつといるいろ深く考えた上で人を大切にしようと思わないのですか？ あなたが大切にされなかったからですか？ それともあなたが裏切られたからですか？ それともあなたが恵まれなかったからですか？ それともあなたが誰にも理解されなかったからですか？ それとも腹が減っていただけなのです？ それともひどく退屈だったから他人を蹴落とすことで快感を得ていたのですか？ それとも俺が今こうやっていろいろ考えてという生き方自体が勝手だとおっしゃるのですか？ あなたは目の前の人を全て救うべきだったとしても言うのですか？ 私は愚かな人間で他人の気持ちを大切にしていなかったとしてもいうのですか？ あなた方はそれほどまでに立派な生き方をこなしてきた素晴らしい大層な人間なのですか？ 人間を食う人間がそれ程に素晴らしい存在ですか？ 毎日地球を食い物にしてのさばって数を増やす寄生虫のような我々はそんなに素晴らしい存在ですか？ それともこんなことは全てがどうでも良いことなのですか？ 結局、たははと笑って墮落していくのが全てにおいて大切なのですか？ 自宅を豪華にして他人を貧相にさせ、体中を健やかにして己の利益だけを追求することが自然な動物としての姿だでもおっしゃるのですか？ 俺はそうは思いません。俺はそんな単純なものだとは思いません。俺はもつと考えるべきだと主張します。俺は素晴らしい生き方をこなすべきだと主張します。人間の誇りは何よりも大切にされるべきだと思いますと主張したいと思いつつながら、ブランコを漕ぎます。無意味な行動などではありません、僕は主張しているのです、ブランコを漕ぐことは無意味などではありません、僕は本気になって叫んで折るのです、ブランコを漕ぎ漕ぎして本質をつかみとることで、人間としての誇りを掴み取ろうと考えているのです。あいつらには理解できないのです。どこまでも理解することが不可能なのです。このような社会の苦痛を、苦しみを、解放するために行くべき心を持たず、誇りを持たず、何も理解せずに人間の誇りを彼らは裏切っておるのです」

そこまで言い切ると、ほっ太氏は凄まじい程の量の涙を、真っ赤に頬を腫らしながらボロボロだらだらと垂れ流しました。そしてしばらく、子どものように泣き続けました。

夜の風が冷たく彼を通り過ぎていきます。枯葉が彼の足元を通り過ぎていきます。骨が砕けたのがサラサラと風にのって夜闇を旅していきます。

どこか遠くで人の苦しむ声が聞こえます。どこか近くでほっ太氏が泣いているのを馬鹿にする嘲笑が響きます。どこか周辺で人が人を殴ります。どこか周辺で戦争が起きています。

ほっ太氏は涙を拭って、それから沈黙しました。

何も喋らなくなり、鋭い目付きで、蜘蛛人間の方へと顔を向けます。

しばらくの沈黙の後、蜘蛛人間はぼりぼりと掻きむしるのをようやく止めました。そしてほっ太氏にようやく言葉を返しました。

「お前は、そんなに大層な人間か？」

弾け飛んで飛び出して

頭の中で、ガチャーン、という音が鳴った。

それは洗っていた皿を誤って落としてしまいフロアリングと皿が激突、その時に生じる耳障りな物悲しい音のようでもあった。ほっ太氏は、『ああ、割れた』と呑気なことを思った。

何でそんなに衝撃を受けてしまったのか、自分でも良く判然としないが、事実頭の中でガチャーンという音が鳴り響いたのだから、自分は衝撃を受けているということを納得せざるを得ない。『そもそも俺の頭にはお皿があったのか。あるわけがない。じゃあ、割れたのは…？』ほっ太氏は考えようと思ったが、脳味噌は先ほどの耳障りの音のせいだろうか、何か麻痺しているというか震えていると、とにかく、とにかく思考が出来る状態ではない。耳鳴りが脳味噌に直接入り込んだかのような、人生で初めての不思議な気分だった。

何故ほっ太氏は蜘蛛人間のほんの一言で衝撃を受けてしまったのか。いや、そりゃつらつらと様々な考えを、涙を流すほどの本気の考えを、あんなにも懸命に語ったのに一言で片付けられては衝撃も受けようが、しかし頭で耳鳴りがなるなんていう衝撃までは普通受けないだろう。

だがほっ太氏は確かに衝撃を受けていた。そして、その後に湧き上がったのは怒りでもなくやるせなさでもない。ほわわ〜ん、と言った感じの毛布なふわふわ感が全身に巻き起こった感じであった。ふわふわして心地良い。このままこの心地よいふわふわに一生浸っていよう、と思えるふわふわ感。浸浸浸。

ふわふわになったほっ太氏の目の前で、蜘蛛人間は、「刺す」と女性の声で述べた。確かに、ふわふわしているほっ太氏にも聞き取れる力強い声音で、彼女は述べた。そして、八本もある油ぎった足の内の、一本を、黒光りさせながら持ち上げた。見せ付けるように、ゆっくりと、いやらしく。かつて昔、ほっ太氏がほっ太君だった時

に、そうしたのと同じように。

ほっ太氏はふわふわしながら、嫌だなあ、刺されたら痛そうだなあ、と思いつつその黒い足を眺める。細くて長くて、人間だったらモデル級と評される程の美しい足だなあ、きつと蜘蛛人間の世界だったらみんなに羨望と嫉妬の眼差しを受けるような美しい足だなあ、あれに突き刺されるんだったら、まあ、しみつたれた俺の人生の締めくくりには丁度良いのかなあ、まあなんつったってたいした生き方をしてこなかったからなあ、全部頑張って話してみたら『大層な人間ですか?』、だって、うふふ、笑っちゃうよなあ。ああ、耳鳴り、が鳴り響いてるなあ…ほわわ…：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：？ほわわ…くん、なんだなあ…、とほっ太氏はふわふわ状態だからふわふわな思考をした。

蜘蛛人間が歩脚で進みだした。一步、一步、ドスンと、持ち上げている一本の足はそのままに、器用巧みに残り七つの足で地面を歩く。

ふわふわしているほっ太氏の目前まで、一瞬で辿りついた彼女。

もはや彼は夢を見ていて目の前のことに反応できぬ、無能者といつてもよろしいと思う。ほっ太氏はにやにやと意味のわからない微笑を湛えながら、左右にゆらゆらと体を揺らしている。

油ぎつた足の先端が、彼の腹のところに置かれた。蜘蛛人間が「恐ろしい?」とほっ太氏に尋ねるが、彼は不能者の微笑みを湛えたまま頬の筋肉を微動だにさせない。彼のその顔つきを眺めるようにして、表情の伺えぬ黒頭を持ち上げている蜘蛛人間は、「愚か者め」と言う。

「憎しみに憎しみを返した時あなたは報われる。だけどあなたはそれを拒んであなたらしい生き方をするためにブランコを漕いだ。そこがわからない。何故あなたはブランコを漕いだのだ。あなたには龍の拳という力があつた。だけどあなたはあなたなりの言い訳で龍の拳を振るうことを拒んだ。何故、そのようなことをしたのだ? あなたはただの言い訳者だ。あなたは、愚者だ…」

そこまで言われても頬を微動だにしないほつ太氏は、心の中で腹に鋭利な爪が当てられていることに、喜びさえも感じていた。彼にとっては、蜘蛛人間の鋭利な爪が腹部に当たっているのがひんやりとしているのさえも、心地よい。ふわふわな脳味噌で彼は死を受け入れている。

そして最期の瞬間。最期の瞬間に彼は、最後の、はっきりとした思考を行った。

（今、長いようで短いような俺の旅が終わりを告げる。今まで俺が頭で考えてこだわっていた全ては目の前の死神に『愚かだ』という評を下されたが、しかし俺はもう死ぬのだからそんな評に対してこだわる必要さえも持たない。喜ぶべきはこのまま死ぬのだから俺は人間を食わなくて済むのだ。人間を食ってまで生きていくという体験をせずに俺は果てるのが出来るのだ。ああ、全てが無意味だった。全てが価値なしだった。だから、俺は、最高だ。俺は、最高だ！）

心の叫びと同時に彼の腹部に力が入り込んで腸などの臓器など関係なく全てが押し出されていく。腹に突き刺さった黒い油ぎったそれはほつ太氏の想像以上にごつごつとしていて、彼は臓器全てが腹から飛び出るような感覚に襲われて苦痛だった。足はそのまま彼の腹部を貫いて背中から飛び出していく。彼は持ち上げられて足で振り回されるから臓器が全て本当に飛び出ていたかもしれない。大腸もすい臓も小腸も心臓も胃も肝臓も脳も膀胱も肺も全てが彼の内側から外側に飛び出て彼はもう中身がすっからかな骨になった。だから彼はほつ太氏であった全てを忘却してもおかしくない程にもう全部がバラバラだ。ほつ太氏の意識がもうどうなっているのか誰にもわからない。ただ全てを吐き出された彼の亡骸が、蜘蛛人間の足から解放されて地面にくたばったその時に、亡骸は蛆虫たちに平らげられていく。群がる蛆虫がむしゃむしゃと全て平らげていく。お掃除されていく彼の亡骸。全てがやがてなくなるまでずっと、亡骸は貪られていき、この狂った世の中から彼の全ては消失した。骨も

やがて燃やされてしまった。

ほつ太氏が夜闇と同一化した。彼は景色の一部となったのである。彼は空気の一部となったのである。

ドアのドアノブ

さて、黄金の木槌などというものが現実にあつて、そして実際に存在している等という状況自体が現実離れしているが、それを振りかざしている輩が現実離れしている感じであつたから、おかしいことではないのかもしれない。

おかしい存在はポロンという名前。全身純白の羽毛で囲まれているその肉体の幾つもの部分に眼球が隠れている。その眼球はちつとも動こうとはせず、常にどこか一点を見つめている。だけれど眼球はいくつもあるのだから、ポロンはきつとたくさん場所を常に見ているのだった。それがポロン。

黄金の木槌が大好きで、昔から彼はそれを愛している。それ以外のものは愛さない。常に様々な部分を見ている彼だけれども、愛しているのは木槌だけだ。それは彼自身、これまで、そしてこれからも一生変わることのないことだと知っていた。それがポロン。

だからポロンが『存在』の罰を決定する時、そこに躊躇はない。木槌だけを愛する彼は『存在』を愛さない。

彼は何かの判断基準を利用して『存在』が受ける罰を決定付けているようだが、それが何かなのかは、他のモノにはわからない。例えば、ポロンには配下がいくつかいるが、その配下たちにはわからない。だが、たしかに、ポロンは『存在』の罰を決定する時、その判断基準だけを利用して相手の罰を公的に決定する。

だれかに言われて公的な判断基準を為そうと決めたのではなく、ポロンは昔からそうやって来たのだった。昔から繰り返し続けてきていて、その一番最初のこと覚えていない彼には、何故自分が公的な判断基準を為そうとするのかはわからない。だが考える前に習慣として『そうしよう』と決まっているものらしく、いつだって彼は公的な判断基準を揺るがすことなく罪人を裁く。罪人はそれを受け入れなくてはならない。ポロンは公的な判断基準でその

存在を裁いたのだから。真摯なる姿勢に対しては、真摯に受容を
する必要があるのではないだろうか。

だが、たまに、察しの良い罪人は気が付く時もある。

『公的なる判断基準の、公的、とは、なんなんですかあ？』

皮肉を込めて。理解の出来ない判断基準。罰を与えられる側が、
生きていた世界とは違う基準によって、罰を決められるが、ポロン
より与えられる時、たしかにそこにはポロンの個人的な感情は込め
られていない。ポロンは相手を公的に裁いているのみだ。それは真
摯。

だけれどポロンにとっての公的とは何なのか。時折、罪人にはわ
からない。

その罪人にもそのことが理解出来なかった。けれど彼は静かに、
判決を下されるのを待とうと思つて、実際に、待っていた。その場
で直立だけして、脳内で龍と会話していた。

『まったく。本当、なんでこんなことになつてしまつたのか。わつ
ついはあと三千年くらいは生きていたかつたのが実際なのだけれど
なあ。まあ、同化をした時点で、それが叶わないことはわかつてい
たが。まさか、わつついの身体さえもなくなつて貴様と考えを共有
しなくてはならない様に陥るとは想像もしていなかつたよ』

『皮肉な言い方をしないでくれよ。俺だつて何で自分が死んでしま
つたのか理解できないくらいなんだ。けどまあ、こうやって俺の
身体で意識はしっかりあるんだからさ』

『しかしここは不思議な場所だよなあ。あの目玉がたくさん、ポ
ロンという輩は気持ちが悪いが見た事がない存在だ。かつて、天に
もあんなものはいなかつた』

『じゃあ、ここは天国ではないということか』

ほつ太氏は周囲を見回した。

辺り一面、三百六十度、純白と言って良いほどに真っ白。両側に
ピエロの仮面をつけた、西洋の兵隊らしき格好の人間っぽいのが何
人も立っているが、そいつらは槍を持つたまま微動だに動かない。

仮面によって素顔が隠されているため、その暴かれぬ顔がどんな表情をしているのか、探ることさえも叶わない。目の前には裁判所などに置かれる木製の、これの名前はたしか、証言台？が、置かれていて、そしてずっと奥の方に目玉がたくさんある、黄金にキラキラ輝いている何かを持った、奇妙な輩がいる。ポロンと名乗ったそいつは、自分よりも少し上の位置にいて、こちらを見下しているようでもある。だが、こっちに全く興味を示していないようにも見えたりもするが、だが何も探れない、伺えないのは、相手が人間ではない全く未知の存在だから感情を表情や仕草などで伺うのが難しいのだ。

ほつ太氏は、「ううん」と唸った後に、

『何をされるのだろうね。たしか俺は腹を貫かれて死んだ筈だけど、まだ罰か何かを受けなくてはならないのかな』と恒龍に尋ねた。

『わつついにもわからんよ。雰囲気は天に似ている場所だが、天と同じ場所ではない様子だ。きっと今までの常識の何もかもが通じない空間なのだろうから、まあ、何も想像がつかんわなあ』

呑気に恒龍は答える。その呑気さが少しほつ太氏には気に食わなかったが、

『まあ、たしかに、そうだよな』

と答えるしか他に方法がなかった。実際、物々しい武器を携えた不気味なピエロに囲まれている状況だし、逃げるような行動を起こすにしても逃げ場のようなものすらも見当たらない。見える景色もかつてない程の純白が眩いことから、本当、何も想像が付かないのだ。

その内判決が下された。

奥の目玉が判決を語る。

『ええと、このほつ太氏というお方は非常に運勢の悪い御方らしいのですが、突然わけのわからない出来事に巻き込まれたり、変な龍と同化しちゃったり、社会で散々いやな光景を目の当たりにしたのに最期は腹を貫かれるという酷い死に方を、あの地球でした存在だ

そうです。ええと、地球という惑星に関して言えばあれは危険惑星として認知されている存在で、先日われわれによる罰を下したばかりなのですが、それによって様々な混乱が巻き起こったはずです。ですからほっ太氏の罰は多少惑星に原因があるということでも軽くありません。彼には他人を見殺しにしたという罪もありません。しかし、その見殺しにした少女がなぜかキムチ詰めになって甦っていたという、不思議なデータもあります。それが彼自身による幻覚によって生じた現象なのか、事実、キムチ詰め少女が存在していたのかは、データによればはっきりとはしていませんが、ほっ太氏自身は明美というあのキムチ少女が事実存在している輩として認知していますから、うん、存在していたということでもよろしいでしょう。ですがキムチ少女が実際に存在していたとしますと、彼女がキムチ少女になってしまった原因はほっ太氏にあることも間違いないことです。…ん、いや、ほっ太君のときに見殺しの罪をおかしたのですね。では、罰を下す前に、まずはほっ太氏をほっ太君に戻すことにしましょう」

ほっ太氏は驚いたが、逃げることもできない。黄金の木槌が向こう側から飛んできて、ポン、ポン、と頭を何度も叩かれると、あつという間にほっ太氏は、幼くなり、ほっ太君になりました。

「これでよしです。…ええと、あ、ちょっと、待ってね、今、文面を…。あ、OKOK。えーと、ほっ太君には様々な問題が複雑に絡み合っていて、実際、彼は世の中に対して悪もしくは害になる行為を大して行わなかったにも関わらず、最終的には愚か者と認知されて殺されてしまったという事実もあります。あ、それはほっ太氏の話か。まあ、もう細かいことはいいですね。子どもの方が楽しい。大人はいろいろうるさいから。あ、いや、コッチの話。で、彼の存在が行ってきたことはブランコを漕ぐということがメインだったのだそうです。で、これが問題で、ブランコを漕ぐという行為は、非常によくはない行いとして認知されている。ぶらぶらしているだけのブランコを一度漕いだだけでも罪が言及されるのに、

彼は毎日ブランコを漕いでしまったという、実に間の悪いことをやってしまった。だから、なんというか、ほんと、可哀想なんですけどブランコを漕ぎすぎたので、彼は、存在としては非常によろしい存在だったのですが、罰せられることになります。キムチ少女を見殺しにしたことも罰に含まれますが、主にあなたの罪はブランコをたくさん漕いだことになります。そのことを忘れないで下さい。だけど、ブランコをたくさん漕いでいたのはほつ太氏の方で、ほつ太君ではないんですよ。ああ、面倒だなあ。いろいろと複雑であなたに罰があるのか誰にも理解が難しくなってきました。というわけで、彼自身に彼が罰を受けるか受けないかを決めるといふ、選択制という非常に、民主的な行いをとろうと思うのですが、みなさん、いかがでしょうか？ はい、読了。文面にはこう書かれていますねえ。兵隊たち、じゃあ、意見を述べて。YESか、NOか』

ピエロの兵隊たちが、『YES』と書かれた札を、いつせいに持ち上げた。

よって、ほつ太君は、自分の罰を自分で決定することになった。

「選択の間へ連れて行け」

ポロンの大声が響いた後、ほつ太君はピエロ兵隊に引つ張られて、選択の間なんていうふざけた名前の場所へと、連れて行かれた。

『選択の間』、という表札がしっかりと為されていて、その隣に扉。なんの変哲も無い、そこら辺のどこらにでもある扉。こんな扉の奥に自分の罰を『選択』するための空間があるなんて嫌だなあとほつ太君は思う。（家にあるような扉だ。俺がかつて住んでいた家の扉のようにも見えるほどに、変哲の無い扉だ。家、家か…家…）

『あまり物事を深く考えるべきじゃないよ、ほつ太。お前は今、餓鬼で、身体だけじゃなく、きつと脳味噌だつて小さくなったのだ。思考することは素晴らしいが、深く考えすぎてショートしてポンコツ化しても仕様が無い』

恒龍の言葉に、

「わかってるよ」

と答えてから、ほつ太君は周りのピエロを一瞥。

「開けて入れば、わかるようになってるんですか？」

と彼が尋ねると、表情の伺えないピエロの内の何人かが、頷いてみせた。こくこく首を縦に動かす仕草は少し可愛らしくもあった。少なくとも愛想はあった。

『意外と、良いヤツラなのかな』

『一度優しい素振りを見せることは容易いことだから信用すべきではない。ほつ太君になった途端、やつこい人間になったな、君は』

『子どもだから、柔軟なんだろう、思考が』

『ふむ、なる程。まあいい。扉を開け。先に進まねば、何時までも己の素性を明かさない気味悪いやつらと一緒にいなくてはならないのだから』

『素顔を晒していないだけで、素性はわかるだろう』

『素顔を晒していないということは、素性がわからないのと同じだ。仮面で顔を隠している連中を、信用していいわけがない。向こうも、信用しなくて良いと思っっていると思うよ、わつついは』

『ふうん。さすが恒龍さん。…じゃあ、扉のドアノブを』

『うむ。開くが良い』

ほつ太君の小さな手が、ドアノブを握った。

そして選択の間への扉が、開いた。

飛びぬけて

ピエロ兵隊たちに見送られながら、扉の中に入ると、まずは目前に通路が伸びている。

『あ…どこかで見覚えが…』

考えてすぐに思い出す。漆黒の部屋から抜け出る時の通路と、目の前で伸びている通路。とても似ていたのだ。奥に光が見えて、今自分が立っている所は暗い。歩いていけば光に近づくことが出来る。漆黒の部屋から抜け出た時には、小さな公園に飛び出て、そして恒龍とぶつかり合った。

『この先に待っているのは…』

想像が付かない。何が待ち受けているのか。だがほつ太君は立ち止まっていても仕方が無いと感じたので歩を進めた。ゆっくりと一歩一歩、踏みしめるようにして光へと突き進んでいく。

『何を選択するのだろうか。どう思う、お前は』

『良い選択をしたいけどね』

『そりゃ誰だつてそうだな。だが良い選択をした結果、最終的に悪い方向へと繋がることもある』

『そんなこと言ったら、悪い選択をした結果、後々には良い結果になることもあるじゃないか』

『そうだな。だが、人間なんてのは大概、良い方向を選択したがるものだ。だから、大抵みんなが後悔をする。良い方向を選択したつもりなのに！』ということになる』

『じゃあ、悪い方を選択しろっていうの？ 自分が悪いと思った方向に進むことが大切だと？』

『そうは言っていない。ようは、気持ちの問題だ。良い方向を選んだという気分を持っているから、後々ちょっと悪い状況に陥っただけでも、ああ、良い方向を選んだつもりなのに！』と悔しくなってしまうと言っている』

『それは悪い方を選択すべきだ、と言っているじゃないか』

『悪い方には悪い方なりに、悪い出来事が待っているだろう。だが悪い方向を選べば、悪いことが起きるのだと事前に覚悟することが出来る。だから多少の悪いことがあっても後悔をしないのさ。ま、悪い方を選んだからな、と言つてね』

『でも悪い経験をしなくちゃいけないんだろ？ 良い方向を選びたいのは誰だつてそうだ。悪い経験はなるべくしたくない。だから良い方向を選ぶのが当たり前のことだ』

『しかし、良い方向の先にはもいつかは悪いことが生じるのは確定的だ。時は突き進み、世界は広い。広い世界の中では常に幸せと不幸が五分五分の勢いで流れていく。良い方向を選んで幸福を経験したならば、次に不幸が訪れるのはこれは当然のことだよ。世界に存在する限り、常に人々は幸と不幸を経験せざるを得ない』

『はっ。俺はあの世界で不幸ばかりを経験したような気がするけれどね。そしたら、これから幸福になるのかな、恒龍？ 馬鹿いってんじゃないよ。俺は全部幸福で満たされたかったね。幸福と不幸を五分五分に体験することすら叶わなかったのだから。これから俺は、幸福に満たされたいよ』

『それがいけないといっているのだ阿呆』

『酔っ払いのただのジジイの癖に、悟ったようなことばかりぬかすなよ。千年生きてるからつて、何でもわかるわけじゃないだろうが』
『だったら好きにしろ。どうせ、選択は貴様がするのだからな。この身体は貴様のものだ。だから貴様が選択しろ。わしには忠告めいた小言を伝えることしか出来ない』

『そつか。…そろそろ、光が』

『溢れてきたな。眩しくなってきた』

『恒龍』

『なんだ』

『なるべく頑張つて考えて、選択してみせるよ』

『そつか。頑張れよ』

ほつ太君の身体が通路の端に到着した。光に溢れていて眩しい。だがしばらくその場で立っていると、目が慣れて、目の前に部屋が広がった。部屋には、二つの、魔方陣、のようなものがあって、それぞれに紋章が刻まれており、そして二つの立て札が置かれていた。その立て札に魔方陣に関しての説明が書かれているようだった。

『ここが選択の間か』

『眩しいところだな。さっきの裁判での部屋もそうだが、ここは眩しいところばかりだ』

『うん。天国みたいだ』

『そうだな。天も確かに、このように光ばかりが溢れているところだった。さっきのようなピエロ兵隊みたいなのは天にはいなかったが』

『そう。さて、立て札を読もうか』

ほつ太君は左右を交互に見る。右側に一つ。左側に一つ。

右側の魔法陣は群青の色をしていた。群青色に紋章が描かれていて、なんだか複雑に細かく線が入っている。点滅していて、その点滅のせいかわる方陣がやけに幻想的に見える。ほんのりと輝いていて美しい。

左側の魔法陣は黄土の色をしていた。黄土色に紋章が描かれていて、細かい模様などは一切無しに単純、二本の線が横向きに走っているのみで、点滅もしていないが光輝いてはいる。やけにハッキリとしていて力強くはある。

二つの魔方陣が対照的であるのはなんとなく感じ取った。だがどちらが何を表しているのかはあまり理解出来ない。情報が少なすぎるのだ。

『うーん』

『立て札もあるぞ』

恒龍の言葉に促され、ほつ太君は立て札に近づく。まず右側を見た。群青の方だ。だが、そこには細かい情報が書かれているどころか、なんと、中央に小さく、一文字が書かれているだけだったのだ！

「螺旋」

ゾツと背筋が固まる思いがほつ太君にはした。螺旋：自然と自分が今まで歌っていた螺旋ソングのことを連想してしまう。（関係があるのだろうか？）と感じる。

意味はわからない。ただ不気味な気配が途端に、部屋中に広がったような気分がした。背後に人が立っているような気がして、思わず背後に振り返ってしまったが、通路の暗闇が細長く広がっているだけだった。誰が立っているわけでもない。

気を取り直したほつ太君は、左側の立て札へと寄った。黄土の方だ。そこにも細かな情報は何も書かれていなく、中央に、小さく一文字が、書かれているだけだ。

そしてそこにはこう書かれている。

「虚無」

あまり良い一文字ではないと思えた。虚無は、あまりよろしくない、と感じることが出来る。だが不気味さは無い。螺旋、よりはハツキリと、よろしくない、と思える一文字だとほつ太君は感じる。

屋内は静まり返っている。点滅している群青の幻想。力強く輝く黄土の二本線。どちらの魔方陣も、何百年もそこで息づいていたかのように、平然とそこで佇んでいる。部屋は灯りがあるわけでもないのに眩くて、六畳半程度の広さしかなく、なんの装飾も為されていない簡潔さ。

その部屋の入り口で、ほつ太君は立つ。立ったまま、どちらかを選択することを、余儀なくされている。己の意志で、「螺旋」と「虚無」のどちらかを選ばなければならない。

どちらに何が待っているのかは想像が付かない。もしかすると虚無を選択しても螺旋を選択しても何も変わらないという可能性もあり得るのだ。選択をしたところで結果が同じということは随分とよくあることだ。結局のところ、何かしらの理由をつけてどちらかを選択するというのは、己の気持ちをどれだけ納得させて次の段階に進ませるかという作業でしかないのだろう。もちろん変化はあるか

もしれない。虚無と螺旋では文字の意味合いも違ってくるし、含んでいる内容もだいぶ異なるはずだ。だが、結局どちらを選んだ所でほっ太君がほっ太君であることには変わり無いのだから、ほっ太君の人生はそれなりに突き進んでいくしかない。環境が変われば人生が百八十度変わるなんてことはわかったものではなく、問題なのはほっ太君が変わるかどうかだ。そういう意味ではやはり選択は重要なものだ。選んだ選択で、その先のほっ太君の周囲の環境は変わり、それに伴ってほっ太君も自らの姿を転じさせていくのだから。日本に住めば日本の食事を取って体型が日本人らしきものに近づきやすくなるだろう。アメリカに住めばアメリカの食事を取って体型がアメリカ人らしきものに近づきやすくなるだろう。中国に住めば中国人らしい性格になりやすくなるだろう。スペインに住めばスペイン人らしい性格になりやすくなるだろう。イギリスに住めばイギリス人らしい性格になりやすくなるだろう。

ほっ太君が右と左、どちらかを選択するかによって、ほっ太君の先に広がる環境は変化する。それに伴ってほっ太君もそこに合わせた変化を行っていく。だからほっ太君は自ら選択をしなければならぬ。自分の変化に責任を持たなければ、自分の人生を自分でコントロールすることなどは不可能なはずだから。だから彼は、ほっ太君は、恒龍には意見を聞かず、今、彼自身の選択を為さなければならぬ。彼のことを一番よく知っているのは、彼がどんな人間になりたいのかを一番よく知っているのは、所詮、彼自身なのだ。

他に決めさせるべきことではないのだ。他に考えてもらうことではないのだ。

自分で考える努力をし、自分で決定しなければならぬのだ。そのため他人の意見も聞いて、行為に移さなければならぬのだ。

だからほっ太君は、選んだ。今、魔方陣を選んだ。選択の間にて、自らの行き先を、決めたのだ。

今まではそうではなかった。自らの行き先など彼は決めてこなか

った。いや、もちろん生き方などを口癖のように頭で繰り返し、俺は他とは違う、と呟いてきた彼なのだからただ暴力を振るっていた人間よりはマシな生き方だったかもしれない。だが、彼は自分の行き先を、こんなにもはっきりと右か左で、選択したことは今まで一度もなかったのである。ただ、向かう側に、成り行きの側に、彼は向かったはずである。右から左かの人生の分岐点など、今まで本当には、一度も決めてこなかったのではないだろうか。だけど彼はもう逃れることが出来ない。選択の間にて、彼は自らの行き先をハッキリと決めなければならぬ。誰にも言い訳が出来ない、自らの選択を。

「もうだめだね。…大丈夫かな？」

「そんなもん、わかるか」

ほっ太君は少し怯える。選択した側の魔方陣の目の前に立ち、身が竦む。だから彼はその怯えを取り払うために、この物語中で歌った歌を、口ずさんだりしてみたりして。

だが、決意をした時、彼は跳んだ。そして。

青空のように清しい光に包まれ、彼は選択の間から姿を消した。ガラスが乱反射するような線が幾重も彼の身体に走り、どこかへと吸い込まれていく…。

選択の間から、一人の人間が消えた。彼は、人間から少し、飛びぬけて見せた。

銀色平原

銀色の平原。なぜ銀色なのかはわからないけれども、薄く雪が積もっているような、そういう銀色が映像として広がる。数本の枯れている侘しい木でさえも、銀色は修飾している。

そこには蜘蛛の足をした人間たちがいた。一人ではなく、群れ。

銀色平原を横切っている。よたよた、よたよた、長い黒髪を揺らしながら、平原を進んでいる。

その銀色平原の空では、活字の群れが飛んでいた。様々な活字の群れたちが、意味合いもたず空を流れて行き、まるで雲のよう。

様々な活字たちが流れていく様を、時折、蜘蛛人間たちは立ち止まって眺めていたりもする。何の変哲も無い、活字たちだったけれど。

銀色平原には、時折、何のためかはわからないが、古びたテレビが置かれていることがある。それも一箇所にはない。各地の様々なところに、一台ずつ、古びているそれが何の意味であろうか、設置されているのだ。ザー、ザー、と砂嵐だけでも。

或る所に。そこにも一台のテレビがあった。蘇芳色の彩色が為されている小さなテレビだ。全体

的に色が剥げてきていて何年もそこに置かれているのであろうことがわかる。

そのテレビの目の前に、一つ、卵が置かれていた。面白いのはそれは我々が住んでいる世界の卵の通常の配色とは違って、真っ白とか茶っぽいのではなく、群青色をした卵だったのである。

その群青色をした卵に、突然、横ヒビが入った。バリ、バリ、と中で息づいている何者かが早く外に出せと急かしているかのように、その横ヒビは素早く刻み込まれている。そしてやがて、三百六十度にヒビが入り、二つに分離した外殻の内の、上側が一本の鋭い黒足によって弾き飛ばされていった。弾き飛ばされた上側の外殻は、ポトリ、と空しく銀色平原に落ちこちて割れて粉々になった。そんな

ことには気が付かないままに、必死に、中で蠢いていた何者かは、八本もある足を懸命に動かしつつよちよちと卵の中から這い出た。髪の毛の長い油切った背甲のあるそいつは、紛れも無く銀色平原でいくつも闊歩している蜘蛛人間と、同等の存在であった。そいつはしばらくはしんどそうに呼吸を繰り返していたが、やがて少し落ち着いたのか、周囲へとキョリキョリと顔を動かすようになった。それは周囲の状況を確認しているようであったが、そいつは己の手足を見た瞬間に瞳を固まらせた。しばらく、自らの手足を眺めたまま、そいつは動かなくなったが、やがてそれに興味が失せたのだろうか、視線を目の前に置かれていたテレビに向けた。彼はよちよちと八本の足を使ってテレビに近づくと、額をそのテレビのディスプレイに押し付けたりしてみた。砂嵐のザー、ザーが途中で、突然真つ暗な映像に切り替わり、その映像の中で誰か男が座っていたが、蜘蛛人間にはそいつが誰なのかは理解できた。蜘蛛人間は、そこに映っている男がとても懐かしく、愛おしくさえもあった。だから蜘蛛人間は足をディスプレイの中に踏み入れさせたかったが、それは叶わなかった。仕方無く、やがてそのテレビから額を離れた。何時の間にか、映像も砂嵐に再び戻ってしまった。

蜘蛛人間は、それから随分と長いこと銀色平原を歩いた。歩く内に、自分と同じような境遇に置かれている存在がたくさんいることもわかって彼は嬉しくもあったが、しかし次第に彼は、その嬉しさを感じなくなっていた。その蜘蛛人間たちが共食いを好みとしていたからである。

彼は、泣きたい思いに駆られた。そして、悔しい思いにも駆られた。何故、こんなところに来ても彼らは共食いを止めないのだろうか、と心底彼は、他の蜘蛛人間たちを恨んだ。憎く思った。

その内彼は、一つの言葉をひたすらに繰り返すようになって、毎日、毎日、それを言いながら銀色平原を歩くのだけを趣味とした。空に流れる活字たちを眺めるのもたまにはやったが、活字を見ていても何も楽しくなんか無いな、とその内気が付いたので、彼は空を

眺めるのを今後一切しないようにした。彼は、一つの言葉だけをひたすらに繰り返した。周りの蜘蛛人間たちを憎いと思いつながら。

ある日彼は、とてつもなく驚くべき事態に出会う。

「やあ」

彼は話しかけられた。しかし戸惑ってしまい、返事を返す気分にはなれない。だがそいつは続けるのだ、言葉を。あの、般若面黒タイツ姿の男が。目の前で、挨拶をしてきたのだ。後々にたくさん現れたスペシャリストの、あれが。

彼は一台の巨大なテレビの上に腰を下ろしているのだった。そこで胡座を掻いているのだった。

「お久しぶり。覚えてる？」

尋ねられたが彼は戸惑うばかりで、答えることが出来ない。

「螺旋を選んだようだけれども、別に同じ人生を繰り返すわけではないんだ。君は、蜘蛛人間になってしまったものね」

嫌な気持ちにさせられた。確かに、自分は紛れもなく蜘蛛人間だ、と思うからだ。声だつて女性になっていて甲高い。

彼の悲しみなど気にもしないのか、全身黒タイツ姿の男は続ける。「これから蜘蛛人間としての君の生がスタートしていくよ。まず何をすればいいのかわかっているね？　まずは、このディスプレイに入り込んで、君の前世であるほつ太君の前へと姿を現してみるといい。そして少女の腹に足を突き出し、彼女をキムチ少女にしてみようのだから。きっとそれは帰られることではない。君はもう蜘蛛人間なのだから。これから先の君は、蜘蛛人間としての生をまっとうしなければならぬのだから」

その言葉を伝えられた蜘蛛人間は、しばらく俯いたが、彼は立ち去ることはしなかった。目の前にある巨大なディスプレイへと、八本の足を踏み出したのだ。

「いくのかい。それは偉いことだ」

言葉を適当に聞き流しながら、ディスプレイに映っている男の子の姿を眺めながら、彼は涙を流すことはしない。蜘蛛人間として、

彼は生きていくのだった。

『憎しみに憎しみを返した時、あなたは報われる？』

そして、ディスプレイの中へと、消えていった。

彼が消えた後に、全身黒タイツ姿の男は、胡座を掻くのをやめて、銀色平原に足を着けた。

空では相変わらず活字が飛んでいる。

大海。天狗話。想起。紫。群青。夢。滅亡。刹那。幼児。書類。悲
愴。浪漫曼荼羅。同情。無。若草。拘泥。電波。枯葉。電柱。蛆虫。
豊穰。暗闇。恥。吐露。現前。対置。家族。逃亡。逃亡。苦慮。演
説。生物。啓蒙。優雅。優雅。愛。異質。自演。遊離。激怒。貴族。
股間。追悼。高層。自負。過労。妄想。虚。貧相。正常。乙甲。羞
恥。逢瀬。組織。蛞蝓。苦。兄弟。退行。援交。進歩。進行。社長。
距離。飛翔。願望。乖離。真実。追憶。真心。法事。報復。笑顔。
機械。登山。渋茶。機会。念。酔狂。飛躍。嘘。伽藍。文章。豪胆。
胆力。富豪。自薦。詠嘆。心。忌憚。労働。幼児。公証。貞淑。借
金。後光。情熱。吐露。邪教。神。夢想。稀代。緑青。徒勞。調教。
放蕩。織毛。真。反語。咀嚼。小梅。破廉恥。潤沢。鬼才。紅葉。
信。製鉄。百足。胃袋。雀荘。

意味の無い、文字列たちがとめどなく流れる。その様を全身黒タイツは見上げながら、大きな笑い声を上げる。そして、「楽しいなあ、楽しいなあ」と繰り返した後、もう一度、大きな笑い声を上げた。そして螺旋ソングを歌った後に、彼は、宣言の合図を、したのだった。

「第三段階が、スタートオ……」

エピソード

命が繰り返されて廻って行く。

そうやって魂を違う器に入れてリサイクルする行い。

それはポロンの知っているようで知らない公的なる判断基準によれば罰を受けるに値する。

魂を一つ精製するのは非常に手間のかかる行いだ。コストがかかる。人手も必要だ。

だからリサイクルすれば手間も省ける上にコスト削減になる。人件費だって節約だ。

そう、だからひそやかに魂をリサイクルしようとする惑星というものは、宇宙の中では実はたくさん存在しているのです。ですが、ポロンの知っているようで知らない公的なる判断基準によれば、それは許されることではないのです。何故ならば魂は一度きりの生命をまっとうする、という思考の元でしか輝くことが出来ないからです。命がリサイクルされるから今の生命を輝かせる必要は無いと悟った魂たちは、墮落し、飯を貪り食らい、暴力を振るってみせるような体たらくに陥るのが常だった。だから命が繰り返されて廻って行くことは許されなかったのである。ポロンの知っているようで知らない公的なる判断基準によれば。

だから、地球は裁かれた。地球は真っ黒になり、罰を受けて、もがき苦しんで滅びるといふ刑を受けた。輪廻転生を繰り返したことに對する罰は、公的なる判断基準によれば非常に厳しいものなのだ。まあ、それでほつ太君が経験したような社会になってしまうのは、あまりにも非情だとは思われるのだが……。だが、とにかく地球はもう裁かれたのだ。裁かれた後には罪も消える。一度滅びた地球は、再び再生を開始するでしょう。

しかしほつ太君の魂はリサイクルされて、蜘蛛人間として甦っていました。

これはどういふことなのでしょう…。

地球はまた同じことを繰り返しているのでしょうか！

これではまた罰が振り下るではないか。

しかし、そんなことは我々が知ったことではない。こちら側の世界で生きて飯食って寝て起きて働く我々からしたら、そんな罰のことなど別に問題ではない。

所詮、住んでる世界が違うから。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5800n/>

けんそう！ ～ほっ太君と恒龍と地球～

2010年10月17日01時10分発行